
ゼロと雷槍と竜使い

鮫島時人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロと雷槍と竜使い

【Nコード】

N5774K

【作者名】

鮫島時人

【あらすじ】

「JS事件」が終結し、ミッドチルダは落ち着きを取りもどした。エリオとキャラは久しぶりの休暇を満喫していた。だが、突然現れた謎の「鏡」に二人は引き込まれてしまう、そしてたどり着いたのは異世界ハルケギニアだった！

プロローグ 消失（前書き）

初投稿ですので駄文はご勘弁の事

プロローグ 消失

「ジェイル・スカリエッティJS事件」が終結して二週間が過ぎ、ミットチルダはようやく落ち着きを取り戻していた。

事件の事後処理も一段落着いたため、機動六課の隊員たちに一
日だけが休暇が与えられ
る事となった。

元々機動六課は今回の事件の為だけに暫定的に創られた様な部署なので、近い内に解散となるのだが、事件の事後処理はまだ残っており、正式解散はまだちょっと先で、まだこの先、忙しくなる為、今回の休みとなった。

機動六課ライトニング分隊所属隊員のエリオ・モンディアル三等陸士とキャロ・ル・ルシエ三等陸士は今回の休暇で以前、中断したデートの続きをする事にした。もつとも、本人達はデートがと言う物か解っていない節が有るのだが……。

その頃、同じく機動六課のスバルとティアナも休暇を利用して街に遊びに来ていた。しばらくブラブラしてアイスでも食べながら何をするか考えていたが、偶然エリオとキャロの姿を見かけたので、しばらく二人の様子を見る事にした。

ただ、こつそり見守るだけでも面白くないので、ここにいない振りをして、通信してみる事にする。

「はい、こちらライトニング3」

「はあい、こちらスターズ3、久しぶりの休日はどう？」「ちや

んと楽しんでる?」

「はい、まだ始めたばかりですが何とか」

「いや、また困った事とか無いかなーとか思っただけなんだけどね」

「うふ、ありがとうございます」「おかげさまで有りません」

「そっちはどんな感じ?」

「えと・・・予定通り公園で散歩して、これからデパートを見て廻って、そんな感じです」

「その後、食事して、映画見て、夕方には海岸線で夕焼けを眺めるってプランを作って貰ってますので」

「・・・・・・・・」

あまりにもあっけらかんと言うその声にスバルは絶句した。

「ちゃんと順番にクリアしていきます」

おそらく、プランを立てたのはシャーリー辺りだろうが、やはりこの二人、デートのプランを任務^{ミッション}を任務

か何かと勘違いしてる。

「あんたら、この前の休暇の時も似た様な事言っただけ?」

「えっ? 何かいけませんでしたか?」

「いや、別にいい、気にしなくていいから」「何か困った事が有ったらいつでもコツチに連絡するんだよ」

「はい」

「ありがとうございます」

「じゃ〜ね〜」

そういつて無線を切った。まさかこれが最後の連絡になるとは、この時はまだ、思わなかった。

「たしかこの前の休暇の時は、この後、あの二人がレリック持ったヴィヴィオを見つけて大騒ぎになっただけ」

「あの時は、休暇返上になったから今度は何も起きないといいんだけど」

「スカリエツティも捕まったし、そうそう事件事故とか起きないよ」「だといいいけどね」

その時だった。

「キヤアアアアアッ！」「いまの悲鳴は！？」

聞き覚えのある声だった。「キヤロ！？」「急いで悲鳴のした方に行くよ、異様な光景がみえた。

宙に鏡の様な物が浮かんでいて、その鏡面にキヤロの腕が引き込まれようとしている、それをエ

リオがもう一方の腕を掴んで引つ張りだそうとしているのだ。「キヤロー！」「エリオくん！」

よく見るとフリードもキヤロのスカートを引つ張ってキヤロを助しようとしていた、だが引き込

もうとする力は思いの他強く、助けるどころかエリオとフリードまで一緒に引き込まれそうな勢

いであった。

「何アレ！」「わかんない！でも助けなきゃ！」「慌てて駆け出そうとするが、二人のいる所は直

線距離で100mにも満たないものの、高い段差と植え込みで阻まれており、近寄るにはかなり遠回りしなくてはならない。

「よし」スバルは意を決した。「マツハキヤリバー！セットアッブ！」スバルの体にバリアジャケット

が装着されていく。

マツハキヤリバーのウイングロードでショートカットする積もりなのだ。だがそうしてる間にも二人

の体はどんどん「鏡」に引き込まれて言ってしまう。

「ティアナ、先行くね！」空中にウイングロードを展開してエリオ達の元へ急ぐ。一方、ティアナは

廻り道しながらも六課本部に救援を要請する。

「こちらスターズ3、緊急事態発生、至急救援ねがいます。」

既に先に引き込まれたキャロの体は「鏡」に完全に飲み込まれて見えなくなっていて、エリオの

半身だけが鏡面から露出していた。

「エリオーツ!」「スバルさん!」「手をのばして!」「互いに手を伸ばしあうエリオとスバル、だが

「鏡」はなおもエリオを飲み込み続け、指先まで完全に飲み込み、

「鏡」も消える。その後を何もな

い虚空を掴もうとしてスバルの指が空振りする。

「嘘……」そのままスバルは膝を落としその場に倒れ伏せる。暫くして廻り道してきたティアナがようやく駆けつけてきた。

「スバル、二人は……」

スバルは無言で首を横に振る。「そんな……」ティアナは絶句する。

「エリオーツ!キャローツ!」無人の広場にスバルの絶叫がこだまする。

この日、ミッドチルダから、二人の幼い魔道士が、消えた。

プロローグ 消失（後書き）

いかがでしたでしょうか？・・・・・・・・・・・・・・・・
今頃になって前書きや後書きを書いて、何やってんだる私は。

第1話 召喚（前書き）

遅くなりましたが、二本目、行きます。

第1話 召喚

本部から応援が来たのはエリオとキャラ口が「消失」してから15分程の事だった。

JF704式ヘリが爆音を立てながら広場の中央に降下してくる。ディアの救援要請からわずか15分で現場に到着した対応の速さは他の任務に就いている者や休暇中の者が多くいるこの時期の事も考えに入ればかなり迅速な反応で、さすがは六課と言う所である。もつとも第一報の連絡が六課本部に終わるまでのわずか数秒の間に「鏡」に捕われた二人があつと言う間に完全に取り込まれ消えてしまった為、その速さも意味は無い。

駆けつけて来たのはなのはとヴィータだった。

「なのはさん、副隊長！！」スバルは泣きそうな声で振り向き、叫んだ。

「状況は？」「それが・・・」ティアナは偶然二人を見かけ、傍にいない振りして二人に通信を送っていた事、通信を切った直後、突然キャラ口の悲鳴が聞こえ見ると鏡の様な物が空中に浮かんで二人を中に取り込み始めた事、助ける為にスバルが二人のそばに向かったが、寸前で間に合わなかった事などを話した。

「話からすると時空の歪みに巻き込まれたみたいだね。」

「次元漂流者を保護する立場の時空管理局員が漂流者になっていたらしょーもないな。」

「それは仕方ないよ、次元漂流事故はいつ何処でどう言う風に起きるかなんて誰にも予測できないんだし。」「二人はどうなるんでしょうか？」

「キャラ口は召喚術師だから近い処に飛ばされたんなら自力で戻って来れると思うけど・・・」

召喚術師はその特性上、優れた転移魔法の使い手でもある。あまりにも遠く離れた世界なら次元渡航船での移動を必要とするが、そ

れほど遠く無い世界なら身一つで戻って来る事ができる。

「でも、近い世界に飛ばされたとは限らないし、二人の身に何が起きてるか解らないから、コッチから見つけてあげないと。」そう、時空転移に巻き込まれて漂流者となった場合、比較的近い世界に運よく漂着するケースは稀で、大概が元いた世界を特定するのに時間が掛かる様な遠い世界である場合が多い（管理局に保護される漂流者も大部分がそのケース）

それに二人とも同じ世界に流れ着いてれば良いが、もし二人が離れ離れになっていたら、転移魔法を持たないエリオは自力で戻って来れない。「とにかく調査班の結果待ちだ・・・ね・・・？」見るとスバルがなのは達の会話を他所にその場に膝を落としガツクリとうな垂れていた。

タツチの差で後一つエリオ達に手が届かなかった事が堪えたのか二人を助けられなかった自分を攻め続けていた。見兼ねたヴィータが声をかける。

「あのさ、あんまりそう自分を責めんなよな。」

「でも、私達・・・近くにいたのに・・・二人をたすけられなかった・・・あんな覗きみたいな悪趣味な真似しなきゃ間に合っていないかも知れないのに・・・」

「こんな事になるなんて誰にも解んなかったし、お前達が何したって結果は変わんなかったらうぜ。」

それにむしろお前らが此処に居合わせてくれたおかげで二人が何でいなくなったかがわかったんだ、全く何もわかんねーよりずっと捜しようがある」「でも・・・」「ヴィータちゃんの言うとおりだよ」なのははそう言う公園内のある一点を指差した。「たとえばホラ」そこにはカメラがあった。

「防犯用の監視カメラ・・・でも・・・」

「もちろんあんなカメラの映像だけじゃ大した手がかりにはならないけど、大事なのは二人が消えたのが此処だと解っていること、おかげで私達はこの場所に絞ってここで何が起きたかを調べること

ができる。貴方達が二人の消えた場に居合わせた事が二人を捜す大きな力になるんだよ」

「でも・・・そんな上手くいくでしょうか？」

「いくよ、でもその為には貴方達も二人を見つけるため頑張らなきゃ。このか細かい糸をみんなで繋いで大きな力にして行かなきゃ二人は見つけ出せないよ」その言葉にスバルはハツとなった。

今、一番大変なのはエリオとキャロなのだ、いつまでもここで落ち込んでいたら二人を助ける事が出来ない。

「さあ、こんなところで膝を抱えてる暇はないよ、二人を助け出す為にやる事はいっぱいあるんだからね」「はいっ！」「どうやらスバルは立ち直った様である。

しかし、なのは達は勘違いしていた。エリオ達の身に起きたのは決して自然に偶発的に発生した時空の歪みによる時空転移などでは無かったのだ。

ここ、ハルケギニアのトリステイン王国にあるトリステイン魔法学院では、二年生の春の使い魔召喚の儀式が執り行われていた。

校庭に集まった生徒達は次々に召喚を終えて、それぞれの使い魔サモン・サブバントの自慢話を始めている。

そんな中、一人だけ未だに召喚を終えてない生徒がいた。この召喚の儀に於いて、幾度も失敗を繰り返し、既にその回数は数十回に達していた。

彼女の名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと言い、トリステインの有力貴族、ヴァリエール家の三女である。

「宇宙の果てのどこかにいる私のしもべよ！神聖で、美しく、そ

して強力な使い魔よ！私は心より求め、訴えるわ！わが導きに、応えなさい！」ルイズが杖を振り上げて声高に呪文を唱える。

爆発が起こった。

爆発によつて辺りには薄っすらと煙がたちこめる。その煙の中にぼんやりと何かの影が見える。

「見ろ、煙の向こうに何かいる！！」

「嘘だろ、ルイズが成功させるなんて……」

「これは何か天変地異の前触れに違いない！」口々に勝手な事を言う他の生徒達を他所にルイズは大喜びを始める。

「……やった……私、成功したんだ……！！」

期待と感動に思わず胸膨らまさせずにはいられないルイズであった。

「さあ、私の召喚した使い魔は何かしら？ ドラゴン？ それともグリフォンかしら？」

自分が召喚したであろうモノがいる筈のところまで近づいて行き何が現れたのか確認しようとする。

やがて煙が晴れていくとそこには明らかに自分よりも五、六歳は年下と思われる男の子と女の子がキョロキョロと周りを見回していた。

「ここは……？」

「あなた達……誰？」

あまりにも予想外の結果にルイズは呆然とする。

「ゼロのルイズが平民を二人も召喚したぞおおっ！」

「あはははは、ルイズ、サモン・サーバントで平民の子供を、それも二人も呼び出してどうするの？」そばにいた赤い巻き毛の少女がいう。

「ちよつ、ちよつと間違っただけよ！」

「間違いつて、ルイズはいつつもそうじゃん」

「さすがはゼロのルイズだ！」爆笑が巻き起こる。その笑い声に悔しそうにするルイズ。そのやり取りを召喚された少年と少女

エリオとキャロは呆然と見つめていた。鏡みたいな物に（どうやらあれは転移ゲートだったらしいが）吸い込まれたと思っただけの騒ぎ、これは一体……

「小竜……」青い髪の子供の眼鏡の少女がつぶやく。「えっ？」よく見ると召喚された女の子の傍に手の平サイズの小さな竜が飛んでいた。キャロの使役竜フリードである。ゲートに吸い込まれたキャロを助けようとして一緒に吸い込まれたのだ。

「あつ本当だ、コルベール先生、きつとあたしが召喚したのはあの小竜です。」途端に有頂天になるルイズ、どうやら子供の竜らしいが、大事に育てればきつとそのうちタバサの召喚した風竜にも負けない立派な竜になるに違いない、さあ、早く契約を

「あつ、あのう一体あなた達は何者なんですか？」ようやくエリオが口を開いた。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ！これからその竜を使い魔にするの！渡しなさい！」「えっ！？」

「なつ、何言ってるんですか！フリードはキャロが卵から育てたんですよ！そんな事勝手に決めないで下さい！」

「これも儀式よ、諦めなさい。」「そんな！」

「待ちたまえ、ミス・ヴァリエール」頭髪の薄い眼鏡の男が話に割って入る。

「どうやらこの竜はこの子達のもの様だ召喚されたのはやはりこの子達だろう」

「そ、それじゃあ」「この子達を使い魔にしようとする事になる」「そんな……」

がつくりと落ち込むルイズ、しかし、このやり取りを聞いてエリ

才は戦慄を覚える。

実はミッドチルダとハルケギニアでは「使い魔」と言う単語の意味が若干異なる、「魔法使いの使役する動物」と言う点では共通しているが、ミッドチルダの場合、死亡直前、あるいは最後の動物を素体に人工の魂を憑依させて作り出す人造生命体の事を指す、二人の親代わりのフェイトの使い魔アルフもそうだった、しかし、アルフの場合は生まれて間もなく死病に侵されていた所を使い魔になることでフェイトに救われたという事情がある。ミッドチルダの「使い魔」の定義に基づくなら、まだ死に至っている訳でも無い生き物を「使い魔」にすると言うのは、一旦相手を殺して改造する、と言う事を意味する、まして人間を使い魔にするなど論外である。

プロジェクトFによって生み出されたモンティアル家の一人息子のクローンと言う理由で両親から引き離され、研究施設で非人道的な扱いを受けた経験があるエリオにとつてコルベールの発言はとんでもない物であった。警戒感を募らせるのも無理は無かった。

(エリオくん……) キャロが念話で不安そうに語りかけてくる。

(大丈夫、君は僕が護るから……)

エリオは最初、目の前の集団が転移魔法で人を拉致して生体改造の素体にする犯罪組織か何かだと考えた、しかしよく考えて見ると自分達がフリードの飼い主だと思った時点でフリードを使い魔にするのを諦めるのは変だ、それでいてフリードがダメなら次は人間である飼い主の方を使い魔にしようと言い出すなんて支離滅裂だ、魔法で人攫いをしてどうこうしようとする様な連中なら相手の権利などお構い無しに飼い主も竜も問答無用で改造しようとするんじゃないや無かるうか、そう考えるとエリオにはこの連中の意図がサッパリ掴めなかった。

そうこうしてる間にルイズと名乗った少女が先ほど話しに割って入った責任者とおぼしき男と何やら話をつけ、何かため息をつきながらこっちに来た。

「あんた達、感謝しなさいよね。貴族にこんな事されるなんて、普通は一生ないんだから」

そう言いながらその手にした杖をエリオに突きつける。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴ
アリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者達に祝福を与え、
私の使い魔となせ」

そしてそのままエリオの唇に自分の唇を重ねる。

「えっ？………っ、プハッ、何をするんですか！？」

だがルイズはエリオの抗議には耳を貸さず、今度はキャロの唇を奪いにかかる。

「ん、んんっ………！！」余りにも異様な光景に絶句するエリオ、しかしそんな事を気にする暇も無くエリオの身に異変が起こる。

「くっ、くうっくうっくうっくうっ」左手の甲に激痛が走る。全身が燃える様に熱くなり、エリオはその場にしゃがみ込んで悶絶する。ルイズのキスから開放されたキャロも少し遅れて右手を押さえ、苦しみを始める。

「使い魔のルーンが刻まれているだけよ。すぐ終わるわ」ルイズはこともなげに言い放つ。

やがて痛みが治まると二人の手の甲には焼印のような文字がエリオは左手にキャロは右手にそれぞれ刻み込まれていた。見たことも無い文字だった。

「ミスタ・コルベール、終わりました」

「ふむ、変わったルーンだな」コルベールと呼ばれた男が二人の手に刻まれたルーンを手早くメモ帳のような物にスケッチする。

「相手が平民だから契約できたんだよ」

「そいつ等が高位の幻獣だったら『契約』なんて出来ないって、周りの生徒たちが馬鹿にした様に言う。

「馬鹿にしないでよね！私だってたまにはうまくいくわよ！」

「本当にたまによね、『ゼロ』のルイズ」

ルイズと言う少女が周りから口々に罵られる有様を見てエリオとキヤロは首を傾げる。どうもこのやり取りは話の流れからして自分達と無関係では無いようだが何が何だかさっぱり分からない。

「では皆さん、教室へ戻りますよ。ミス・ヴァリエール、彼らは混乱してる様だから色々説明してあげなさい」

そう言うところベルと呼ばれた男は呪文を唱えて空へ飛んで行ってしまふ。

他の少年少女達もまた同じ様に呪文を唱えて空へ舞い上がる。

「ルイズ！お前はそいつらと歩いてこいよ！」

「あいつ、『フライ』はおるか、『レビデーション』も唱えられないんだぜ！」

そういつて彼らは離れた所に建っている中世風の建物に向かって飛んで行く。その光景は魔導師であるエリオ達にとって特に驚くべき物ではない。

「行くわよ！ついてきなさい」ルイズと名乗った少女はエリオ達について来る様促した。てっきり連行されると思っていたが特に拘束されるでもない様子に取り敢えず警戒を解く。どうも危害を加えられる訳では無いようである。二人は念話でこれからの事を話す。

（これからどうしよう？）

（まっつて、本部に連絡をとってみる）エリオはストラダに内臓された通信機のスイッチを入れる。

「こちらライトニング3、本部、応答願います」小声で連絡をする、だが応答は無い。

「何をしてるの！早くきなさい！」

（本当にどうしよう、本部に連絡がつかないんじゃないや私たち・・・）

（仕方ない、あの人について行ってみよう）

（でも・・・大丈夫かな）

（わからない、でもどうやら僕達が管理局の人間だと知って攫った訳じゃ無いみたい）

(じゃあ、あの転移魔法は・・・)

(わかんないけど脱出するにしてもここが何処か情報が必要だし、とにかく話を聞いてみる必要があるよ。とりあえず事情が解かるまで僕達が魔導師だと言う事は内緒にしとこう)

(ええ、わかったわ)

二人はルイズの後について行く事にした。

第1話 召喚（後書き）

かなり長文になってしまいました、ご容赦の程。

第2話 異世界

エリオとキヤロはルイズについて行き、転移してきた時に遠くに見えていた建物の中に向かう。

その建物はなのはの故郷である地球の中世ヨーロッパの城に酷似していた。

小さな入り口から建物の中に入る。

「こんな大きな建物なのになんでこんな小さな入り口から入るんですか？」キヤロが疑問を口にする。

「生徒はよほどの事が無い限り普段はこっちの入り口をつかうのよ」

「生徒？」二人は意外な単語に首を傾げる、まだ誰も此処が何の施設なのか二人に説明していないのだ。

階段を昇り、狭い廊下を通過して二人はある部屋に通される。それはどうも誰かの個室のようだった。

「ここが私の部屋よ」

さらに首を傾げる、何故このルイズという人の私室に案内されねばならないのか、ここに転移させられた直後の状況からすれば、組織ぐるみで此処に拉致られたと思っていたので益々謎だった。

部屋を見渡してエリオはある事に気づく。

(照明が・・・見当たらない)

(ホントだ、電気・・・使って無いのかな?)

小さな部屋だが個人の私室としては決して狭くは無い広さの部屋なのに天井にはLEDどころか蛍光灯も白熱電球すら見当たらない、部屋を見廻すと机の上に簡単なオイルランプがあった。

今時、こんな代物で部屋の中を照らすなんて考えにくい、節約か何かの為にこんな物を使っているのだとしても天井に電灯の類が取り付けられていた痕跡すら見当たらないのは変だ、だとすると最初から電気が普及していないと考えるしかない。

だとするとここは文明レベルが電気の利用にまで至ってないと言
う事になる。となると異世界の可能性がある、そうになると生き物に
生体改造を施す様な技術が有るとは考えにくい。

どうやら早く彼女から話を聞く必要があるそうだ。

「それで、貴方達は一体何者なんですか？此処は何処なんですか
？」

「なによ、ご主人様に向かってその口の利き方は」いきなり飛び
出る『ご主人様』と言う単語に面食らう。

「まあいいわ、さつきも名乗ったけど改めて教えてあげる、私の
名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエー
ル、今日からあんた達が仕えるご主人様の名前よ、よく覚えておき
なさい。そして此処はあの有名なトリスティン魔法学院」

「魔法学院！？」今の二人にとつてはまたも意外な単語であった。
事情を知っていれば『生徒』も『魔法学院』も別に意外な言葉では
無いのだが、当初二人は相手を犯罪組織か何かかと疑っていたのだ。
だがここが学校なら先程の『生徒』と言う単語にも納得がいく、
しかしまだ疑問が残る。

「その魔法学院の人たちがなんで僕達をこんな所に連れて来たん
ですか？それに『ご主人様』ってどう言う事です？」

「アーもう、メイジじゃ無いあんた達でも知ってるでしょ！この
魔法学院で毎年行われる春の恒例行事の事は！」そんな事を言われ
ても困る、ここはミッドチルダとは別の次元世界らしいが、この世
界の人達には『トリスティン魔法学院』も『春の恒例行事』も有名
な物かも知れないが、異世界人である自分達にとつては全く未知の
事なのだ。

「いえ、全く知りません」キツパリと答える。

「あんた達どれだけ田舎者なのよ！いいわ、教えてあげる。ここ
トリスティン魔法学院では毎年授業の一環として春に二年生の使い
魔召喚の儀が行われるのよ！」

「えっ？それって……」

「そうよ、あんた達はこの私がサモン・サーバントの呪文で『使
い魔』として召喚したのよ！」

「……………」エリオとキヤロ「二人は絶句する。「何よ」

あまりの途方の無さに一瞬、頭の中が真っ白になり何から突っ込
んで良いのか解からなくなった。

だがすぐ何とか思考を取り戻した。

「……………」この世界「此处では人間を使い魔にする事が普
通に行われているんですか？」

「普通は無いわね、人間を使い魔にしたメイジなんて聞いた事無
いわよ」

「じゃあ、なんで僕達を連れて来たんですか？」

「あたしだって好きであんた達を呼び出したんじゃないわ、サモ
ン・サーバントは何を呼び出すか選んだり出来ないのよ」しかし、
今度はキヤロが疑問に感じた事を口にする。

「授業の一環、て事はあの場に教官役の先生もいたんですよね？
その人は人間を呼び出した事に何も言わなかったんですか？」する
とルイズの表情は険しくなり急に癩癩を起こし始めた。

「それについてじゃ私の方が色々言いたいわよ！なんであんた達み
たいな平民を使い魔にしなくちゃいけないのよ！」

急に怒り出したルイズの反応にエリオとキヤロは驚く、同時に
また彼女の台詞に異様な単語を見つけてしまう。

（平民……？）

「あの時、失敗だと思つてコルベール先生にもう一度召喚をさせ
てくれて頼んだわ。でもアツサリ却下された、それどころか進級
をチラつかせてあんた達をそのまま使い魔にするように言うのよ！」

そういえば、あの場には眼鏡を掛けた頭髪の薄い年配の男性がい

た。おそらくその人物が『コルベール先生』なのだろう。あの時何かルイズと口論していた、あの時は他に気を取られて気にして無かったが話は聞こえていた、その内容を今一度思い出してみる。

『ミスタ・コルベール！もう一回召喚させてください！』

『それはダメだ。ミス・ヴァリエール。一度呼び出した使い魔は変更することは出来ない。春の使い魔召喚は神聖な儀式なんだ。好むと好まざるとにかかわらず彼等を使い魔にするしかない』

『でも人間を使い魔にするなんて聞いた事ありません！』

『これは伝統なんだよ、ミス・ヴァリエール。例外は認められない』

伝統

そんないい加減な理由で自分達は隷属を強要

されようとしているのか。そもそも話しによると人間が召喚された前例は無かった筈なのに、もつと柔軟な対応もできたらうに。

つまり、エリオ達は理科や家庭科の実習と同じノリで此処に拉致られてきたのだ。

「こうなったらもうあんた達に使い魔をやってもらうしか無いのよ！死ぬまで付き合っつて貰うからね！」

「死ぬまでつて・・・」

「当然でしょ、使い魔つてのは主と一生を共にするものよ」

「冗談じゃありません！！あたし達にだつて自分の人生があるんです！」

「そんな事に同意する訳にはいきません、お断りします！」

二人はどちらかと言えば温厚な方である。だが流石にこの事態は腹を立てざるを得ない。

だがルイズはそんな二人の激昂を気にもせず、冷たく言い放つ。

「同意も何も、あんた達は既に私の使い魔よ、契約したでしょ」

「？、そんな覚えは有りませんよ」

「あんた達の手の甲に文字が刻まれてるでしょ？それが契約の証、使い魔のルーンよ、それがある限り、あんた達は私の使い魔よ」

そつえば唇を奪われた後に手に激痛と共に文字の様な物が浮か

び上がった、するとあれが契約の魔法だったのかと気づく、勝手にミッドチルダの魔法の常識を当てはめ、『使い魔』は生体改造された生き物だと決めてかかっていたが、よく考えてみたら此処は別世界らしき所、それも科学技術の発達が遅れている節のある所だった。

「何もあたし達を使い魔にしなくても、もう一度召喚して別な生き物を使い魔にすれば良いじゃないですか。契約を解除してください」召喚術師であるキャラコならではの意見である。

「じゃ、あんた達死んで見る？」
「どう言う意味ですか？」

「召喚の魔法と契約の魔法はワンセットの魔法で今いる使い魔が死なないと新しい使い魔は召喚できないの！既に使い魔がいるメイジがサモン・サーバントを唱えても失敗して何も起きないわ。契約解除も使い魔の死をもって自動的にしか行われ無いわ」そんな魔法を人間に使うとは、生体改造こそされなかったものの、同じぐらいトンデモナイ話である。

「送喚魔法ぐらい無いんですか？」

「ソウカンって何よ？」

「……………送り返す魔法のことです」

まさか魔法使いと思しき相手に『送喚』の意味を教える事になるとは思わなかった。

「無いわ、送り返す魔法なんて存在しないの。使い魔は一生ものなんだから当然でしょ？」

なんて乱暴な話なのか、ミッドチルダでも使役を目的にランダムな召喚魔法で未知の生物を呼び出す事は無い訳では無い。しかしある程度呼び出す対象は絞り込めるし、何かあった時の為、送喚魔法が用意されている。ところが此処の魔法使い達は自分達のような人間を呼び出す召喚事故や術者に危害を加える危険な生物を呼び出す可能性が有るにも拘らず完全アトラダムな召喚魔法を強行し送喚魔法の用意も無い、しかも呼び出したものを相手の同意も得ず一方的に隷属の魔法を施す事を『契約』と称するのだから。

「他に転移系の魔法は無いんですか？」
「こんどはエリオが尋ねる。」

「そんな系統聞いた事無いわ」

「人や物を一瞬で遠くに移動させる魔法の事です」

「あんた達ねえ、メイジでも無いくせに知ったかぶりすんじゃないわよ！そんな都合のいい魔法がある訳無いでしょ！」

エリオ達とルイズの認識の違いはミッドチルダとハルケギニアの魔法体系の違いなのだが、エリオ達の事をタダの平民だと思い込んでるルイズはエリオ達の発言を魔法の知識が無い平民ゆえの無知さからくる物だと考えた。

（次元世界を跨いでの召喚魔法が有るのに転移魔法が無いなんて、どうなっているの？）

（しかも、話を総合するとここの人達は一生に一度しか召喚ができない事になる、専門の召喚術師は居ないのかな？）

（わかんない、此処と私達の魔法体系が違うとしか言えないわ）

「どうやら納得したようね、あんた達はこの私の使い魔になるしか無いって事を」

「納得した訳じゃ有りません、なんで僕達が昨日まで会った事も無い貴方に一生を捧げなくてはならないんですか」

「あーもう五月蠅いわね！いいこと、あんた達平民があたし達貴族に仕えられるなんて滅多に無い事なのよ、光栄に思いなさい！」

「貴族……ですって？」

その言葉でようやく先ほどの『平民』の意味を悟る、この世界には階級制度が存在してるのだ。

「僕達のいた所に貴族や平民なんて区別はありません、貴方にこそ使われる事に恩を着せられる筋合いはありません」

「嘘吐くんならもっとマシな嘘吐きなさいよ、貴族が居なくてどうやってあんた達平民が生活していきけるって言うのよ」もはや何を言っても無駄な様だ、と言う世の中が知らないが、元より前提となる常識が違いすぎる。

「そう言えばあんた達の名前を聞いて無かったわね。あんた達、

名前は？」

「エリオ・モンディアルです」

「生意気なうまいきっ、平民の癖に家名があるの」

「いった筈です、僕達のいた所に貴族・平民の区別は無いと」

「あくまでそう言い張る訳、まあいいわ。で、アンタは？」

「キャラ・ル・ルシエです。この子はフリードリヒ」キャラが紹介したフリードを見てルイズはため息をつく。

「はあっ、この小竜だけで良かったのに何でアンタ達まで来ちゃうのよ！」

「呼び出すモノを選べない、いい加減な召喚魔法を使ったのは貴方でしょう。僕達は道を歩いてただけで貧乏くじを引かされる羽目になったんです」

「貧乏くじってどう言う意味よ」

「そのままの意味ですが、何か？」

「あんたねっ！」「まあまあ二人とも落ち着いて」一度はエリオと一緒に怒ったキャラも今は気を静めていたがエリオはまだ怒っていた。エリオには自身がモンディアル家の一人息子である本物のエリオ・モンディアルのクローンだと言う理由で両親から引き離され、研究施設でモルモット同然の非人道的な扱いを受けた過去があった、今のエリオからは想像もつかないが、それが原因で一時期人間不信に陥り荒んでいた時期があったのだ。そんな過去が有るからこそ人を物の様に扱う者には敏感に反応する、もともと一人だけでこんな事に巻き込まれていたならルイズにここまで反抗的にはならなかったろう。だが、今度の件にはキャラも巻き込まれてしまった、キャラにはかつての自分の様な思いはさせたくない、との思いがエリオの態度を頑ななものにさせていたのだ。

だが今日始めてあつたばかりでエリオの過去など当然知る筈もないルイズには只の反抗的な使い魔にしか見えない。

「貴族にそんな態度とって良いと思つてんの！」

「貴族なら何をしてもいいんですか？此処では」険悪なムードに

二人の間でキャラはオロオロせざるを得なかった。しかし、ルイズは何か言いたそうな顔をするものの、何も言い返せなかった。

「まあいいわ、で、アンタ達何処の生まれよ」頑なな態度を崩さないエリオのかわりにキャラが答える。

「ミ、ミッドチルダです」

「聞いた事無いわね、何処の田舎よ」

「僕らだってトリストイン魔法学院なんて聞いた事ありません、何処の田舎の学校ですか？」

「何ですって!!」

「自分達が知らないから田舎だと決め付けるなら僕らも知らない事は田舎の事だと返すだけです」

「あんたね」

「あ、あんでも本当にあたし達知らないんです。この学校ってなんて言う所にあるんですか？」

(エリオくん、気持ちは解かるけどこれ以上相手を怒らせないで)
(あつ、キャラ、ゴメン) エリオは念話でキャラにたしなめられやっとなキャラが困っている事に気づく。

「まあいいわ、この学院はその名の通りハルケギニア大陸のトリストイン王国にあるのよ。国内外から貴族の子女が集まってくる由緒正しい学院なのよ、決して田舎の学校なんかじゃ無いからね！」

「わ、解かりました、もう言いません」

「どうやら解かったみたいね、じゃあ使い魔の役目を説明するわよ」

もう使い魔にしたつもりでいるのか、とエリオは言いたかったが、ここで食い下がるとまたキャラを

困らせてしまいそうなので、黙っている事にする。

「まず使い魔は主の目となり耳となる、使い魔の見聞きした事が主にも伝わるのよ」

精神リンクの事だろうか、だがあれは主の意思を使い魔が察する為の物で逆は無かった筈だ、自分達の知る使い魔の精神リンクとは

まるであべこべだ。いや、それよりも事実だとすれば今まで二人の間で交わっていた念話を聞かれていた事になる、確かルイズには聞かれたく無い事も話していた筈だ。

「でもあんた達じゃダメね、何も見えないし聞こえないもの」

二人は内心ホツとした。考えてみれば異なる魔法体系の契約でこつちの念話をモニターできる訳もない、それどころか『念話』と言う魔法自体が無い節がある。

「それから使い魔は主人の望むものを見つけてくるの。たとえば秘薬の材料とか」

「無理ですよ、僕らにはそんな知識や技能はありませんから」
時空管理局においてエリオ達は基本的に戦闘要員である。当然習得する技能も戦闘が中心になる。管理局では完全に分業化が進んでいるので他の技能を必要とする仕事はそれ専門に行う部署や職員に任せれば良いのでエリオ達はそうしたスキルは持っていない。

「まつ、期待はしてないわ。そしてこれが一番なんだけど・・・
・・使い魔は、主人を守る存在であるのよ！その能力で主人を敵から守るのが一番の役目！」

これは逆にエリオ達の得意分野である。しかし自分達を異世界に拉致してきた張本人で、高圧的な態度で自分達に服従を迫る昨日まで名も知らなかった少女を命がけで守る事を素直に言葉に出して誓う気になど成れない。

「・・・でも、アンタ達は子供だし、無理そうね」こつちはまだ何も言っていないのに勝手に無理だと決め付ける。失礼極まりない。

「だからアンタ達にも出来そうな事をやらせてあげる。洗濯、掃除、その他雑用！」

結局、体の良い魔法による奴隷狩りである。ミッドチルダなら間違いない。人権蹂躪で捕まる。しかしそれを言っても始まらない。

「ふあゝっ、喋ったら眠くなっちゃったわ、もう寝ましょう」

「僕らは何処で寝ればいいんです？」「そこ」

見ると部屋の片隅にワラが積まれていた。

「何です？これは」

「仕方ないでしょう、人間が召喚されるなんて思わなかったんだから」

そういえば、人間の使い魔など前例が無かつたらしい、何かの動物が召喚される事を想定して寝床を用意していたのだろう。

「そんな顔しなくても毛布の一枚くらいはあげるわよ。キャロ、あんたはベットに入っでいいわよ」

そう言つとルイズは着替えるため服を脱ぎ始めた。

「ちよ、何脱ぎ始めているんですか！キャロはともかく、僕は男ですよ！」

「あんた使い魔でしょ、見られたつて平気よ」そう言つとルイズは何か布きれをエリオに投げつける。

「それ、洗濯しといてよ」そう言つてルイズは寝入ってしまった。エリオは顔に引つかかったそれを見た。それはルイズが今しがた穿いていたパンティーだった。

「ワワワツ！」それを見たキャロがキョトンとした顔で訊ねる。

「エリオ君、何焦っているの？ルイズさんのパンツがどうかした？」

忘れていた……キャロは女の子なのに育ちのせいか羞恥心に欠ける所があつたのだ。銭湯に行つた際にエリオのいる男湯に入つて来たり、エリオを他の女性メンバーの居る女湯にエリオを連れて行こうとしたりしてよくエリオを困惑させていた。

普通の女の子並みの羞恥心をキャロには身に着けて貰いたいのルイズみたいなのは悪い見本である。ああ言うのをこの先ご主人様扱いせねばならないとはキャロの情操に良くない。

「あのね、キャロ。普通の女の子の子は男性の目の前で着替えたり、穿いてたパンツを男の人に投げよこしたりしないの」

「でも、ルイズさんは今……」

「あの人は僕らを人間扱いしてないから、見習っちゃダメ」

「そういうもののなの？」やはり悪い見本だ、先が思いやられる。そんな二人のやり取りを他所にルイズはグッスリ寝入ってしまった。

「エリオ君、これからどうしよう」

「とにかく僕らが置かれてる状況を確認しよう」

二人はルイズを起こさぬ様、静かに部屋を抜け出す。

この建物は魔法学院との事だが見た限りにおいてはどう見ても地球の中世ヨーロッパの城にしか見えなかった。恐らくは学校の為になぜわざわざ建てた建物では無く、軍事拠点としての城もしくは皆を校舎として転用しているのだろう。二人は高い所から見渡すため建物の上を目指した。

しばらく階段を昇ると城壁の上にてた。

満点の夜空が広がる、空には二つの月が浮かぶ。ミッドチルダに月は二つあるが此処のそれは見かけの大きさが違う、ミッドチルダの月より巨大に見える、明らかに違う天体だ。そのことがここが別の次元世界である事を如実に物語っていた。

二人はまず持ち物の確認をした。

エリオは背中中のデイバックに、キャロはポシェットにそれぞれ持ち物を入れていた、だが、街で休暇を満喫するため大した物を持ってきていない。まず二人の腕にはそれぞれのデバイス、ストラードとケリユケイオン、デバイスには通信機が内蔵されているが、それとは別に携帯電話も持って来ていた。しかしここでは意味が無い、精々カメラ機能を使うのが関の山だ。

他にはエリオはデイバックの中に小型のノートパソコンをもって来ていた。問題なのはバッテリーの充電だ、この世界では電気が普及していない。いざと言うときはエリオ自身の魔力変換資質を使い、ストラード経由で充電せねばならないだろう。

財布もあるが異世界ではカードもミッドチルダの通貨も役には立たない。そういえばシャーリーからこの後見る筈だった映画のチケット

ツトも貰っていたが無駄になってしまった。

役に立ちそうな物は応急手当用のファースト・エイドキットがそれぞれ一つずつ（もつともキャラは治癒魔法が有るのであまり使用しないが）ストラダーの魔力カートリッジのケースが3つ、補充は暫らく出来そうに無いから大事に使わなくては。

後はポケットティッシュとハンカチ、あと非常食用にエリオは板チョコ一枚、キャラはキャンディ数個。

後は二人とも今着てる服のみ、着替えはない。これが二人の持ち物の全てだった。

つまり、この世界に居る限り衣食住の全てを誰かに頼らねばならないのだ。

「ねえ、キャラの転移魔法でミッドチルダに帰る事は出来ない？」

「それが・・・そう思ってミッドチルダの座標を探してるんだけど・・・見つからないの」

「それって、どう言う事？」

「解からない、考えられるのは此処が生身の転移魔法じゃ帰れないほどミッドチルダから離れた世界かもって事ぐらいしか・・・」

エリオは耳を疑った、二つの次元世界がどれぐらい離れているのかを表すのに『距離』と言う概念は適切では無いが、キャラの言う事が本当ならあのルイズと言う人物は転移魔法のエキスパートであるキャラですら身一つでは跳べないほど離れたミッドチルダから二人もの人間を転移させる超遠距離召喚を成し遂げた事になる。

しかもルイズの話によればこの世界には転移魔法が無く、使い魔が死なない限り新しい召喚ができないサモン・サーバントしか召喚魔法が無い、つまりルイズは専門の召喚術師ですらないのだ。

「ねえ、エリオ君。あたし達どうなっちゃうのかな？このままなのはさんやフェイトさん、六課のみんなに二度と会えないのかな？キャラは涙目になってエリオの胸に顔を埋めた。

「大丈夫、きっとなのはさん達は僕達を探し出して迎えに来てくれる。それまで信じて待とう。」

「でも……でも……」ついに泣き出してしまふ。

(二人とも落ち込まないで僕もついでるから……)

「そんな事いっただって……」

(だいじょうぶ、そのうち良いこともあるよ)

「そうかな……」

「キャラ？何ひとりでぶつぶつ言ってるの？」

「えっ、今のエリオ君じゃないの？」

「僕は途中から一言も喋ってないよ」

「えっ、じゃあ今のだれ……？」

(もしかしてキャラ、僕の言葉わかるの……?)

「もしかして、今の、フリード？」「キャラ？」

(やっぱり僕の言葉わかるんだね？キャラ、嬉しい)

「エリオ君、いまフリードが喋った！」

「何言ってるの、キャラ、僕には何も聞こえないよ！」

(そんな、エリオには僕の言葉が聞こえないの?)

「そんなあ……」エリオはキャラが悲しみのあまり、気が変になつたのだと思つた。

一方、キャラはどうしてフリードの言葉が解かるようになったのか、どうしてエリオには聞こえないのかと考えていた。そこでふと思いつく、これは肉声と言うより念話に近い。もしかしたら……

「ね、フリード、もう一度エリオ君に何か話して見て」

(わかつたよ、キャラ、エリオ、ぼくだよフリードリヒだよ)

「い、いまのは？キャラこれは一体……？」

「フリードの言葉、肉声と言うより念話に近かつたから、フリードの声を念話で中継してみたの」

「本当に？……でもなぜ急にそんなことが……」

「わかんない……わかんないけど……でもなんか嬉しい……」

(……一体……いきなり何故……?)

双月が二人を包み込む様に辺りを明るく照らしていた、それが祝福の光なのかどうかは、まだ誰にも分からない・・・。

第2話 異世界（後書き）

早くもキャラのヴィンターブルブの力発動、果たしてどうなるか？

第3話 学院

エリオとキャラロが『時空転移』に巻き込まれて消滅してから既に16時間が経過した。

機動六課のブリーフィングルームでは二人の捜索の件について、今後どのように進めていくか対策が練られていた。

「シャーリー、今回の件について解かった事を説明してくれん？」

「あまり、良い知らせとは言いがたいですね」

その言葉を聴いてスバルの顔色が変わる。

「シャーリー、それどう言う意味？」

「エリオとキャラロの二人が巻き込まれた現象なのですが、調べてみたら自然発生した時空の歪みでは無く、人為的な転移魔法の可能性が出てきました」

それはつまり、悪意を持った何者かによる魔法による拉致の可能性が高い。おかげで生身での生命の存続が不可能な場所、例えば真空の宇宙とか煮えたぎる溶岩の中とかに二人が放り出されて絶命している可能性は無くなったが、犯人がいるとなるとその人物の目的によつては二人の身に危害を加えられる可能性もある。特にエリオはプロジェクトFによって人造生命体として生み出された身である、ある程度の科学力を持った犯罪者にとつてはよいモルモットである。「でも二人が取り込まれたあの鏡の様なモノの周りには魔法陣が見られませんでした」テイアナが疑問を呈する。

「それが・・・二人を取り込んだのはミッドチルダ式ともベルガ式とも違う未知の術式だったのよ」

「未知の術式!？」

「なんでそんな物が・・・足がつかないように？」

「だとしたら・・・少し厄介だね。こちらの捜査を見越して色々小細工を弄しているだろうし」

なのはは、少し深刻そうな面持ちでいった。もしも二人が管理局の

人間だと知って狙ったのならかなり計画的犯行だ、観測データから転移先や術者の位置を特定出来ない様、魔法自体にジャミングやスクランブル処理がかかっている可能性がある。そうなる観測データから二人の行方を捜すのは殆ど絶望的である。

「いえ、それが二人を攫った魔法にはそういつた捜査を遅らせるような措置が一切見られないんです。」

「それはまたずいぶん大胆な犯人やな。よっぽど捕まらん自身が有るんやろか？」

さすがのはやてもまさか管理局員を狙った拉致の犯人に罪の自覚が無いなどは想像もつかなかった。

エリオとキャロを召喚したサモン・サーバントの魔法に追跡をかく乱する措置が取られていないのは当然で、ハルケギニアの魔術師達にとつて使い魔の召喚は当然の行為であつて、誰からも咎められるものではないから追跡を恐れて予防措置など取る必要が無い。

平民（と思われる存在）を召喚してしまつても強権と魔法の力で有無を言わず言う事を聞かせてしまえばよい。貴族なんか召喚してしまつた場合はもちろん大事で、それが異国の貴族なら国際問題にも発展しかねない、が、そもそも人間を召喚するなど本来有り得ない事なのでそんな事がおきた場合の事など考える必要が無いのだ。ましてや、貴族が召喚されて行つてしまつたとしても、それを取り戻すためにサモン・サーバントの魔力を辿つて召喚対象や術者の居場所を突き止められる奴など（ハルケギニアには）スクウェア級や先住魔法の使い手にもいないので、追跡対策など意味が無い。だがないのは達六課のメンバーはそんな事とは想像もつかない。

「でも、それなら意外と早く二人の居所を見つけだせそうだね。」

「それが・・・そう簡単に行きそうにないんです」

「何か問題があるの？」

「この転移魔法、かなり信じられない程離れた次元世界から仕掛けられたらしいんです。それも、本来ならアースラのような次元渡航船で無くては移動できないほど離れた世界から施された可能性があ

ります。」

「ちよつと信じられんなあ、それじゃ攫う方も目標の位置を特定するのに一苦労なんと違う?」

「その辺は未知の魔法なのでなんとも言えません。ひよつとしたらその魔法体系ではそんな事朝飯前で簡単にできるのかも知れませんし、あと、目標を特定しない全くのアトランダムな転移魔法なら可能性も有ります」

「いくら何でもそれは無いやろ、それだけの魔法ならかなり大掛かりな魔法の筈や。目標も決めんとそいつは何するつもりやったんや?」

「ですね」

「でもそうになるとキャラの転移魔法でも自力で戻って来れないね。こつちから探して迎えにいつてあげないと」

「問題はあまりにも離れ過ぎていて転移先の特定にかなり時間がかかり過ぎてしまう事です。しかも特定できる可能性もかなり低いですね。」

「その辺はシャーリーに頑張ってもらわんなあ」

「フェイトちゃん、きつと心配してるだろうね」

「そうやな、親代わりとして二人を結構可愛がっていたしな」

「犯人を捕らえる時、気を付けないと犯人半殺しにしちまうかな」「う」

ヴィータがさらりと恐ろしい事を言う。

「ヴィータちゃん・・・それはちよつと・・・」

「でも、考えられなく無いだろ」「・・・」

沈黙が場を支配した。

『犯人』がいる、と言う話を聞いて絶対許さないと思っていたスバルだったが、犯人に同情したくなった。

エリオとキャラがハルケギニアに召喚されて最初の夜が明けた。

ルイズからベッドに入って良いと言われたキャロだったが、エリオ一人だけ床に寝かせるのに忍びなくて藁の敷かれた床の上にエリオと一緒に毛布に包まって壁に寄りかかるように寝たキャロであった。

そのキャロが真つ先に目を覚まし、エリオを揺り起こす。

「エリオ君、朝だよ」

「ん、キャロおはよう」

ルイズはまだすやすやと寝ていた。

ゆうべ一晩二人で話しあった結果、こっちから自力でミッドチルダに戻れそうに無いため、六課の仲間が自分達を見つけ出し迎えに来てくれるのを期待するしか無いと言う結果になった。幸い、自分達が召喚に巻き込まれたあの場には（なぜか）スバル達も居合わせていた様なので見つけて貰える可能性は大きい。

ルイズは帰る事など認めないかも知れないが管理局の介入の前には諦めざるを得ないだろう。

ただ、自分達の生活基盤が無いこの世界では短い間だけでも迎えを待つ為には、使い魔をやる事を受け入れざるを得ない、昨晚の様な反抗的な態度は慎まなくてはならない。

「そう言えば洗濯を言い渡されていたっけ」

「でも・・・洗濯機ってあるのかな・・・ここ？」

そういえばこの世界には電気が普及してないかも知れないのだ。洗濯機なんて気の利いた物があるとは到底思えない。

「キャロ、洗濯機を使わない洗濯ってした事ある？」

「私の故郷の村じゃ文明の利器に頼って無かったけど、私の家のやり方とか覚える前に村を追い出されちゃったから、フェイトさんに引き取られてから覚えた家電製品に頼ったやり方しか知らないの。」

エリオくんは？」

「僕も似たような物だよ、洗濯機を使った洗濯ならした事あるけど」

エリオもキャロも典型的な現代っ子であつた。それでも分類するなら現代っ子の中ではゆわゆる『良い子』の部類に入るだろう。二人とも親代わりのフェイトを良く手伝つて家事をする事があつた。しかし、それはあくまで洗濯機などの文明の利器に頼つた物である。ミッドチルダの様な科学の発達した世界で現代っ子である二人が手洗いで洗濯のやり方など覚える機会はない。

現代っ子が手洗いで洗濯の仕方を覚えるとしたら学校の家庭科だろう、いかに文明社会で手洗いの必要が無いと行つても最低限の生活力を身に付けさせる為手洗いのやり方もきちんと教科書に載っている物だ。たとえ男子であつてもちゃんと洗濯の仕方を教えて貰える。

しかし、実はエリオもキャロもその経歴から、まともに学校に行つたことが無い。必要な勉強は引き取られてからフェイトが見てくれた。しかしそのお陰で学校で家庭科を学ぶなどと言う経験は無かつた。

さすがに明らかに電気も水道も無いであろうこの世界で、洗濯機や蛇口の場所を捜し回る、などと言うボケはかまさないもの、ここでハタと困り果ててしまふ。

「そう言えば・・・洗濯機や水道だけじゃ無く洗剤も無いかも・・・」

「洗剤が発明される前つて・・・何を使って洗つていたのかな？」
廊下で立ち尽くす二人であつた。

「あら、あなた達ここで何してるの？此処は貴族の方達の出入りする場所ですよ」
振り向くとそこにはメイド服の女の人が洗濯物を抱えて立っていた。

「ひよつとして迷い込んだんじゃないのかな？此処に居ると叱られますよ。早くおうちにお帰りなさい」

「あついえ、僕らはルイズと言う人の使い魔をする事になつたものです」

「あつもしかしてあなた達が昨日ミス・ヴァリエールの召喚したって言う」

「あたし達の事知っているんですか？」

「ええ、平民の男の子と女の子を召喚したって学院中で有名になっっているから」

「そつ、そうなんですか」エリオは苦笑した。

「そういえばまだ名乗っていないかったわね、私はこの学院でメイドの仕事をさせて貰っているシエスタって言うの。よろしくね」

「僕はエリオ・モンディアルといいます」

「キャロ・ル・ルシエです、この子はフリード」それを聞いてシエスタの顔が蒼白になる。

「みよ、苗字？きききつ貴族様でしたか、馴れ馴れしい口を聞いてすすすすいません！」

「ち、違います、僕らは貴族じゃありません。僕らの故郷では誰にでも苗字が有るのが普通なんです」

「でもその竜、使い魔とかじゃ・・・」

「フリードは私が卵から育てた竜で使い魔じゃありません」

嘘は言っていない、ミッドチルダでは使い魔は改造生物であり、フリードにはそんな改造は施してない。だからフリードは『使役竜』ではあっても『使い魔』ではないのだ。

「ほんとに・・・貴族じゃないの・・・やだ私ったらつい」

そう言えばルイズも自分達の苗字の事にとにかく言っていた、自己紹介ひとつでこの騒ぎとはうっかり名前も名乗れない。

「そう言えば卵から生まれる生き物は最初に見た生き物を親と思っつて言いますよね」

「え、ええそうですね」

「それにしても平民でも苗字を名乗れるなんて貴方達の故郷って良い所なのね」

「え、ええまあ」エリオ達はあくまで自分達が平民だとも言っていない。貴族も平民も無い世界などと言うとまたややこしくなるので

誤解させておいた方が良かったらう。

「ところでこんな所で何していたの？」

「実はルイズさんから服を洗って置くよう言われたんですが私達洗濯のやり方が解からなくて、それに洗い場の場所も知らないからどうしたら良いか困っていたんです」

「それなら私が代わりに洗って上げますよ」

「そんな悪いですよ、僕達の仕事なのに」

「子供が遠慮なんてするもんじゃ無いわ、いいからお姉さんに任せなさい」

「エリオ君どうしよう」「そうだね・・・」

エリオは少し熟考してから言った。

「ご好意は有り難いのですが、これから先こんな事度々あると思いますし、この際洗濯の仕方とか覚えておこうと思います。すいませんけどやり方を教えて貰えますか？」

「ん、それもそうね。じゃあ洗い場に案内するわね、こつちよ」

「・・・とは言ったものの・・・」エリオは悩んでいた。目の前の色取り取りの布を見つめて。

「あのさ・・・悪いけど下着の方はキャロが洗ってくれない？」

「いいけど・・・どうして？」

「どうしてって・・・やっぱ男の僕じゃまずいよ」

「?・・・変なエリオ君」そんな二人のやり取りを見て思わずシエスタはクスツと笑ってしまふ、こうして見るとこの二人、なんて言うのか、とつてもお似合いな感じである。顔の方もどちらかと言えば

美少年、美少女の部類だろう。まるでお人形さんの様で、なんかこつお持ち帰りして部屋に飾って置きたくなってしまふ、などと思わずイケナイ事を考えてしまふシエスタであった。

「まだ、寝てる」

「ここ、確か学校なんですよ、そろそろ起きなくていいのかな？」
部屋に戻ってきた二人はまだ爆睡しているルイズを前にして考え込む。

「ひよつとして、今日はお休みなのかな、あたし達の世界で言う日曜みたいな日とかで」

「僕達は此処の事よく知らないし、違っていたらまずいよ。なんとか起こさなきゃ」

二人はルイズを揺り起こすも、なかなか起きる気配を見せない。

「いいかげん起きてくれませんか？」
「ふにゅ〜っ」
「やっと反応らしきモノを見せる。」

「おきてくださいって！今日は何も予定とか無いんですか」
「ようやく目を開ける。」

「ふわ〜っ、う〜ん、て、誰よ、アンタ達！」
しかし、まだ寝とぼけていた。

「自分で僕達を此処に連れてきておいて『あんた達』は無いでしょっ」

「あ……そ、そうだったわね。昨日召喚したんだっけ」
ルイズは眠そうに頭を掻きながらベッドから起き上がる。

「服」

「場所知らないんですけど」

「クローゼットの中に制服があるですよ、あとタンスの一番下に下着」

ルイズの言葉にしたがいエリオが制服を、キャラロが下着を取り出す。それをルイズに渡そうとすると

「着せて」と言い出した。

「『着せて』って……僕ですか？」

「当然でしょ」「ちょ、ちよつとルイズさん」
エリオは急に小声でキャラロに聞こえない様に話し出した。

「なによ、一体」

「キャラの前でそういうのは止めてもらえませんか？」

「『そういうの』ってどういうのよ？」

「男性が居る前で平気で着替えたり、男性に着替えを手伝わせたりと言っ様な事です」

「なによ、それ。キャラって実は男の子だったわけ？」

「んな訳無いでしょ、キャラは真正正銘の女の子です！じゃ無くてもあの子の前ではしたくない真似をしないでくれって事です」

「はあ？なんで？」

「キャラは同じ年の男の子と接した経験が殆ど無いため羞恥心が殆ど身につかなかったんです。お風呂屋さんに行つた時も男湯に平気で入つて来たり、僕を女湯に連れて行こうとしたりして困っているくらいなんです。何とか普通の女の子程度の羞恥心を身に付けて欲しいと思つているのに貴方みたいな人が近くにいると悪い見本です、謹んでください」

「あんたね。着替えを手伝うのが嫌だからって口から出まかせ言つてんじゃ無いわよ。そんな女の子居るわけ無いでしょ」

「……少なくとも約一名、今しがた着替えを男に手伝わせようとした方が僕の目の前に」

「こ、これは……ちよつとしたじよじよ、冗談よ、冗談。それよりアンタの言つてる事嘘だらけじゃない。同じ年の男の子と接した事が無いってアンタがいるじゃない。」

「僕とキャラが出会つたのは最近の事でほんの一年程前の事です。大して長い付き合いじゃありません」

「だからって……いくらなんでもそんな事信じられるわけ……」

そういつて否定しようとするがエリオの表情は真剣そのものだった、翻つてキャラを見る、首を傾げてなんだか訳がわからなそうにこつちを見ている。

「……まじ？」「こつくりとエリオが頷く。

「ああ〜もういいわよ！着替えはキャロだけに手伝って貰うから
アンタは外に出てなさい！」

エリオが部屋を出てからしばらくして着替えを終えたルイズとキ
ャロが出てくる。

すると隣の部屋から赤い髪の女生徒が廊下に出てきた。

「おはようルイズ」

「おはようキュルケ」

ルイズが嫌そうに返事をする、キュルケと呼ばれた生徒はエリ
オとキャロを指差し言った。

「あなたの使い魔って、その子達？」

「そうよ」

「あつははは！ホントに平民なのね！

サモン・サーバントで平民を召喚するなんて流石『ゼロのルイ
ズ』は一味違うわね！」

「………うるさいわね」

「どうせ使い魔にするなら、こういうのがいいわよ。フレイム
」

キュルケが声をかけると彼女の部屋から虎ほども大きさのある大
トカゲが出てきた。しかも只のトカゲでは無く、背中の鱗は焼いた
鉄の如く赤く光り、尻尾の先には松明の如く炎が灯っている。

（エリオ君これって……）

（……うん、色々な次元世界からランダムに転移させてくると
こんな生物も出てくるのかな？）

ミッドチルダにはフリードの様な竜もいるが、流石にとっかのポ
モンみたく尻尾の先に炎を灯してる冗談みたいな生物はいない。

異世界の生物だと考えるべきである。

ただエリオ達は勘違いしていた。普通のサモン・サーバントはハ
ルケギニアからだけしか召喚できないものなのだ。ハルケギニアは
一つの世界だけで様々な幻想種にあふれた世界なのだ。

「ほら、フレイルム。ご挨拶」キュルケの言葉に従いフレイルムが軽くお辞儀をする。

(始めまして、お嬢さん)

「えっ」キヤロは突然のフレイルムの『言葉』に驚く。フリードの言葉が解かる様になったのはゆうべ気づいたが、まさか他の生き物、それも竜ではない生き物の言う事まで解かるとは思わなかった。

しかし、そんなキヤロの驚いた様子をキュルケはフレイルム自体に驚いた、と思っただけらしい。

「あら、あなたはフレイルムにびっくりしてるみたいね。サラマンダーを見るのは初めて？」

「いえ、そういうわけじゃ」

「どう？火竜山脈に棲む火トカゲよ！見て、この尻尾の炎の鮮やかで大きい事！ 好事家に見せたら値段なんか付かないわね。」

「あーそりゃ良かったわね！あんた火属性だからお似合いね」得意げに自慢するキュルケに、ルイズが憎憎しげにつぶやく。

「ええ、この『微熱』のキュルケにぴったりよ。その平民二人も『ゼロ』のあなたにはぴったりよ、ルイズ」

「うるさいわね」

なんだか金持ちの奥様が内心では互いを貶し合いながら身に着ける宝石やバッグを自慢しあう光景を連想するエリオだった。

「あなた達、お名前は？」

「キヤ、キヤロといいます」

「エリオです。よろしく」

シエスタの事があったので、今度は苗字を名乗るのをやめた、また誤解されても面倒だ。

「よろしくなくていいの！いくわよ」

「あら、そんなに急いで何処行くの？ルイズ」

「他に行くとこないでしょ、先行かせてもらっわよ！」

「そんなにがっつかなくても朝食は逃げやしないわよ、あっちはっはっは！」

恥ずかしさと怒りでルイズの顔は真っ赤になっていた。

「悔し〜っ！なによあの女！自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！ああもう！」

「そんな、激高しなくても……」キヤロがルイズを宥めようとするが、

「したくもなるわよ！メイジの実力を見るには使い魔を見ろっていわれているのよ！なんであの女がサラマンダーで、私があんた達みたいな平民なのよ！」

「さつき起こす時に言った気もしますが、あなたの都合で一方的に呼び出しておいて不満を言われても困ります」エリオは少し棘のある口調でいった。

「やかましいわね！悔しいものは悔しいのよ！なによ、口答えばかりして！あんたこそ何か不満でもある訳？」

「……無いと思いますか？」

ここに来てからいつになくエリオは何故か反抗的だった。急に場が険悪になる。それを敏感に感じ取ったキヤロは慌てて何とか話を逸らせないかと話題を探す。

「あ、あのさっきのキュルケという人が言っていた『微熱』とか『ゼロ』ってなんの事ですか？」

「二つ名よ、大抵メイジは使う魔法にちなんだあだ名みたいなものを持っているのよ。火のメイジであるキュルケの二つ名は『微熱』」

「じゃ、じゃあルイズさんの『ゼロ』ってどう言う意味があるんですか？」

「……あなたたちは知らなくていい事よ。それより、さっさと行くわよ」

ルイズは何故か質問には答えず、そのまま歩き出した。

「さあついたわ、ここがアルヴィーズの食堂よ。」

「……ずいぶん大きな食堂ですね……」エリオはその広

さに驚かされていた、管理局の食堂もかなり広いがここまでではない。

何処かの大聖堂と見まごうような広い室内に数十メートルは有ろうかと言う長いテーブルが三つ据えられ、純白のテーブルクロスが敷かれたその上には綺麗に彩られた料理が並んでいる。

既に数百人程の生徒たちがここに来ており、席に付いて雑談に花を咲かせていた。

「・・・で、あなた達の食事はそれだから」

そこには、床に皿に入ったスープと、硬そうなパンが二人分置かれていた。

まさか床で喰えと言っのだろうか。

「使い魔は本当は外で食事するの。あなた達は一応人間だし、私の特別なはからいで、床」

エリオ達はこれまでの事から料理の内容にはあまり期待していなかった。流石に量に関しては予想以上に少なかったが、まさか床で食べさせられる事になるとは・・・。

(エリオ君、ここで食べるの？あたし何だか恥ずかしい) キャロが念話で訴える。性的な事には羞恥心が希薄なキャロもそれ以外の事では恥ずかしさを感じないと言う訳にはいかない。

エリオはため息を一つつくとスープには見向きもせず皿の上の自分とキャロの分のパンを拾い上げ、キャロの手を引いて退室しようとする。

「何処行くのよ、せつかく出してあげた料理に、なにか不満でもあるわけ？」

「・・・食事の量や内容に不満がある訳じゃありません」

エリオはそう言うと、キャロと一緒に食堂から出て行った。

「なによ、可愛くない」ルイズは苦々しく呟く。

食堂を後にしたエリオ達は中庭にでて、建物の入り口の階段の段差に腰掛けてパンを食べていた。

すると、今まで黙っていたキャラが口を開いてエリオに語りかけてきた。

「エリオ君、こっちに来てから何か変、昨日は話を聞いて私も思わず怒っちゃたけど、いくら無理やり連れて来られたといっても、エリオ君、ルイズさんに対しての態度が何か刺々しいよね？」

「それは……」

実際その通りだった。いつものエリオは誰に対してももつと素直に穏やかに人に接していた。

以前からエリオを知ってる人が今のエリオを見たら別人と言っか別キャラと思えるぐらい、ルイズに対しての態度は険しい物だった。

「忘れて無いの？昔の事」

「そんな訳じゃ……そうかも知れない」

キャラもエリオの過去については知っていた。もつとも人から間接的に聞いた話でしかないが。

かつて、法に反して、死んだ本物の『エリオ・モンディアル』のクローンとして造られたという理由で当局によって両親から無理やり引き離された、今回の事はエリオにしてみれば二度も自分を慈しんでくれた人達から引き離された訳である。

もつとも、あの両親は、エリオがクローンであると言う事実を突きつけられてエリオを庇うのを止めてしまった。そのせいでエリオは一時人間不信に陥っていた事がある。物凄く荒れていて、魔法を使つて暴れた事すらあった、素直とは程遠い態度で人に激しく接するのはエリオは初めてではない。

あの両親の事は、恨まなかった、と言えば嘘になるが今では恨んでいない、だがもう期待していない。可愛そうな人達ではあると思う。

だが、あの人だったらどうだろうか、あの人

フェイトさんは魔法を使つて暴れる自分を体を張つて止めてくれた。誰も信じられなくなった自分を救ってくれたのだ。

あの人なら、あの時のような事があつても必死で守ってくれただ

るう。残念ながら昨日の召喚に巻き込まれた時には居合わせなかったが。

でも、代わりにあの場にはスバルが来てくれた。結果として間に合わなかったが、彼女もまた最後まで必死になって自分達を救おうとしてくれたのだ。

フェイトさんやスバルさんだけじゃない、なのはさんやはやてさん、ヴェータ副隊長やシャマルさん、リンさんやシャーリーさんやティアナさん……。

みんな、自分達になにかあれば本気で心配してくれる、と信じる。とても掛け替えの無い人達だ。

だが、もしかすると二度と会えないかも知れない。

自分がルイズになんとなく刺々しい態度で接してしまうのはそのせいなのか……。

「気持ち解かるけどルイズさんはエリオ君を両親から引き離れた人達とはちがうよ。ルイズさんも悪気があってやってる訳じゃ無いと思うの」

「ごめん……キャラ、そんな事は僕もわかってるけど……」

その時、ドアがガチャッと開く音がした。

「あら、あなた達こんな所で何してるの？」シエスタだった。

「あ、こんな所ですみません、食事してましたんです。」

「なにも、こんな所で食べなくても」

「なんだか、食堂は居心地が悪くて」床で食べるよう言われた事は言わなかった。

「でも……そんなパン一個ずつで大丈夫？」

「平気です、大した事ありませんよ」

「よかつたら厨房に来ない？私達の賄い用の料理なら出してあげられるわ」

「そんな……悪いですよ」

「子供が遠慮なんてするもんじゃないわ。あなた達まだまだ育ち

盛りじゃない」

「そんなモノでしょうか、じゃ、お願いします」

二人はシエスタとともに厨房に向かった。

「がはははは、さあ遠慮するな！ほれおめえら、喰え喰え！」

「は、はあ」エリオ達は目の前の男の迫力に唾然としていた。

彼はこの魔法学院に勤めるコックで名をマルトーといった。

「おめえらも災難だったな、貴族なんかに使い魔として召喚されちまうなんてよ。まだ、おとうちゃんやおかあちゃんが恋しい年頃だつてのによ」「え、まあ」

おとうちゃん、おかあちゃんときた。

二人は愛想笑いで返す、本当はエリオもキャロも早くから両親と決別している身の上なのだがそんな事をマルトーは知る由も無い。

悪気は無いのだろう。エリオ達の年齢では親と暮らすのが普通である。マルトーも二人が居る筈の親達と引き離されて辛い思いをしている事だろうと心配してくれたのだ。

同情が欲しい訳じゃないし、わざわざ本当の事を言って気を悪くさせるのも気が引ける。

自分達の身の上については説明しないでおこう。

「なんか困った事があつたら俺に言いな。おっちゃんは何時でもお前らの味方だからな」

「ありがとう御座います」「なに、いいって事よ、それより早く喰つちまいな」

(なんか・・・物凄い人だね)

(でも、いい人だね)(うん)

二人はマルトーから振舞われた料理で腹を満たしたのであった。

「二人とも何処へ行ってたのよ！」食事を終えたエリオとキャロ

を待っていたのはルイズの怒号だった。

「……………何か用ですか？」

「これから授業が始まるのよ、二人とも一緒に着なさい！」

「でもあたし達は生徒じゃ無いから関係無いんじゃない？」キャロが当然の疑問を口にする。

「そう言う訳には行かないのよ！春の使い魔召喚の後の最初の授業は使い魔同伴で無きゃいけないの！」

(どうする、エリオ君)

(行こう、この世界の魔法の事を知れば元の世界に戻る手掛かりが見つかるかもしれないし)

「わかりました、行きます」エリオが返事をした。

「おはようございます。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。」

このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に

皆さんの使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

教室に入ってきた教師と思しき女性はそう言って教室内を見渡した。その女教師 シュヴルーズの目にエリオとキャロ

の姿が留まる。

「おやおや、変わった使い魔を召喚したのですね、ミス・ヴァリエール」

そう言うつと教室中が笑いに包まれる。

「ゼロのルイズ！召喚できないからってその辺の村の子供を攫ってくるなよ」

「違うわよ、きちんと召喚したわよ！」

「嘘付け、サモン・サーバントが出来なかっただけだろう」

クスクスと笑いが漏れる、ルイズが更に何かを言い返そうとした時、笑っていた生徒の口に赤土の粘土が押し付けられた。シュヴルーズの魔法である。

「お友達を馬鹿にしてはいけません。あなた達はその格好で授業を受けなさい」

教室が静まり返った。

「お喋りはここまでです。さあ、授業を始めますよ」

シユヴルーズがそう言うのを待っていたかの様に、エリオが腕にはめた腕時計状態のストラダを弄り始めた。

(エリオ君、どうするの?)

(ストラダに組み込まれた通信機の録音機能を使って授業内容を録音するんだよ、帰る方法を探す手掛かりになるかも知れない) そうして授業が開始された。

「私の二つ名は『赤土』赤土のシユヴルーズです。土系統の魔法を、これから一年、皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存知ですね? ミスタ・マリコルヌ」

「は、はい。ミセス・シユヴルーズ、『火』『水』『土』『風』の四つです!」

さっきの生徒が口の粘土を剥がしながら答えた。

ミッド式やベル方式には無いが『四大元素』と言う概念は大概の魔法大系で割と良く聞くものだ。

「今は失われた系統である『虚無』とあわせて、全部で五つの系統があることは皆さんも知ってのとおりです。その五つの中で『土』は最も重要な位置を占めていると私は考えます。

それは私が『土』系統だからと言う訳ではありませんよ。私の単なる身びいきではありません」

本当は身びいきなんじゃないだろうか、とエリオたちは聞いていて思った。

「『土』の魔法は万物の組成を司る、重要な魔法であるのです。

この魔法が無ければ、重要な金属を作り出す事も出来ないし、加工する事も出来ません。

大きな石を切り出して建物を建てる事も出来なければ、農作物の収穫も今よりずっと手間取ることになるでしょう。このように『土』

系統の魔法は皆さんの生活に密着に関係してるのです」

(なんだか、何でもありだね。この魔法)

(あたしたちの世界じゃ魔法は戦闘ぐらいにしか使われてないものね)

昨日、ルイズが『貴族が居なくて平民がどうして生活していくのよ!』といった意味が解かった。

ここでは魔法が科学技術の代わりに果たしているらしい。聞いた限りでは金属工業と建築と農業だけが他の分野でも他の系統が関わっているのだろうか？

ミッド式やベルガ式には日常生活に有益な魔法はあまり存在していない。そもそもミッドチルダは科学技術もかなり発達してるのでそんな類の魔法は余り研究されてない。

(けれど瞬間移動や空間転移のような転移系魔法がたった一種類の召喚魔法を除いて存在しないってどう言う事だろう)

(凄いのかわからないのかわからないね)

「今から皆さんには『土』魔法の基本である、『錬金』の魔法を覚えてもらいます。一年生の時にできるようになった人も居るでしょうが、基本は大事です。もう一度、おさらいすることに致します」

(エリオ君、『錬金』って)

(うん、やっぱり錬金術の『錬金』のことかな、でもまさか・・・)

ミッドチルダの魔法に『錬金術』は無いが、管理局の把握する管理外世界を含む全ての世界の中の、魔法の概念が存在する様々な世界の多くに『錬金術』と言う試みがあった事はミッドチルダの人々も知識として知っていた。

確か、金や不老不死の薬である『賢者の石』を化学的に合成する、と言う物だった筈、しかし化学の発展には貢献したものの、金とか賢者の石とかの合成に成功した例は一つもない筈だが・・・。

するとシュヴルーズは呪文を唱えながら石ころに向けて軽く杖を振る。石ころが光を発し、やがて光が収まると、ただの石ころだっ

たそれは、ピカピカと光る金属に変わっていた。

(………嘘)

(そんな……馬鹿な)

今朝会ったキュルケと言う女生徒が身を乗り出し、訊ねる。

「ゴゴ、ゴールドですか？ミセス・シュヴルーズ！」

「違います、ただの真鍮ですよ。ゴールドを錬金できるのは『スクウエア』クラスのメイジだけです。私はただの『トライアングル』ですから」

(もつと実力のある人なら作りだせるんだ……)

(ほとんど出鱈目だね……って『スクウエア』『トライアングル』って何?)

意味の解からない単語が出てきた。前後の文脈から何かの位を表すものらしいが。

解からない事は訊ねるしかない。しかしエリオとキャロで内緒話する時は念話でいいが、ルイズは念話の事を知らないので、子声で話しかけるしかない。

「ルイズさん、スクウエアとかトライアングルって何の事ですか？」

「授業中よ……ま、いいわ。系統を足せる数の事よ。メイジのレベルはそれで表すの」

「どう言う事なんですか？」

「たとえば『土』系統の魔法はそれ単体でも使えるけど『火』の系統も足せば、更に強力な呪文になるの」

「なるほど」

「『火』『土』の様に二系統を足せるのが『ライン』『メイジ』

シュヴルーズ先生のように『土』『土』『火』『火』三つ足せるのが『

トライアングル』反対に一つしか系統を持たないのが『ドット』」

「何故、同じ系統を二つ足すんですか？」

「その系統がより強力になるわ」

「すると、『スクウエア』は四つ足せてもつと強いんですか？」

「そう言う事」

「じゃあ、ルイズさんは幾つたせるんですか？」 キャロの問いにルイズは沈黙してしまう。

「ミス・ヴァリエール！」

「は、はい！」

「授業中の私語は慎みなさい！ 使い魔とお喋りする暇があるのでしたら、貴方にやって貰います」

「私ですか？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えて御覧なさい
しかしルイズは何故か困った様な顔をする。

（どうしたのかな？ ルイズさん）

（様子が変だね・・・）

「ミス・ヴァリエール。どうしたのですか？」

シユヴルーズが再度聞くと、キュルケが声を挙げた。

「先生」

「なんです？」

「止めてください。危険です」

「どうしてですか？」

「先生はルイズを教えるのは初めてでしたよね？」

「ええ、でも彼女が努力家だと言う事はきいています。さ、ミス・ヴァリエール、気にしないで続けなさい。失敗を恐れていては何も出来ませんよ」「ルイズ、やめて！」

しかし、ルイズは立ち上がり、

「やります」 そう言うのと教卓の方に降りて行った。

そのやり取りに首を傾げる二人。^{エリキャロ} そんな彼らにキュルケが話しかけてきた。

「ね、あなた達」

「なんですか？」

「危険よ、二人とも机の下に隠れていた方がいいわ」

周りを見ると他の生徒も机の下に隠れている。

「どう言う事です？」

「忠告はしたわよ。さ、フレイム」

そう言うと、彼女も机の下に身を隠した。

「いったいこれは……」

視線を教壇に戻すとルイズはさっきの呪文を石ころに向かって唱えていた。

「！」その様子に何かを感じ取る二人。

(エリオ君……なに、この魔力？)

(いけない！……この魔力の高まりは危険だ！)

思わず、ルイズに駆け寄り、エリオとキャロ。

ルイズの前に身を投げ出し彼女を庇う。

ドッカーン！！

物凄い爆音が教室中に響き渡る。シュヴルーズは至近距離で爆風を受けそのまま黒板に叩きつけられる。

悲鳴が拳がり、驚いた使い魔たちの声が鳴り響く。

そんな中、ルイズはと言うと、

「あれ、なんとも無い？」あれだけの爆発に無傷な自分の状態に不思議がっていた。

それもその筈でエリオとキャロがシールドを出して爆風を防いでいたのだ。

だが、シュヴルーズは間に合わず床の上でびくびくと痙攣しながら気絶している。

キュルケが叫ぶ。

「だから言ったのよ！ルイズにやらせるなって！」

「もう、ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

「ああ、僕のラッキーが蛇に食われたああああっ」

たちまち罵声が飛び交い始める。

「ルイズさん、これは一体……」エリオが尋ねる

「ちょっと失敗しちゃったみたいね」

「どこがだ！」教室中から一斉にツツコミが入る。

「ちよっとじゃないだろ！ゼロのルイズ！」

「いつだって成功の確率、ほとんどゼロのくせに！」

二人は、ルイズが何故『ゼロ』と言う二つ名で呼ばれているか理解した。

(エリオ君・・・私たち、とんでもない人に呼ばれたみたい)

(・・・先が思いやられるなあ、まったく)

エリオとキャラはため息をついた。

「どうしたの、タバサ」

「あの子達・・・見たことの無い魔法を使った」

「えっ？」

キュルケはエリオとキャラの方を見た。

第3話 学院（後書き）

必要な情報を詰め込んだら、かなり長くなってしまった。次は短くします。

第4話 刻印

ルイズの起こした爆発騒ぎによって、午前中の授業は中止となった。

生徒達の忠告を無視してルイズに魔法を使わせたシュヴルーズにも責任があると言う事でルイズにキツイお咎めは無しとなったが、罰としてルイズが教室の片づけをすることになった。

罰なので魔法を使うのは禁止であるが、元々魔法の使えないルイズには関係無かった。

しかし、使い魔であるエリオとキャロは教室の片付けに付き合わされる羽目になった。

「……これで解かったですでしょう。何故私が『ゼロ』と呼ばれているか」

その言葉に、エリオ達の手が止まる。

「私は貴族なのに、魔法が使えない……今まで散々努力してきたわ！何度も練習を繰り返したし、何故こうなるのか色々書物を調べたりもした！でも使える様にならない！いつも爆発が起きて魔法が使えない！」

「で、でも物凄い魔力だったじゃないですか！！」しかしそのキャロの言葉はルイズの怒りに火をつけてしまう。

「適当な事言うんじゃないわよ！メイジでも無いあんたたちに何で魔力の事が解かるのよ！」

（キャロ……）（あっ……）ルイズは二人が魔法使いである事を知らないのだ。

「どうせあんたたちも心の中じゃ馬鹿にしてるんでしょう、本当の事言いなさいよ！」

「僕らが相手の欠点をあげつらって見下す様なさもしい人間に見えるか？」

「ふん、口では何とでも言えるわよね」

「じゃあ、本当の事を言いますか、はっきり言って、迷惑しています」

「迷惑ですって!」

「僕らは納得して此処に居る訳じゃありません。訳の解からない召喚魔法で拉致同然に連れて来られ、不本意な形で此処に居ます。貴方の事は昨日まで知りませんでしたし、魔法が使えない事はさつき始めて知ったばかりです。なのに貴方は僕らが自分の事を馬鹿にしていると決めつけ、さあ『本音』を白状しろという。僕らがどんな事を『本音』として言っても貴方は怒るんじゃないですか?」

「じゃああんた達は私の事をチラツとでも馬鹿にしなかつたというの!」

「仮に馬鹿にしていたとしたらどうだと言うんです?それを『正直』に白状させて『罰』と称して僕らをいびつていれば一時的に気は晴れるかも知れない。でも貴方の『現実』が変わる訳じゃない、貴方は愚痴を溢すためにわざわざ僕らを呼んだんですか?」

「なによ!わかつたような事言つて!最初から魔法の使えないあんた達にあたしの気持ちがあつたままですか!」

「あ……」

「キャロが何か言いかけて口を嚙む。こんな時に『実は自分達は魔法が使えました』なんていつても火に油を注ぐ様なものだ。」

「使えても、使えなくても同じ事です。僕らは貴方じゃありません。貴方の事は貴方にしか解からない」

「ああそうでしょうね、悪かつたわね!『解からない』事聞いて!」

「……あれ?でも、何か……」

「エリオは急に考え込む。」

「……ルイズさん、さっきこう言いましたよね。『いつも爆発が起きて魔法が使えない』と、貴方はそれで自分が『平民』と呼ばれる人達と同じだと思いますか……?」

「あ、あなたね。」

「言い方が悪かったのならこう言い換えましょう。『平民』と呼ばれる魔法の使えない人達に杖を持たせて魔法を使わせたら貴方と同じ様に爆発が起きるんですか？」

「！」 思いもよらないエリオオの指摘にルイズはハツとする。

「本当に魔法が使えないなら爆発すら起きない筈です。貴方のさつきの魔法が『失敗』なのは間違いありませんが、『失敗』して爆発が起きるつてのは魔力が無いんじゃないや無くて魔力を制御できないだけです。『ゼロ』つて二つ名に違和感を感じていたんですが、『ゼロ』で無くて『暴走』とか『爆発』なら話が解かり易かったですね」

「そんな二つ名はもつと嫌よ！」

「『話が解かり易い』つて言っただけでそう言う二つ名を勧めている訳じゃ有りません……」

「……でも、言われて見れば確かにそうよね。私は『ゼロ』じゃ無かったんだ……。でもそれじゃ魔力を制御できる様になるにはどうすればいいのよ？」

「それは……僕には解かりません」

「なによ、やっぱり解かないんじゃない……。ルイズはガツカリしたように呟く。

「あの……ルイズさん……」話を黙って聞いていたキャラが口を挟んだ。

「ここは魔法を教わる所ですよね……」

「ええ、そうよ」

「だとしたら……そう言う事は本来、魔法を教えしてくれる人……、例えば先生とかに聞くのが普通だと思うんですけど、先生方はルイズさんの失敗の原因について何も教えてくれなかったんですか？」

「そ、それは……」

「失敗が繰り返されるのは何か原因がある筈です……誰かそれに気づいた人が居てもいいと思いますけど……」

ルイズはかつての事を思い返してみる。記憶にあるのはいつも何故か困った様な先生達の顔ばかり、いや、先生達だけでは無い。かつて家にやって来ていた家庭教師も、自分に魔法の手ほどきをしてくれていた母や姉達も、魔法に失敗した時に見せるのは困惑したような顔だけで、原因について指摘してくれた人は誰もいない。

「……そんな人……居なかったわ」

「それは……おかしく有りませんか？貴方が魔法を学んだ相手が一人だけな訳は無いから誰か一人ぐらい何かに気づいても……」
「じゃ、その『何か』って何？」

「だから……それは……」

「お母様やエレオノールお姉さま、家庭教師やこの学園の先生方、みんな有能なメイジよ。もちろん先生としても決して無能な筈は無いわよ。その人達が気づかない『原因』なんて物が本当にあるの？」
「……」
「キャロはそのまま口を噤んでしま

う。
「ルイズさん」エリオが変わって口を開いた。「何よ」

「僕らにはこれ以上の事は何も言えません。ただ、これだけは言えます。もし『原因』があるとすればそれは決して貴方に落ち度のある事
呪文の間違いとか、手順の間違い

とかじゃありません。もしそうならきつと貴方に魔法を教えた人の誰かが気づいた筈です。それに、『爆発』と言う結果がある以上、必ずどこかに『答え』がある筈です。それを探すのに僕らは力にならないかも知れませんが決して諦めないで下さい」

「だ、誰が諦めるなんて言ったのよ。私はまだ諦めてないわよ！頑張ってきつとハルケギニアのメイジになってやるんだから！」

「……」
「さつき愚痴を溢していたのは殆ど諦めてたからじゃ無いんですか……」

「エリオ、アンタ殺されたいの」

「わ、わかりました。もう言いません」

「……まあ、いいわ、続けるわよ」

ルイズはそのまま作業を再開する。そしてそのままもくと三人は作業を続ける。

「……エリオ、キャラ」

「……なんですか？」

「……アリガトね、……励ましてくれて」

そう言うとルイズは再び、何事も無かった様に片付けに取り掛かる。

それにしても

エリオは思った。自

分達が召喚されてここに使い魔として居る事を好ましく思っていないか、かつた筈なのに何相手を励ましているのだろう。

それに、ルイズが魔法を使えないと言う事は彼女の魔法で元の世界に戻る、と言う選択肢は期待出来ないと言う事だ。なのに馴れ合っていていいのだろうか。

（エリオ君……）キャラが念話で話しかけて来た。

（何、キャラ）

（実はエリオ君に聞いて欲しい事があるの）

（聞いて欲しい事？）

（フリードの言葉が解かる様になったのは話したでしょう）

（うん）

（実はフリードだけじゃ無かったの。今朝キュルケって人が話しかけてきた時、その人が連れていた使い魔のフレームの言葉も解かったの）

（まさか……）

（それだけじゃない。さっきの授業中、他の生徒の人達の使い魔達も、『言葉』で語りかけてきたの）

（それ、本当？）

（うん）

どう言う事だろうか、そもそもフリードの言葉だってキャラには今まで解からなかったのだ。キャラは竜召喚士でフリードはキャラ

の使役竜だから、としても関係無い他の使い魔の言葉まで解かるとはどう言う事か、それに、この世界に来ていきなり解かる様になった、と言うのも変だ。この世界に来て自分達がされた事といえば・
・使い魔の契約ぐらいしか無い。

(とにかくこの後で一緒に来て。 エリオ君にも聞かせるから)

(わかった「あのルイズさん」

「何？」

「これが済んだら僕達、他の使い魔を見に行つて良いですか？僕らの所には居なかつた珍しい生き物も多いので」

「仕方ないわねえ。用が済んだら戻つて来なさいよ」ルイズはさつきの事でいくらか気分をよくしたのか、以外にアツサリと許可を出した。

ここはトリステイン魔法学院の図書室の一画、フェニアのライブラリー。学園の教師のみが閲覧を許される場所である。

ここでコルベールは調べ物をしていた。昨日召喚の儀の時に確認したエリオの左手とキャロの右手に刻まれたルーンについてである。

「やはり……そうだったのか」

今、コルベールが開いてる本のタイトルは『始祖フリミルの使い魔たち』と言う。かつてハルケギニアに居たフリミルと言う偉大な魔法使いの使役した使い魔について書いた本である。

「同じだ……全く同じ……」

昨日写し取った二人のルーンのスケッチと本のページを見比べていた。

「……伝説の再来だと言うのか……」コルベールは本とスケッチを手に立ち上がった。

「この事を、早くオールド・オスマンに報告せねば……」

その頃、エリオとキャラロは生徒達の使い魔を収容している飼育小屋の前にいた。

エリオは直接、使い魔たちの声を聞く事は出来なかったが、フリードの時の様にキャラロに念話を介して中継してもらったのだ。

(本当だ)

(解かってくれた?)

二人きりの時は本当は念話で会話する必要は無いが、使い魔達の声のエリオが聞く為に念話を使っていたのでつい念話での会話になってしまう。

(一体どう言う事だろうね)

(わからない、急にこんな・・・)

二人して悩んでいると、にゅっと横から肉が差し出された。見ると本来の大きさのフリードより一回り小さい白い竜が肉を啜っていた。

「えっ何、私に繰れるの?」すると竜は肉を啜えたまま、コックリと頷く。

「キュウ」

「ありがとう、でも私たち生肉は食べられないの」キャラロがそう言うとその竜は残念そうにうな垂れる。

(あれ・・・)そこでキャラロはふと、あることに気づく。

「ねえ」

「キュ?」

「貴方は・・・喋らないの?」

「キュ!? キュキュキュキュ」竜は肉を啜えたまま、慌てて首を振る。

キャラロは他の使い魔たちが言葉を使って話かけて来るのに、目の前の竜が人の言葉で話かけて来ないのに違和感を感じたのだ。

しかし、力いっぱい首を振って否定する様は逆に『実は私は喋れ

ます』と肯定しているような物だ。

「……………キャロ？」エリオは何が何やら訳が解からない。

「……………ごめん、変な事聞いたよね。喋れるわけ
・ ・ ・ 無いよね」

実際、キャロは目の前のこの竜が喋れる事を特に暴かなくてはならない理由はない、たまたま気づいたから指摘しただけなのだ。本来喋る筈の無いものが喋ると言う事は大変な事であるし、それを隠すからには何か理由がある筈なのだ。本人が隠したいなら聞かなかつた事にして、そつとして置くのが一番だ。

「あら？二人とも何してるの、二人とも」シエスタである。手に何かが入った桶を持っている。

「あ、シエスタさん、今朝はありがとうございます」

「あたし達、他の生徒さんの使い魔を見ていたんです」

「そんなに珍しい？」

「ええ、私たちのトコには居ない生き物も沢山いますから」

「シエスタさん、それは？」エリオはシエスタの持っている桶を見て、言った。

「使い魔さん達の餌よ」

「人間の食事だけでなく、使い魔の世話までシエスタさんがしてるんですか？」

「ええ、そうよ」

「そういうの、本当は使い魔の主人の仕事じゃないんですか？」

「貴族様たちは召喚するだけで、そういう事まではやりたがらないから……………」

その話を聞いてエリオ達は呆れてしまう。たしか、ルイズは『使い魔とメイジは一生を共にする』と言っていた。そんな使い魔の世話を他人任せにするのだから。

エリオ達の親しい人間で使い魔を連れているのは彼らの親代わりのフェイトだが、彼女は使い魔であるアルフの世話を人任せにはしない。アルフにはある程度知性が与えられ自分の事はある程度自分

でやってしまおうにしてもである。

使い魔では無いがフリードもキャロが自分で面倒を見ている。これが動物を使役する魔導士の義務である。使い魔の面倒を自分で見ない彼らに使い魔に対して、一生自分に従えなどと言う資格が果たして有るのか？

「でも、シエスタさん一人じゃこれだけの使い魔の世話、大変でしょう？」

「別にそれほどでも無いわ、動物の世話は故郷の村で家畜の世話で慣れてるし」

「……あの、あたし達手伝いましょうか？」

「そんな……悪いわよ」

「気にしないでください。朝のお礼です」

「そう……ならお願いするわね」

シエスタはエリオとキャロの手を借りて使い魔の世話を始めるのであった。

エリオとキャロが作業を終え、シエスタと一緒にその場を去った後、キャロに喋れる事を看破されそうになった竜

シルフィードはキャロにあげる筈だった啜えたままの生肉をそのまま飲み込むと、ホッと安堵のため息をつく。

「よかった。バレなかったのね」

「シルフィード」シルフィードはその声にギクつとなる。

「……お、お姉さま!？」

そこにはメガネの少女が立っていた。シルフィードの主、タバサである。

「気づかれた……みたい」

「きききき、気づかれて無いのね。あああああああ、あの子、喋れるわけないよね」って言ってたのね!まんまと騙されたのね!

「気づかなかった事にする為、出まかせを言っただけ……」

あれは……気づいてる」

それを聞くなり、勇猛な竜のイメージからはかけ離れた怯え振りで狼狽するシルフィード。

「ごごごご、ゴメンなのね。許してなのね。だから怒らないでなのね！」

「……ばれたのは貴方のせいじゃない。……このことで貴方を罰したりしない」

それを聞いてシルフィは安心するが、タバサはキャロ達が去って行った方を何時までも眺めていた。

「……あの娘、何者……？」

ところ変わって、ここは学院長室。

「オールド・オスマン」

「何じゃね？ミス……」

「暇だからといって、私のお尻を撫でるのはやめてください」

この自分の秘書の女性に変態行為を咎められてるファンキーなボケ老人が、まさかこの学院の学院長、オールド・オスマンその人だとは、知らない人が見たらとても信じまい。

そのボケじじいはその秘書

ミス・ロングビル

に痴漢行為を咎められるや否や、口を半開きにしてヨチヨチと歩き出す。

「都合が悪くなるとボケた振りするのもやめてください」

今しがた痴漢されてたとは思えないほど冷静な声でロングビルは言った。

オスマンはなんか勿体つけて溜め息をついた。

「真実とは何処にあるんじゃない？考えた事あるかね？ミス・ロングビル」

「少なくとも私のスカートの中には無いと思いますが」

ちょうどその時、院長室のドアをノックする音がした。

「オールド・オスマン、いらっしやいますか？」

ノックの主はコルベールであった。

「何事かね？ミスタ・コルベール。騒々しい」

「大至急、ご報告せねばならぬ事があつて参りました。まずはこれを」

コルベールがオスマンに見せたのはエリオとキャロの手の甲に現れた使い魔のルーンのスケッチであった。

それを見るなりオスマンの表情が険しいものになる。

「ミス・ロングビル、すまんが席を外してくれんかのう」

オスマンの顔はもはやファンキーな似非ボケ老人のそれでは無かつた。

「あなた達、お昼も用意してるわよ。また、厨房にいらっしやい
使い魔の世話を終えたシエスタはまた二人を昼食に誘う。

「・・・そんな、たびたび悪いですよ」

「遠慮しなくていいのよ。あなた達育ち盛りなんだし」

「・・・でも、頂く理由がありませんから」

「子供がそんな事気にしないでいいのよ。平民同士助け合わなく
ちや
ちや」

「・・・エリオ君、どうしよう」

「うん・・・」

エリオは暫らく考えていたが、やがて妙案を思いつく。

「じゃ、こうしましょう。僕達で、さっきみたいにシエスタさん
の仕事をなにか手伝います。食事はそのお礼って事で」

「そんな・・・それこそ悪いわ」

「それこそ気にしないでいいです」

「それに、さっき『助け合わなくちや』って言ったのシエスタさ

んですよ」

「……………」

エリオ達の思わぬ切り返しに返す言葉をうしなつたシエスタであるが、気を取り直し、言った。

「フフツ、あなた達には負けたわ。じゃ食後に生徒さん達に出すデザートの配膳でも手伝つて貰おうかしら」

「わかりました」

「任せといてください」

二人はそう言うとシエスタと共に食堂に向かった。

そうしてエリオ達はシエスタと手分けしてデザートの配膳を始めた。

すると、エリオの耳になんか聞き覚えのある声があった。

「やっぱりあの一年生に手を出していたのね！」その声は気のせいしかキャラコの声に聞こえる。

(……………どうしたの？キャラコ、大声なんて出して……………)

(えっ？あたし大声なんて出して無いよ)

(じゃ、今の声は一体……………?)

そこでエリオは騒ぎの中心と思われる方を見た。

すると、そこでは一組の男子生徒と女子生徒が言い争いをしながら揉めていた。

キャラコの声だと思えた声の主は、争いの当事者である金髪巻き毛の女生徒だった。

「誤解だ、モンモラシー。彼女とは」

「この……………うそつき！」そう言つとそのモンモラシーと呼ばれたキャラコに似た声の女生徒は一方の男子生徒の頬にビンタをかまして去つて行つた。

(……………なんだ、今の人、キャラコに声が似てるんだ)

(え・・・私って今の怖そうな人にそんなに似てるの・・・?)
なんかシヨックを受けた様だ。

(あ・・・気にしないで、似てるのは声だけだから・・・)
そこで近くにいた生徒に何事か聞いてみる。エリオが訊ねたのはマリコル又と言う授業の時にルイズをからかっていた太目の少年だった。

「これは・・・何の騒ぎなんですか？」

そこへ本物のキャラコもやってきて二人で話を聞く。

「ああ、ギーシュの二股がばれたんだ」ギーシュというのはたった今さっきのモンモラシーにビンタを喰らった男子生徒だ。

「ギーシュはモンモラシーと付き合っていたらしいんだけど一年生のケティって娘にも手を出していたのさ。プレゼントとして貰ったモンモラシーお手製の香水をギーシュが落とした事から、まずケティにばれ、その騒ぎを偶然見咎めたモンモラシーにも知られたって訳さ」マリコル又はケーキをムシャムシャ食べながら説明する。

「それで・・・さっきの顛末ですか・・・」

「ちよつとばかり顔が良くてモテルからって色々な女の子に手を出してたからな。いい気味さ。ああ、ケーキ余ってたらおかわりくれない？」

「あ、はい・・・」キャラコはもう一つケーキを渡す。

それにしてもああいう手合いの人間は何処の世界にも居る様だが、文字ど通りの異世界にも居るものらしい。こういうところはミッドチルダと変わらない。もっとも、自分の周りにはそういう人間はいないし、自分もそんな人間になる気は無いが・・・。

「あのモンモラシーって人・・・物凄く怒ってたけど、そんなに酷い事なの？二股が良くない事ってのは知っているけど・・・」

まだ、恋愛と言うものを理解しておらず、恋愛の好きと普通の好きの^{イク}違いが解からないキャラコには恋愛における『独占欲』と言う感覚は理解を超える物だった。

「そのうちキャラコにも解かる時が来るよ・・・」

そう言うとエリオは仕事に戻ろうとする。キャロによく似た声が騒ぎに関わっているから興味を引いただけで、本当はエリオ達には関係の無い他人事の筈だったのだが、事態は思いもよらぬ方向に発展する。

何故かさっきの騒ぎの一方の当事者であるギーシュと言う生徒がシエスタを呼び止めたのだ。

「待ちたまえ、そのメイド君」

「はい、何ですか？」

「君が軽率に、香水の瓶なんか拾い上げたおかげで二人のレディの名誉が傷ついた！どうしてくれるんだね？」

「も、申し訳ありません！」

「えっ!？」

「なんでシエスタさんが？」

訳の解からない事態に驚くエリオとキャロにマリコルヌがケーキを齧りながらも親切に解説してくれる。

「ああ、さっきの騒ぎの原因の香水を拾ったのがあのメイドなんだ」

「そんな・・・」

でもそれなら自分は関係無いと返せば良いだけなのにシエスタはただひたすら怯えて謝罪を繰り返すのだった。

「僕は気付かない振りをしたんだ。それぐらいの機転は利かせてくれても良かったんじゃないか？」

「申し訳ありません・・・申し訳ありません。」

見かねたエリオが場に割って入る。

「ちよつと待って下さい。シエスタさんは関係無いでしょう。」

「なんだね、君は？」

「シエスタさんは落し物を拾っただけです。貴方が酷い目にあつたのは貴方が二股を掛けていたからで、シエスタさんの責任じゃないでしょう」

「・・・だめよ、エリオ君・・・」シエスタはエリオを止めよ

うとする。

しかし、日ごろギーシュばかりがモテルのが面白くない周りの男子生徒がエリオの意見に同調して囃し立てる。

「そうだ、ギーシュお前が悪い」

さて、こうなると面白く無いのがギーシュだ。

「君は、確かルイズの召喚した平民の子供だったな。どうやら貴族に対する礼儀がなっていないようだな。流石はゼロのルイズの呼び出した使い魔だ」

「あいにく、自分の不始末を他人のせいにする様な礼儀など知りません」

「いいだろう、その身をもって礼儀という物を教えてやろう。決闘だ」

「……なんでそうなるんですか……」

「もう遅い、例えば子供だと言っても容赦はせん。ヴェストリの広場で待つ！」

そう言い残してその場を後にするギーシュの姿にエリオは啞然としてしまう。

「殺されちゃう……」

「えっ？」

「殺されちゃう、貴族を怒らせたら……」

そう言うとシエスタは走り去ってしまう。

「シエスタさん……一体何怯えてるのかな……」キャロはシエスタの反応に首を傾げる。

エリオも訳が解からなかった。

「エリオ！アンタ何勝手に決闘の約束なんかしてんのよ！」ルイズだった。

「僕もした覚えは有りませんが……」

「とにかく一緒に来なさい！」

「何処いくんです？」

「謝りにいくのよ、私も一緒に謝ってあげるから」

「嫌です」

「何言ってるのよ!」

「何故僕が謝らなくてはならないんですか?僕は当たり前前事を言っただけです」

「そんなの関係無いわよ。もし貴族と決闘なんて事になったらどうするの!」

「決闘する気なんて有りませんが、どう言う意味です?」

「あのね、平民は貴族に絶対勝てないの!」

「それは何故ですか?」

「だから、魔法の使えない平民がどうやってメイジである貴族に勝てるって言うの!」

エリオは耳を疑った。言葉通りに取るならこれから魔法を使って決闘が始まると言う意味にしか聞こえない。

「ルイズさん・・・言ってる意味解かってますか?魔法で決闘するって事は『命のやり取りをする』てのと同義ですよ」

エリオは『学校で決闘』なんて言うから子供のケンカのようなものだと思っていたので魔法で決闘などとは思わなかったのだ。

ミッドチルダ式の魔法には非殺傷設定という物があるが、大系の違うこの世界の魔法にもそんな都合の良いものが有るとは思えない。同時に、エリオは何故シエスタがあんなに怯えていたのか理解した。この世界での貴族と平民の差、それは貴族が平民の生活を握っていると言うだけで無く、魔法という力で君臨していると言う事だった。

「だから、解かってないのはアンタの方でしょうおおお」

しかし、そんなルイズを他所にエリオは

「マリコル又さんとおっしゃいましたね。ヴェストリの広場ってどこです?」

「ああ、そのの出口から通路を・・・」

「アンタ、私の話聞いて無かったの!」

「決闘なんて受けるつもりありませんでしたが、気が変わりました」

た。この決闘、受けます」

「キャロ！貴方もエリオを止めて！このままじゃ殺されるわ！」

「えっ、でも……」

「ルイズさん、『僕に勝ち目がない』と貴方が思っている理由は

『貴族は魔法が使えるから』でしたね」

「ええそうよ。だから……」

「それが理由なら問題ありません」

「え……？」

エリオはそのままその場を後にする。

その様子を見ていたキュルケは呟いた。

「これは、面白い事になったわね」

第5話 決闘

(エリオ君)

ヴェストリの広場へ向かう通路の途中でキャラロが念話で話しかけてきた。

(何？キャラロ)

(もしかして魔法を使う気なの？)

(そうだけど・・・なんで？)

(・・・この世界で私たちの魔法、使っていないのかな？)

(それ・・・どういう意味？)

エリオはキャラロが何を言わんとしてるかわからなかった。エリオ達がこの世界で自分達が魔法使いである事を隠しているのは成り行きでしか無いと思っていたからだ。

(私たちこの世界に来てまだ二日しか経ってないけど、この世界で『魔法』がどういう意味を持つかだんだん見えて来たでしょう？)

(うん・・・この世界の魔法はこの貴族達の権力の礎になっているらしいって事・・・)

(もし、そんなところへ周りから『平民』だと思われてる私たちが未知の魔法を持ち込んだら、私たち、ここの人達から疎んじられるんじゃないかな？)

(キャラロ、僕らは何時までもここに居る訳じゃないんだよ)

(でも、何時まで居る事になるか解からないんだよね)

エリオはそこまで言われてキャラロが何を懸念しているのか理解した。

キャラロは強大すぎる力を持って生まれたために故郷の村から追放された過去を持つ。

ミッドチルダに帰れる保障は無い。もし、一生ここで暮らす事になった時、この世界で居場所を失う事になったら、その日から、つらい日々が始まる事になるのだ。

(それに、私たちの魔法はこの世界の人達に災いをもたらす事にならないとも限らない・・・)

(・・・でももう、後には引けないよ、この決闘にはシエスタさんの事がかかっている)

(・・・ゴメン)

(それに・・・今回、魔法を隠しおおせたとしても僕らが魔導士である限り、僕らの魔法を使わざるを得ない事態に直面する時が避けられないと思う)

(・・・そうだよ、ゴメン、変な事言っただけ)

(・・・でも、キャラの言う事も解かるよ。今回は極力魔法を使っている事を悟られないようやってみる)

(大丈夫？それで)

(多分、何とかかなると思う)

(わかったわ、気を付けてね、エリオ君)

とはいえ、これは難問である。

『魔法を使っている事を悟られない様にする』っと言う事は、言ってみれば使う魔法に制約をかけると言う事だ。すなわち、選択肢が狭められるという事になる。

「ストラーダ、どう思う？」エリオはストラーダに相談する。

『今のエリオの実力で周囲に悟られず魔法を使用する事は大変困難です。一番基本的なシュピーア・シュナイデンでも魔方陣の展開を必要とします』

考えて見れば、自分が使える魔法で使用を悟られず使えるものは殆ど無い。

シールド等の防御魔法で空中の何も無い所に光る魔方陣などが描かれれば魔法だと丸解かりだ。朝の授業の時は全員が机の下に隠れていてルイズは爆発に身構えていたので誰にも気付かれて無いが。

高速移動も考え物だ。通常移動ののだが速すぎて瞬間移動にしか見えない代物だ。どう言い繕っても魔法だと思われてしまう事に変わり無い。

「僕もまだまだ未熟だな。こうして見ると殆ど気付かれずに使える魔法が無い」

『せめて相手の戦力がわかれば対策も打てるのですが、いかんせんデータが不足しています』

そういえば二つ名はメイジの魔法を表すらしいが、エリオはギースユのそれを知らない。聞いていればある程度相手の戦法も推測できたろうが。さっきルイズにギーシュがどんな魔法を使うのか聞いておくべきだった。

これがなのはやフェイトならば魔法を周囲にそれと悟らせずに使えるのかも知れない。

それよりも戦いが始まってから相手の力を見極めていたのでは後手に廻らざるを得ない。シールド一つ使えないとなると射撃魔法の類でも使われれば致命的だ。

『取り敢えずバリアジャケット位は展開しても問題ないと思います。この世界の魔法に防御魔法は無いと思われまので通常の衣服と見分けは付かないと思います』

「なんでそう言い切れるの？」

『先ほどの授業の爆発騒ぎの時、ルイズ嬢が魔法を使おうとする他の生徒は机の下に退避してました。防御魔法があるならあんな行動は取らないと思います』

「そういえば・・・」

『とにかくバリアジャケットで守りを固めて序盤は回避に努めながら敵の出方を伺うのが得策だと思われまます』

「それしか無いみたいだね・・・」

大っぴらに魔法を使って良いのならこんな事も考えずに済むのだろう。最も慎重になるのは悪い事では無いのかも知れないが。

「ストラーダ、セットアップ」

エリオはヴェストリの広場に向かう通路である此処でバリアジャケットを展開する事にした。セットアップの最中を見られなければ何の問題も無い。

エリオの身を包む衣服が分解され、バリアジャケットが形成される。同時にストラダが待機フォルムからシユピーアフォルムに変形する。

そしてエリオが槍状態シユピーアフォルムのストラダを手にする。

「!？」 異変を感じたのはその時だった。

「いまのは？」

槍状態のストラダを手にしたとき、左手が熱くなり、体が軽くなつた様に感じたのだ。

『エリオ、セットアップに連動して左手のルーンから身体強化の効果が発動しました』

「このルーンにそんな効果が？」

『ベル方式の身体強化の魔法には及びませんが、今回のエリオの要求にはぴつたりの効果です。これを利用した戦術を組み立てる事を進言します。あと、このルーン自体が私自身ストラダをスキャンしようとした様です。ブロックしましたが』

「……でも相手の出方が解からない事にかわりは……アレ、そんな事よりソレ、おかしく無い？」

『何がですか？』

「この世界の人はミッドチルダの魔法の事を知らない筈なのに、なんでデバイスのセットアップに連動して発動する術式を組んで他人に刻めるの？これを刻んだルイズさんだって僕らが魔導士だって知らない筈」

『それに付いては現時点でデータが不足しています。このルーンに付いて知っている人物に訊ねる以外にありません』

「……今は考えても仕方ないか……」

エリオはそのまま広場に向かう事にした。

そのころ、学院長室では、オールド・オスマンとコルベルがエ

リオとキャロの手の甲に現れたルーンについて話していた。

「ふーむ、それで始祖フリミルの使い魔に行き着いた、と言う訳じゃな？」

「そうですね、ミス・ヴァリエールが召喚した二人の使い魔のうち、少女の方は『ヴィンタールヴ』と、少年のは『ガンダールヴ』と同じ物です！」

「しかし、その二人は平民なのじゃろう？いくら同じルーンが浮かんだからって、ちと、早計じゃないかのう？」

「で、ですが……」

その時、院長室のドアをノックする音がした。

「誰じゃ？」

「ロングビルです」

一度、部屋を退室したミス・ロングビルが再び、院長室に来た。

「ヴェストリの広場で生徒達が決闘を始めたそうです」

それを聞き、オスマンがため息をつく。

「まったく、暇をもてあました貴族ほど質の悪い生き物はおらなわい。で、誰と誰が暴れておるのじゃね？」

「一人はギーシュ・ド・グラモン」

「あの色ボケグラモンの馬鹿息子か。どうせ女子の取り合いじゃろって。相手は誰じゃね？」

「それが、相手はメイジではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の少年の方です」

「ほう……」

「教師たちが騒ぎを鎮めるため、『眠りの鐘』の使用許可を求めています」

「あほか、ケンカを止めるのに秘宝を使ってどうするんじゃ。放っておきなさい」

「解かりました……」

ロングビルは黙って院長室を退室して行った……。

「オールド・オスマン」

「うむ」

オスマンが杖を振ると壁に掛けられた大きな鏡にヴェストリの広場の様子が映し出される。『遠見の鏡』と言うマジックアイテムである。

「諸君、決闘だ！」

エリオの到着に気付いたギーシュは高らかに宣言する。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの平民だ！」

既に広場の周りは沢山の生徒達がギャラリーとして押し寄せていた。

「逃げずによく来たね。その勇気だけは褒めてあげよう」

その芝居がかった台詞はエリオにと言うよりは大勢のギャラリーに向かって放たれたものだ。

「しかし、わざわざ着替えて来るとはね。それが君の死に装束という訳か。お望み通り君の血で、その白い服を真っ赤に染め上げてあげよう」

どうやら、こっちの狙い通りバリアジャケットを普通の服だと思ってくれているようだ。

「それにしても、そんな大きな槍を持つてくるとは随分物々しいじゃないか。よからう。平民が貴族に噛み付く為に磨いた牙だ。特別に許してやろう」

あくまで上から目線である。自分が負けるとはこれっぽっちも思っていない。

「しかし、僕に弱い者をいたぶる趣味はない。君が泣いて土下座して謝るなら許してやらん事も無いが、どうするね？」

「あなたに許しを乞う謂われは無いし、負ける理由もありません。お断りします」

「……よからう、後悔するがいい」

「……とそこへルイズがキャラ口を引っ張って駆けつけてきた。

一度は逃げ出したシエスタも心配になったのか、遅れてやってきた。

「ちよつとエリオ！何をしてるのよ！早く謝りなさい！今ならギ―シユも許してくれるかもしれないわ！！」

「それは聞けません。僕に謝る理由がありません」

「あんた、わかってないのよ！平民はメイジに絶対勝てないっていつてるでしょう！」

「そんな事はありません」

「ああもう！なんて物分りが悪いのよアンタは！キャラ口もエリオを止めて！」

「え……」

「あんただってエリオに死んで欲しくないでしょう！あなたからも何か言つて！」

「キャラ口ちゃん、あたしからもお願い！エリオ君をとめて！あたしの為にエリオ君に何かあったら悔やんでも悔やみきれない！」

「シ、シエスタさんまで……」

キャラ口は迷った。エリオに無事でいて欲しいのは自分も同じである。エリオの実力は知っているが、さつき念話で余計な事言つて詰まらない制約を付けてしまった。それが原因で負けるかも知れない。しかし、エリオがこの決闘を受ける気になった気持ちもわかるのだ。ずっとエリオとパートナーでいたキャラ口はエリオの事をよく知っているから……。

いろいろ考えた末キャラ口はきめた。

「……大丈夫です。エリオ君は負けません。あたしエリオ君が勝つて信じてますから」

「キャラ、キャラ口ちゃん……」シエスタは失望したような顔でその台詞を聞いていた。

「もう！だから！止めてって言っているのよ！わかんない子ね、もういいわ！」

業を煮やしたルイズはエリオの行く手を遮る。

「エリオ！ご主人様の命令よ！決闘をやめなさい！」

どうしても止めさせるつもりらしい。しかし、今更やめる訳にも
いかない。エリオは一計を案じた。

「どうしても言うなら条件があります」

「アンタ、ご主人様相手に取引するつもり？」

「そんな積もりはありません。結果的にそうなるだけです」

「どう言う意味よ」

「僕が降参したらルイズさんはそれを自分の恥として受け入れる
んですね？」

「そ・・・そんな事・・・出来る訳無いじゃない！」

そのやり取りを聞いてギーシュが大笑いした。

「ハツハツハツ、自分の使い魔に言い負かされるなんて実に滑稽
だな、君は。使い魔君の言う通りだよ。彼が臆病風に吹かれると言
う事は主人である君が恥をかくと言う事だ。ひいてはヴァリエール
家の恥でもある。それでも良いと言うなら止めてあげてもいいよ。
もっとも彼の方はやる気満々の様だが」

「う・・・で、でも貴族同士の決闘は禁止されてるじゃない！」

「禁止されているのは貴族同士の決闘だ。彼は平民だ。なんら問
題は無い」

「で、でも・・・そんな事・・・」

「そう言う事です。そこをどいてください」

するとルイズはギーシュの前に歩み出てなんとギーシュに向かっ
て土下座したのだった。

「何の真似だね？ゼロのルイズ」

「使い魔の無礼は主人である私が代わって謝罪するわ。だからも
うエリオを許してあげて」

「そういう訳には行かないよ。彼は貴族である僕の顔に泥をぬっ
てくれた。それがどう言う事を意味するのか身を持って思い知って
もらわなくては」

「ルイズさん、どう言う積もりですか！」

「黙つてなさい！ 使い魔と主は一心同体、たとえ気に喰わなくても出来の悪い使い魔でもムザムザ死なせる訳にはいかないのよ。そんな事を黙つてみていたらメイジとして失格よ！ わかったら此処にきて一緒に謝りなさい！」

エリオはそれを聞いてため息を一つ付き、こう言った。

「貴方と一心同体になつた覚えはありませんが、貴方の『使い魔』に対する覚悟はわかりました。」

「わかつてくれたの？ じゃ・・・」

「ですが、それは聞けません」

「何でよ！？」

「じゃあ、貴方はそのギーシュと言う人のやつてる事が正しいと言うんですか？」

「そ、それは・・・」

「もし、貴方が同じ場面に出くわしたとき、貴方は人として僕と同じ事をしないんですか？ もし貴方が保身のために口を噤んでいるような人なら、そんな人にご主人様面されたくありません」

これにはルイズは何も言い返せなかつた。食堂で何があつたかはルイズも知つていた。同じ事があつたら間違いなくルイズがシエスタを庇つていた筈である。

「わかつたら、そんな無様な真似はやめて下さい。僕は自分が間違つていないと思う事に、頭を下げる気はありません」

「あ、あんたね」

そこで、とうとうルイズの堪忍袋の緒が切れる。

「もう知らない！ 勝手にすればいいじゃない！ アンタなんかもうどうだつていいわ！ 幸い二人召喚できたし、一人いなくなつても別に困らないわ！ アンタなんかコテンパンにやられて殺されちゃえばいいんだ！」

「やめてください！」

ルイズの言葉にキヤロが怒りの声をあげる。

「エリオ君が死んでもかまわないなんて暴言を吐く人にあたしは

仕える積もりはありません！今言った事撤回してください！じゃなきゃ結果に関係無くここを出て行きますから！」

「な、なによ・・・ごまじ・・・」

様に向かつて、と言い掛けてルイズは口籠もる。いつもなら、自分をご主人様である事を振りかざし、いかなる理由があるうと『そんなの絶対認めないわよ！』と切り捨てる所だがキャラの異様な迫力に負けてこの時は言い切る事が出来なかった。

「わ、わかつたわよ・・・」

そのまま、押し黙ってしまった。シエスタはそんなルイズさえ黙らせるキャラの様子に驚きを隠せない。

考えて見れば自分は二人の事を『ミス・ヴァリエールが召喚した使い魔』としか知らない。しかし、まさか彼らが使い魔用に生まれて来た訳は無い。

召喚される前には彼ら自身の人生があつた筈だが自分はそれを全く知らない。此処にいる人間の中でキャラだけがエリオの事を知っている。そのキャラがエリオの勝利をこれほど信じている。

『エリオなんか死んでもいい』なんてミス・ヴァリエールの暴言にあれほど憤る彼女がエリオの事が大切に無い筈は無い。ならば、キャラはエリオの勝利を確信してるのだ。

ならば自分もエリオの勝利を信じよう。そう思ったシエスタは腹を決めた。この決闘を最後まで見届ける覚悟を。

こうしてヴェストリの広場の決闘は始まったが、結論から言えばこのままドラダラ顛末を文章に記すのが馬鹿馬鹿しいくらい、詰まらない内容だった。

エリオが自身の魔法を使うまでも無く、圧勝してしまったからだ。

ギーシュが杖である薔薇の造花を振ると、花弁が一枚地面に落ち、そこから、鎧を纏った等身大の女性の像が現れた。

(ストラーダ、今のは?)

(あの像が出現する際、出現地点の地中に朝の授業の時のシユヴ
ルーズ女史の行った錬金と同じ構成の魔法術式を感知しました。地
面の土砂を物質変換して練成した物と推測。材質は青銅製。機械的
機構は一切確認できず。魔法兵器もしくは質量兵器に類する射撃兵
装も確認されません。なお、青銅製にも関わらず人間の関節に当た
る部位が流体状になっているのを確認、関節の可動を確保する為と
推測。恐らく相手の戦法はこの青銅像を魔法で遠隔操作しての白兵
戦と予測できます)

「言い忘れたが、僕の二つ名は『青銅のギーシュ』僕はメイジだ
から魔法で戦う。よって君のお相手はこの青銅のゴーレム『ワルキ
ユーレ』がするよ。よもや卑怯とは言うまいね？」

魔法が使えないと自分が思い込んでる相手に魔法で挑むのは充分
卑怯であるが、そんな事よりも自分の戦力を戦う前に相手に自己申
告するギーシュの行為に、表情にこそ出さないがエリオは呆れてし
まった。

自分の手の内を晒す事が命取りになるとは本気で思っていないのか、
それとも手の内を晒した様に見せて相手を油断させる罠か。

……前者だろうかと、エリオは思った。

もし、そんな計算高さとか彼に有ればこんな馬鹿馬鹿しい決闘を
言い出さないだろう。

「……むしろ好都合です。さっさと掛かって来たらどうですか
？」

正直な話、シールドの使用をなるべく避けたいエリオにとってワ
ルキユーレは絶好の相手だった。射撃魔法をシールド抜きで回避す
るのは難しいが、ゴーレムならただの白兵戦に終始するからだ。

だがそんな風に平然と言うエリオにギーシュはイラつく。ワルキ
ユーレを出すだけで平民は腰を抜き、小便を漏らして泣いてひれ
伏すと考えていたからだ。

「フツ、減らず口もそこまでだ！」

ギーシュは杖を振り、ワルキューレをいきなり猛ダツシュさせた。不意打ちのつもりだろうか？素人なら為す術も無かったかも知れない。

エリオは今左手のルーンの身体強化の効果の影響を受けている。しかし、そんな物無くても、この程度のスピード、戦闘訓練を積んで来たエリオにとって対処出来ない程ではない。

間合いに踏み込まれる前にストラダで二、三回斬り付けるとワルキューレは斜めの切れ目がいくつも×の字状に入り、バラバラの金属片に変わってしまった。

青銅製の人形ごときを斬るのにイチイチ魔法で切断力を上げねば成らない程ストラダはナマクラでは無い。

「フツ、なかなかやるじゃないか」

「……これで終わりですか？ならこちらから行かせてもらいますか……」

エリオはそのままギーシュにゆっくり近づいて行く。

すると、エリオの不意を突いてエリオの足元から勢い良くワルキューレが飛び出し、

「言い忘れていたが、僕が魔法で生み出せるワルキューレは一体では無いんだ」

不意を突かれた使い魔は腹を思いつきり殴られ、手に持った槍を手放してしまい、ワルキューレに槍を踏み砕かれる。

ここぞとばかりに残りのワルキューレが飛び出し、使い魔を袋叩きにする

「ギャアアア、助けてえええつ、助けてください！ギーシュ様ああああアツ」

「ハツハツハツ、これでこの僕の偉大さがわかったかい？でももう遅い。せめてカッコいいこの僕の手にかかって死ぬる事を光栄に思うが良い」

「フン、よくぞ見抜いたと褒めてやる。だが、もう容赦はせん。貴族の、メイジの恐ろしさをその身をもって味わうがいい！」

ギーシュが杖を振るとエリオを取り囲む様に今度はワルクューレが五体あらわれた。今度はそれぞれ手に剣や槍を持っている。

「平民にしてはなかなかやるようだがこれはかわせまい！」

再度、杖を振ると五体のワルクューレが真ん中に居るエリオ目掛けて武器を構えて突進してきた。

複数のワルクューレで相手を包囲して退路を断ち、逃げ道の無い相手に四方からのワルクューレー斉突撃でとどめをさす、これがギーシュの必殺の戦法だった。平民が逃れられる訳は無い・・・筈だった。

しかし、エリオは地面にストラダを突き立てると棒高跳びの要領でストラダを支点にワルクューレを飛び越え、やすやすと包囲の外に出る。

目標を失ったワルクューレは自分達の武器でお互いを串刺しにしてしまった。

「お、おのれっつ！」

それでもギーシュは気を取り直し互いを串刺しにしたワルクューレに再度指示を出し、互いを刺した武器を抜かせた。

ワルクューレは生き物では無い。例え串刺しにされても死ぬ事は無い。行動に支障が出るほど破損してなければ、術者に精神力が残っている限り戦闘を続行する事が出来る。

ギーシュはワルクューレをエリオの方に向けて襲い掛からせた。しかし、もう相手にならなかった。

今、エリオは左手に刻まれたルーンの身体能力向上の効果を受けている。それはエリオの持つ高速移動魔法には及ばないもののワルクューレ相手にはこれで充分だった。

何より、それほど非常識なスピードだという訳でもないので怪しまれずに済む。そもそもこれはルイズの刻んだルーンの効果なのだ

から後で何か言われても言い訳が立つ。

それでも、このルーンの効果は中々馬鹿に出来ない。このルーン
の力で複数の敵に対処できる敏捷性をエリオは獲得していた。

一方、ギーシュは怒りに任せてワルキューレに攻撃させるものの、
その動きはどこか単調でぎこちない。

実は、複数のゴーレムを一人でバラバラに操る事はかなりの高等
技術なのだ。と言うか、ドットのギーシュには荷が重い。

せいぜい、敵に向かって一斉に襲い掛からせるのが精一杯だった。
先ほどの敵を包囲しての突撃戦法は技量の低さをカバーして相手
を確実にしとめる為に編み出したものだった。

それをかわされたのにバラバラに飛び掛らせても、片っ端から順
番にストラーダの餌食になるだけだった。

元ワルキューレだった金属の破片を見てギーシュは呆然とする。

「こ、こんな馬鹿な・・・」

これは何かの悪い夢だ。本当ならあの平民をカツコよく（と、本
人は思ってる）叩きのめして、あの愚かな平民の使い魔に貴族に対
しての礼儀を諭し、ギャラリーから喝采を浴びる予定だった。

なのに、蓋を開けて見れば、ワルキューレの攻撃をアツサリ退け、
此れを全滅させた。なんだこれは？こいつはゼロのルイズの召喚し
た只の平民では無かったのか？

このままでは悔しすぎる。だがもう精神力が底をついた。これ以
上魔法を使う事は出来ない。

「まだ、続けますか？」エリオが訊ねる。

「ま、参った。降参だ」

「まさかドットとは言えギーシュに勝ってしまうとはのう」

遠見の鏡で決闘の行方を見ていたオスマンたちは流石に驚いてい

た。

「やはり彼はガンダールヴですよ！あの動き、あの身のこなし、間違いありません」

「じゃとしてもじゃ、あの動き、ルーンの力による物だけとは思えんのう」

「言われてみれば・・・あの少年の動きはある程度の戦闘訓練を受けた様に思えますが・・・まさか貴族ならいざ知らず、あんな年端の行かぬ少年が・・・」

ハルケギニアでは戦争は基本的に貴族の仕事だ。平民でも傭兵という形で戦争に関わる事はあるが、正式な訓練を受けるものなどない。ましてや、エリオの年で戦争に関わる事は無い。貴族の子弟ならばあの位の年齢で軍人としての訓練を受ける事もあるが、それでも実戦に出る事は無い。

「それにあの少年の着ていた服に持っていた槍、ただの服や槍とは思えんが・・・」

「オールド・オスマン、この事を早く王宮に・・・」

「それはならぬ」

「何故ですか、世紀の大発見ですぞ」

「コルベール君、ガンダールヴもヴィンダールヴもただの使い魔ではない。ガンダールヴは千人の軍隊を壊滅させ、あらゆる武器を使いこなし、ヴィンダールヴはあらゆる幻獣を操ったといわれる。そんなおもちゃを王宮のボンクラどもに渡してみい。あやつら喜んで戦争をオツパジメよるぞ」

「・・・た、確かに・・・」

「それに、あの少年、単に伝説の使い魔というだけでは無いような気がする。何と言うか、まだ何か隠された物を秘めておる様な・・・」

「それは一体どのような・・・」

「それが解かれれば苦労はせんわい。とにかく、この件はワシが預かる。他言は無用じゃー！」

「は、はい、かしこまりました」

ギーシュに勝利し、引き返すエリオ。

それを迎える少女たちの反応は三者三様だった。

「エリオ君、お帰り」

「ただいま、キャロ」エリオの勝利をさぞ、当然の様に受け止め、暖かく迎えるキャロ。

「エ、エリオ君、大丈夫!?」無事を心配するシエスタ。

「フ、フン、結構やるじゃない、アンタ」そしてあくまで毒づくルイズ。

「でもこれでいい気になるんじゃないわよ。ギーシュはドットクラス。メイジの中では最弱の部類だからね。もつと上の、ライオンやトライアングルの手に掛かったらアンタなんて手も足も出ないんだからね!」

「ミス・ヴァリエール!いくらなんでもそれはアンマリです!」

ルイズのあまりの物言いにシエスタは流石に抗議した。

「フン」それを無視して立ち去って行ってしまった

そんなルイズの様子を傍で見てキュルケはせせら嗤っていた。

「フフツ、あの娘ったら、自分はそのドットにも勝てない癖してでも」

横目でエリオの方をチラ見して、呟く。

「年下の恋人つてのも、案外良いかも・・・」

そこでようやくエリオ達を見つめるもう一つの視線に気付く。

「あら、タバサ。珍しいわね。アンタが本を開きもせず、こんな決闘を真剣に観てるなんて」

しかし、彼女は親友のそんな言葉に耳を傾けるでもない。

「あら、ひよっとしてアンタもあのエリオって子に興味あるの?」

しかし、彼女はそれにも答えなかった。その眼差しは彼女のエリオ達に対する興味がキュルケの言った物とは大きく違う事を物語っていたが、キュルケは最後までその事に気づかなかった。

それにしても、何処までも癪に触る人だとルイズの捨て台詞に対してエリオは思った。

自分は使い魔である事を認めていないが、自分が『使い魔』としている者が決闘に勝利したのだからもつと誇らしくしても良さそうな物なのにケチをつけるのだから。

そもそも、今回、自分は自身の魔法をバリアジャケット以外、一切使っていない。ルイズに刻まれたルーンの力で勝ったのだ。その勝利にケチをつけると言う事はルイズ自身の魔法にケチをつけるのと同じ事だ。

でも、だとすると、ルイズは自分に刻んだルーンの力をルイズ自身は知らない………？

(エリオ)

ストラダーが念話で話しかけてきた。

(何、ストラダー)

(このルーンの事があります。今のルイズ嬢の発言にも関わる事です。後で何処か他人の居ない広い場所です)

第6話 足枷

？ 「おおっ！ 良く来たな。『我らの槍』」

「え、ええと、何ですかマルトーさん『我らの槍』って・・・」
厨房を訪れるなり、いきなり不思議な呼び方をされて、エリオは戸惑う。

「おお、何でも、おめえ貴族と決闘して、華麗な槍捌きで勝ったって言うじゃねえか。これからは坊主の事を『我らの槍』と呼ばせてもらっぜ」

「い、いえ、あれは・・・」エリオは言葉に詰まった。

「謙遜すんなって！ おめえがああ生意気な貴族のガキの鼻をあかしてくれてコツチも胸がスツとしたんだ。ここにある料理は好きだけ喰ってくんない！」

「は、はあ・・・」

「それにしてもあの槍捌き！ 思い出してもほればれするぜ！ その歳で達人の域に達してるなんざ、きつと天才の星に生まれ付いたんだな」

「いえ・・・僕は半人前ですから・・・」

「聞いたか、達人はやはり言う事が違う！ 天才だからって決して偉そうにしない！ 貴族の馬鹿餓鬼どもに爪の垢煎じて飲ませてやりてえぜ！」

「いえ、別にそう言うわけでは・・・」

もはや、エリオの手に負えなかった。

散々騒いだ後、マルトーは急に真面目な顔になった。

「何でも馬鹿貴族からシエスタを庇ってくれたんだってな。俺からも礼を言っぜ」

「よしてください。僕はただ当然の事を言っただけです」

「やっぱり、達人は言う事がちがう！」

堂々巡りである。

心のなかでエリオは呟く、”フェイトさん、なのはさん、助けて下さい”と。

その様子を見てキャラ口は疑問を感じる。

「シエスタさん。何でマルトーさん、決闘でのエリオ君の勝利をそんなに自分の事のように喜んでるんですか？」

「実はマルトーさん、極度の貴族嫌いなのよ」

「えっ……」

「と言っても、貴族が全部嫌いって訳じゃないのよ。現にこの学院の学院長、オールド・オスマンはマルトーさんの古い友人らしくて、オスマン老から料理の腕を見込まれて、頼み込まれてこの学院でコックの仕事をしてるぐらいだから……。でも、魔法を笠に威張り散らす大抵の貴族の横暴はやっぱり腹に据えかねるみたいで、いつも愚痴を溢していたわ」

「……そうなんですか」

「おまけに、此処の生徒さんの貴族の方達がマルトーさんの精魂込めて作った料理を、何かと文句をつけて残したりするもんだから、ますます貴族嫌いに拍車が掛かっちゃうみたい」

それを聞いて、キャラ口は素直に喜ばなくなった。

自分達は魔法の使えない平民と思われている為、マルトーさん達はよくしてくれているが、魔法を使える事を知られたら貴族と思われる嫌われてしまうのだろうか？

複雑な心境で騒ぎを見つめるキャラ口だった。

あの決闘騒ぎ以来、エリオ達の周囲は色々変わった。

以外だったのは、決闘相手のギーシュが侘びを入れてきた事だ。

「いや、本当にすまなかった。どうか許して欲しい」

「・・・僕に謝っても仕方ないでしょう。シエスタさんに謝ってくださいよ」

「・・・確かに言われてみればそうだな。後であのメイド君の所にも謝りに行くとするよ。平民相手とは言え女性を攻め立てるなど僕らしくもなかったな・・・ところで使い魔君、君の名前を覚えてくれるかな？」

「エリオです。エリオ・モンディアル」

「エリオか、いい名だ。エリオ、強いな君は」

「いえ、それほどでも」

「・・・ドットとは言え、メイジの僕が手も足も出なかった。完敗だよ」

「どういたしまして」

「・・・だが、僕もこれでも軍人の家系のグラモン家の男だ。メイジとして精進を重ねて必ずもつと強くなって見せる！その時は僕の挑戦を受けてくれるかい？」

「ええ、喜んで」

「・・・そうか、ありがとう。その時が来るのを心待ちにしているよ。おつと、長く話し込んでしまったな。この後、あのメイド君にも謝りに行かないといけないので、これで失礼するよ」

「ここまではいい話だったのだが、ここからが良くない。キャラがこんな事を言ってしまった為だ。」

「貴方が二股を掛けたつて言う二人の女の子にもですよ」セリフ自体におかしなトコはないのだが、問題はキャラの声で後ろから声を掛けた事だ。

「おおっ、モンモラシーっ、勿論だとも！！」

ギーシュは物凄い勢いでガバツとキャラの手を握る。

「モンモラ、てあれ、き、君は・・・」

「あの・・・ギーシュさん？」キャラはイキナリ手を握られ混乱する。キャラとモンモラシーの声は良く似てるのでキャラとモンモ

ラシーを間違えたのだ。

ギーシュがキャロの声を良く聞いたのはこれが初めてだった。その時、ギーシュの後ろからまたも同じ様な声が聞こえる。

「あら、ギーシュ。あのケティって一年生だけじゃ飽き足らず今度はヴァリエールの使い魔の娘？」

今度は本物のモンモラシーであった。

「あ、いや、これは違うんだ。聞いてくれモンモラシーこれは・・・」

「別にいいのよ。アンタが何処の誰とつきあおうと、たとえそれがルイズの使い魔だろうと」

「だから違うんだ。話を聞いてくれ！モンモラシー！」

バシシィッ！

モンモラシーはギーシュの頬にビンタをかました！

全体

重をかけて思いつきり音高く！！

そのままモンモラシーはその場を立ち去ってしまった。

後には頬に真っ赤な手形をつけたギーシュだけが残された。

「あの、ギーシュさん？ごめんなさい大丈夫ですか？」キャロはギーシュに申し訳無さそうに謝る。

本当はギーシュはこのモンモラシーと同じ声をしたモンモラシーに殴られる原因を作ったこの少女に言いたい事が山ほどあった。しかし、エリオと名乗った使い魔の彼女つばいこの少女に文句をつけるとヴェストリの決闘パート？になりそうだ。いくら再戦を約束したとはいえ、こんな形で今すぐなんて真っ平である。勝算もないし。

「ヒリひライへバルいろラバケラツタろクロぼつラかハ」

「あつ知ってます。Qちゃんの弟の・・・」

「ヒラフー！」

「キャロ・・・此処の人がオバQなんて知らないって・・・」

ミッドチルダではオバQ有名なんかい。

「ここでいい？ストララーダ」

『OKです。エリオ』

ストララーダにルーンの事で話が有ると言われたエリオは広い場所を求められたので召喚以来、初めて学院の敷地の外に出た。

とりあえず人の来ない場所と言う事なので、学院の周囲の平原を学院の建物が見えなくなるぐらい程度に遠く離れてみた。

「こんな所まで来て、ルーンについての話って一体……」

『エリオ、セットアップしてみてください』

「わかった……」

言われるままにセットアップする。バリアジャケットが装着され、ストララーダがシュピリア・フォルムに変わる。

「これでいい？ストララーダ」

『セットアップと同時にルーンの発動を確認。今、エリオの体はこのルーンの副次効果により身体能力が向上した状態にあります。』

「うん、それで？」

『この状態でソニック・ムーヴを使用して100mをダッシュしてみてください』

ソニック・ムーヴ

高速移動魔法、瞬

間移動に見えるほどの超高速で移動する。

「一体、どう言う事？」

『やってみればわかります』

何が何だかわからず、ソニック・ムーヴを使ってダッシュを開始する。

だが、ダッシュしてすぐ間を置かずして、エリオ自身も出そうと

思ってなかった物凄い超高速が出でしまう。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああつ！」

いくら、ソニック・ムーヴでもここまで桁外れなスピードは出ない。明らかに異常だ。

「はっ、早すぎる！」エリオはスピードを緩めようとしたが思う様にならない。

進行方向に地面から突き出た大岩が見える。見た目、かなり遠くに見えるが、このスピードでは思ったよりも速く辿り着いてしまう。このままでは叩き付けられる。

「と、止まれえええっ！！」だが、止まらない。

「そ、そうだ！」エリオはストラーダの穂先を後ろに向けてシュピーア・アングリフを使う。ストラーダの推進力で逆噴射を欠ける積もりなのだ。

ストラーダから逆噴射の炎が噴出す。なんとか勢いが収まるが、まだスピードが殺し切れていない。

エリオはシュピーア・アングリフを止めてカートリッジを排出すると、ストラーダを地面に突き刺し、地面を数メートル耕してやっ
と止まれた。大岩の数センチ手前、間一髪だ。

「ふう……」エリオは安堵のため息をつく。叩き付けられてたら、いくらバリアジャケットを着ていても大怪我では済まない。

だが、ハルケギニアでは補充の利かない貴重なカートリッジを一発無駄にってしまった。エリオは排出地点まで戻り、空のカートリッジを回収する。

あとで、キャラに魔力を補充してもらわなければ。

「うっ！体がっ！い、痛い。う、うっ……」激突は免れたのにエリオの全身を激痛が襲う。

『やはり、危惧していた通りになりました』

「どういう事、これ？」

『簡単な話です。身体能力向上の効果を持つルーンが発動した状

態でソニツク・ムーヴを使ったため、二つの魔法効果が互いを爆発的に効果を倍増させ、凄まじいスピードを生み出す事になったのです。しかし、その脅威的なスピードをエリオ、貴方自身が制御できない上、貴方の体に普通にソニツク・ムーヴを使った時とは比べ物にならない程の負担をもたらす結果となったのです』

「なんで、そんな事に？」

『ここからは推測ですが、恐らくこのルーンの身体能力向上効果は一般人、つまりここハルケギニアという所の平民に与える事を前提にデザインされていると思われます』

「それは、どう言う事？」

『元々このルーンは使い魔を従えさせる為の物の筈。人間を使い魔にする上で問題になるのは何だと思えますか？』

「もしかして、能力の低さ？」

『ご名答、人間と言う生き物は被使役生物として見た場合、必ずしも能力が高いとは言えません。汎用性が高い反面、その汎用性の高さが災いして戦闘能力、とりわけ攻撃力は高いとは言いがたい。人間であるエリオ達が此処に召喚された時の周囲の反応やルイズ嬢のエリオ達に対する不満もそこに起因します。ここ、魔法至上主義のハルケギニアにおいては、汎用性は主たる魔導師本人で間に合っている上、魔法と言うオプションの為、魔導師はある程度万能を誇ります。ゆえにそこへ魔法の力も持たない人間が召喚されて来てこの世界の人達は価値を認めない。だからこそ使い魔に求められるのは魔導師の弱点を補うものか、魔導師にも無い能力を持つものであると推測されます。そう言う意味では人間は使い魔として失格であると言えます』

「でも、ストラダは言ったよね。これは一般人を前提にしたルーンだつて。一般人つて事は人間でしょ？人間に刻む事を前提にした効果が使い魔用のルーンに含まれてるなんて」

『理由はわかりませんがこれをデザインした魔導師は人間のもつ汎用性を使い魔に求め、欠点を補う為にこの補助効果を組み込んだ

と推測できません』

「・・・でも、今までのルイズさんの言動を見る限り、わざわざそんな事するとは思えないよ。召喚自体アトランダムなものだし、彼女は僕らが召喚された事に不満を持っていた。ルーンの効果自体彼女は知らない節がある」

『魔法の使用者』魔法の設計者とは限りません。「コントラクト・サーバント」と言う魔法は恐らく過去に誰かがデザインしたものが今も広く使われてると推測されます』

「じゃ、この効果もその人物が？」

『恐らく。此処で重要なのは、その人物がこの魔法でどういう人間が使い魔になるかは想像しなかった可能性がある、と言うことです。つまりこのルーンが刻まれるのは誰でも良かった。このルーンがあれば何の力も無い平民でも強力な使い魔になれるから、被召喚者のもともとの能力や資質は最初から当てにしない。逆を言えば召喚された者が特殊な能力や技能の持ち主である可能性を全く考慮に入れてないと言う点です』

「じゃあ、さっきの暴走は・・・」

『そうですね、このルーンのデザイナーは普通の一般人が召喚された場合を想定してこのルーンを設計した。召喚されたのが何の特別な力も持たない一般人ならこのルーンは非常に有効なチートプラグインとなる筈、しかし、実際にルーンを刻まれたのはベルカ式魔法の使い手であるエリオ、貴方だったため、このルーンは余計なオプションとなつて刻まれた者の力を過度に増大させ暴走させる事となった、と推測されます』

「じゃあ、もしヴェストリの広場の決闘で僕が何か魔法を使つていたら・・・」

『使う魔法の種類にもよりますが、ソニック・ムーヴを始めとする身体強化魔法だったら、間違はなく大惨事に至つていたでしょう』

なんて事だろう。あの時、キャラが魔法を使うのを思い留まらせしてくれなければ、大変な事になつていたのだ。彼女には感謝しなく

てはいけない。

それにしても困った事になった。さっきのソニック・ムーブみたいに使う度にあんな騒ぎでは、実戦ではとても使い物にならない。ただのブレイキや方向転換にいちいちあれではカートリッジがいくつあっても足りないし、止まった時、すぐに次の行動に移れずそこが大きな隙となつて、そこを射撃魔法で狙い撃ちされてしまう。

「ストラーダ、どうすれば良いと思う？これじゃまともに戦えない。」

「とりあえず、身体能力のいずれかのパラメータを上げる魔法で、そのルーンと効果が重複する可能性のある物は暫らく使用停止にする以外に無いでしょう。このルーンがまだどんな効果を持つかわからない為、他の魔法についても何が起こるか分からない。使うときは注意が必要です」

「・・・それしか無いみたいだね。」

『問題なのは、このルーンによって齎される身体強化効果のスペックが、エリオの持つ様々な身体強化魔法のソレに及ばないということです。今までベルカ式の身体強化魔法でやっていた所をこのルーンの効果に置き換えるしかありませんが、大幅な戦力ダウンは免れないでしょう』

ベルカ式魔法とガンダールブ、一見『鬼に金棒』の様に見えるこの組み合わせは、その強力さ故に一方がもう一方の長所を殺してしまふ最悪のトッピングである。

なんて事だ、エリオ自身が同意していない一方的な契約で、エリオが元々持っていた力が本人も気付かない内に封じ込められ、この世界の人達の一方的な都合でより劣る力を当てがわれる事となったのだ。

エリオは、この世界に無かった力を無闇に振りかざしてこの世界に要らぬ波風を立てる積もりはない。だが、この力は、共にこの世界に連れてこられてしまった大切な人を守るための力でもある。それを自分の同意も無しに知らない内に使えなくされて、気持ちいい

訳が無い。

「このルーンその物をどうにかする事は出来ないの？」

「このルーンは、ミッド式ともベルカ式ともこの世界で一般的に使われている魔法とも違う特殊な物です。解除を行うにはこのルーンの構造を調べる必要がありますが、解析には困難を極めます。少なくとも今我々が用意できる機材では不可能に近いでしょう。」

「えっ？ちよつと待って、このルーンはこの世界の魔法で刻まれたんだよ。この世界で使われてない魔法ってどう言う事？」

「件の「コントラクト・サーバント」と言う魔法は他の魔法とは別大系としか思えない程、構造が異なります。違う大系の魔法をこの世界の魔導師に仕える様カスタマイズしたものと推測されます。」

「違う大系……。」

「そしてエリオとキャロの二人に刻まれたルーンは他の使い魔のそれと比べてもかなり特殊なものです。話がそれましたがそんな訳でルーンを解除するのは不可能に近いでしょう。しかし、全く方法が無い訳でもありません。」

「その方法は？実行可能なの？」

「断って置きますが、「理論上可能」というだけで事実上不可能だったり、リスクの高さから推奨出来ない案だったりする物です。」

「いいから一応聞かせて、聞いた上で判断するから。」

「一つは二人が仮死状態になる方法です。ルイズ嬢の「死んでみる？」と言う発言を実行するプランです」意外な方法だった。考えてみれば魔法的なアプローチで解除することしか思い付かなかった。「確かに死ねば契約解除できるみたいなき事いつてたけど……そんなので大丈夫なの？」

「医学知識の発達してないこの世界では死亡判定は心臓死による物だと思います。魔法の解除要件になつてる場合も同じです。」

「じゃあ、その方法で……。」

「残念ながらこのプランはリスクが高く推奨できません。具体的には二人を人工冷凍睡眠で眠らせルーンに死亡を誤認させるのが一

番適切ですが、この世界では冷凍睡眠コールドスリープの為に必要な機材を調達するのは不可能です。それ以外でこの方法を行うのは二人の生命に対するリスクが高まります」

確かにその通りだ。例えば冷凍魔法なんかで人間を冷凍保存する訳にはいかない。低温下では細胞組織が破壊されるため事前の処置が必要だ。ただ凍らせれば良いと言う物ではない。

それにエリオもキャロも氷結魔法を持たない為、魔法でそれをやるにはこの世界の魔導師に頼むしかないが、使い魔が使い魔を辞める為の行動に手を貸す様な魔導師はこの世界に居ないだろう。

「他の方法は？」

『もう一つはエリオがこのルーンを克服する事です。筋力トレーニングを重ね、ルーンと強化魔法の複合効果を制御できるだけの体力を身に付け、ジャジャ馬の様なパワーを押さえ込むのです。しかし、これも推奨し兼ねます』

「何故？さっきのより現実的に聞こえるけど……」

『エリオの体にかかる負担が比べ物にならない程、尋常では無いからです。さっきの事でも解かる様にルーンと魔法の複合使用はエリオの体にかかなりのダメージを与えます。それに耐えられる様になる、と言う事は以降のダメージを真つ向からうけると言う事です。ダメージが蓄積すればいずれ破綻を来たし、自滅する可能性があります』

「じゃあ、しばらくはこのルーンに頼って戦うしか無い訳だね」

『そう言う事になります』

「しかたないね、暫らくはそれで行こう。でも、トレーニングメニューは作って置いてくれない？いざって言う時切り札としても使えないと困るから」

『わかりました。その通りにします』

本当は、役に立つことが無い方が良いのかも知れない。しかし、何が起るかは誰にも解からないから……。

ここは魔法学院、本塔五階。『宝物庫』と呼ばれる場所である。その名の通り、学院の貴重な宝物やマジックアイテムが収められている。

その扉の前で悪戦苦闘する人物がいた。学院長オールド・オスマンの秘書、ミス・ロングビルであった。

「まつ、『アンロック』程度で開くとは思っちゃいなかったけどね」

『アンロック』の呪文で宝物庫の扉を開けようとしていたのだ。しかし、中々開錠はうまくいかない。

当然である。メイジなら誰でも使える『アンロック』なんかで開く様な扉がハルケギニアで宝物庫の盗難防止になる訳が無い。

通常、メイジが施錠、開錠を行う場合、コモンマジックである『ロック』『アンロック』を使い、平民のような形の有る鍵は使われない。

だが、宝物庫の様な重要な物をしまふ場所が誰でも使える魔法なんかで開いて貰っては困る。

だからこの様な重要な所を施錠する扉は、最低でもトライアングルクラス以上のメイジが数人掛りで工夫を凝らして専用の鍵でなければ開けられない特別な物に仕上げる。

故にこう言う重要な場所の扉はメイジであっても普通は形の有る鍵を使う。それをワザワザ魔法で開けようとするのは正規の手段で鍵が手に入らない場合、例えば泥棒に入ろうとする時ぐらいである。

しかし、ロングヒルは仮にも学院長の秘書である。それが何故、『アンロック』で戸を開けようとしていたのか？

それは彼女が中の物を学院に無断で持ち出そうと試みているから

だ。

「しかし、流石にハルケギニアでも有数のトリステイン魔法学院の扉だね。ここまで色々やって何も通用しないとはね」

そこで彼女は思案する。この宝物庫には強力な固定化の魔法が掛かっていて、『鍊金』も効かない。鍊金を掛ける術者が固定化を掛けた術者の力を上回れば鍊金も通用するのだが、この宝物庫に掛けられた『固定化』はスクウェアアクラス数人掛りに拠る物だった。

「おや、ミス・ロングビルではありませんか。何をなさっておりますか？」

振り向くとそこにはこの学園の教師コルベールの姿があった。

いきなり現れたコルベールに彼女は内心焦ったが、そんな様はおくびにも出さずに平然と答える。

「宝物庫の目録を作っていたのですわ、ミスタ・コルベール」

「ははっ、それならオールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃありませんか？何故わざわざ『アンロック』で？」

「ちょうどオスマン氏はお昼寝していた様なので、起こすのも悪いと思ひまして」

「ははっ、いくらなんでも通常の『アンロック』では無理ですよ。なにしろスクウェアアクラスのメイジが数人掛りでどんな魔法も通用しないよう工夫を凝らしたのですから」

「そういえば宝物庫にかけられてる『固定化』も随分と強力なものですね」

「数十年ごとにオールド・オスマン自ら数日の準備をして施すものだそうですから」

「それなら、今、巷を騒がしている『土くれのフーケ』とか言う盗賊も手も足も出ませんわね」

「ええ、そうですね。しかし」

「しかし、なんです？」

「魔法に対しての備えは万全だと思つのですが、物理的な衝撃などには万全とは言えないと思つのですよ。噂の『土くれのフーケ』」

は話に寄ると時に巨大なゴーレムを操る事があるそうですし。それでもこの宝物庫に掛かっている『固定化』は簡単には打ち破れないと思います」

「物理的な衝撃……か……」

「何かおつしやいましたか？」

「いいえ……何も、ところで」

「何ですか？」

「この宝物庫に収められてると言う二つの秘宝、『生者の杖』と『災いの石』ミスタ・コルベールは御覧になられた事有りまして？」

「『災いの石』の方は見てませんが『生者の杖』は見た事があります」

「どのような物か、お聞かせくださいません？」

「人の身長程もある長い尺杖スタッフで珍しい金属製の杖でした。使われている金属はハルケギニアでは知られていない未知の金属の様でした」

「いちどこの眼で見たい物ですわね」

「ははっ、その内ミス・ロングビルにも見る機会が訪れると思いますよ。あ、いけない、長話になってしまった。それでは失礼」

そう言つて立ち去るコルベールを見送るロングビルの顔がニヤツと笑っているのをコルベールは気付かなかつた。

「それじゃ、そのルーンのせいでエリオ君は全力で魔法を使つて戦えないの？」

「……うん、ストラダの話だとそういう事みたいなんだ」

学院に戻ってきたエリオは洗濯場でキャロと一緒に洗濯しながらストラダに指摘されたルーン的作用の事をキャロに報告していた。

「もしかしてあたしのルーンも、あたしの魔法に何か影響を与え

ていたりするの？」

ルーンが刻まれた自分の右手を眺める。考えてみれば召喚されてからずっと念話以外の魔法を使っていなかった。

『キャラのルーンはエリオのそれとは違う物なのでなんとも言えません。エリオのルーンが弊害を伴うのはエリオの使う身体強化魔法と効果が重複するからなのですが、件の決闘騒ぎで戦闘の機会が訪れなければこの事実には気付けなかったでしょう』

ストラダの説明は簡潔だった。

「じゃあ、私もルーンが発動してみないと、どんな影響を受けているのか解からないのね」

すると、今度はケリユケイオンが言う。

『キャラのルーンも既に何度か発動しています』

「えっ、いつ？」

『コントラクト・サーバントの後、急にフリードや他の動物達と意思疎通できる様になった、あれがキャラのルーンの効果です』

「言われて見れば……」

「そう言えば、動物と意思疎通できる様になったのはキャラだけだったね。僕はキャラの念話を介しないと他の使い魔達の声が聞こえない」

「じゃあ、私のルーンは動物と話す時に発動するのね。……あ、でも」

「どうしたの？」

「私のルーンの効果って動物さんたちとお話するだけ？他にも何か有るんじゃない？」

「キャラ、一体何をそんなに危惧しているの？」

「エリオ君が身体強化の魔法に影響を受けたみたいに、私もフリードやヴォルテル絡みの魔法で何か影響を受けちゃうんじゃない？」

考えられない話では無い。エリオに刻まれたルーンは素体になる人物の元々の資質・能力を省みていない物だった。キャラのルーン

もキャラの持つ魔法の事を想定していない可能性がある。

そして、このルーンが単に動物とのお喋りで済むとも思えない。

『エリオの場合と同じで、実際に発動してみないと解かりません。暇を見てチェックしていくしかないでしょう』

「……………」二人は沈黙した。

実際、ケリユケイオンの言う通りで、今、こんな所で議論しても始まらない。

「あつそうだ、そういえば授業の内容を録音したままだったっけ。忘れてた」

「そう言えばそんな事してたよね……………」

折角だから今聞いて置こうと言う事になり、ストラダに再生を頼んだ。だが……………。

「〒% \$ ¥ = @ & £ ¢ \$ ≧ § + ± \$) > ¥

* £ \$] × < ≧ 〒 \$ < ¥ ÷ # ……

……………」

「何、これ？」

『あの授業を録音した物です』

「うそ、だってこれ……………」

二人が驚くのも無理は無い。そこに録音されていた声は確かにあの時あの授業に参加していた者達の声だが、話している内容は全く意味不明の言葉、いや音の羅列だったのだから。

「バグじゃ無いの？これ」

『いいえ、違います。あの時の有りのままの音声です。それが証拠に、これをお聞きください』

「『ルイズさん、スクウエアとかトライアングルって何の事ですか？』

『% 〒 ……、 @ & *。 ¢ + % \$ × 。 & <

』&

『』どう言う事なんですか？』

『 @ 』 「 〒 」 # \$ …… 『 「 \$ …… 」

「これ、僕がルイズさんに、この世界の魔導師のランク付けについて尋ねた件くたりじゃないか」

「エリオ、貴方が話していたのはミッドチルダ標準語ですがルイズ嬢が話していたのは違います。恐らくこの世界特有の言語だと思われます」

ここに至って二人は初めて、実際に迷い込むまで存在すら知らなかった管理外世界の言葉とミッドチルダ標準語が同じ訳が無い事に気づく。

「恐らく何らかの魔法的作用でお二人の言葉とこの世界の人達の言葉が翻訳され変換されている物と推測されます」

「そうだったのか・・・あれ？でも待てよ？」

ストラーダの説明で一応納得したものの、そこでエリオは新しい疑問にぶつかる。

「それってルーンの力の筈でしょ？だけど僕達、召喚されてルーンを刻まれるまでの間の短い間もこの人達の言葉が解かったよ？」

「これは推測ですが、貴方達をこの世界に移動させた「サモン・サーバント」と言う魔法、単なる転移魔法ではなく、あれ自体に対象を使い魔にする為の下準備として仮契約とでも言う措置を施す効果があったのだと思われます」

「仮契約？どう言う事それ？」

「使い魔召喚の儀式は対象生物を術者の下に転移させ、キスと言う方法でルーンを刻み込んで完了しますが、使い魔として呼び寄せられた生物の中には明らかに通常ならば危険生物に該当する生き物が存在します」

「・・・それで？」

「そんな危険な生物が主となる召喚者に危害を加える事も無く従属しているのは使い魔のルーンに洗脳効果があるためですが、問題は召喚ゲートから出現したばかりの対象生物がそんな隷属の効果のある契約の魔法を一切の抵抗も無く受け入れているかです。転移ゲート自体に契約作業を円滑に勧める為の予備洗脳を施す働きがある

と思われず。同時に対象生物が人間のような言語を操る知的生物である場合、意思疎通が可能なように会話の翻訳を行う魔法効果もこの仮契約の際に施されると思われます』

「……ちょ、ちよつと待って、僕ら、ルイズさんに洗脳されてるの？」

「あたし達、自分達が使い魔にされてる事を知ったとき、ルイズさんに抗議したけど」

『このルーンの洗脳効果は使い魔の素体となる生物の知能の高さに反比例して効果が弱まる傾向があります。人間ほどの高い知能を持つ存在にはせいぜい主人となる術者の印象を良くする程度の効果しか有りません。動機があれば主たる術者に反抗する事すらあります。ただ』

「ただ？」

『長期的にルーンの影響を受け続ければ、効果の累積により主人の事を中心に物事を思考するようになってしまいます』

「…….冗談じゃない」

「……冗談じゃない」

『安心してください。ルーンを持つ洗脳効果のお二人に対する影響は私とケリケイオンで自動ブロックしています』

「そうだったのか……。ありがとう、これからも頼む」

『了解しました』

それにしても、この洗脳といい、例の身体強化にしたってルーンの目的を考えれば、使い魔となった相手を都合よく使う為のカスタマイズに過ぎない。

一体、自分達は使い魔にされて、自分達の知らない間に何をされているのか。

「ストラーダ、僕たちが一体何をされているのか、このルーンの効果已全部チェックして僕たちに教えてくれ」

『了解、ただし例の身体強化の効果のように発動しないとその詳細が解からない物もある事を了承ください』

そのころ、ルイズの部屋の隣のへやで、キュルケは一人企み事をしていた。

「オオ、どうやってあのエリオって子を誘惑してやるのかしら」

第7話 信頼

？ 使い魔のルーンの思わぬデメリットを知ったエリオは、ルーン
の力を克服するためトレーニングを始める事にした。

時間は朝、ルイズが目を覚ます前と、夕方、使い魔の仕事を終え
てから。

朝のトレーニングはキャラも一緒に付き合うが、夕方は主の世話を
しないとルイズが怒るので、キャラがルイズの相手をし、トレー
ニングはエリオ一人でする事となった。

トレーニングを開始して三日目の夕方、エリオがトレーニングを
終えて寮に戻ると、ズボンの裾を何かが引っ張った。

「君は……」

確か、隣のキュルケの使い魔のフレイルだ。

エリオに何か用があるらしく、ズボンの裾を引っ張って頻りにエ
リオを何処かに連れて行こうとしていた。

「悪いけど僕じゃ君の言う事が解からないんだ。今キャラを連れ
てくるから待ってて」

しかし、フレイルは裾を啜えたまま首を横に振る。どうしてもエ
リオに来て欲しい様だ。

「……弱ったな、離してくれないと帰れないんだけど……」

このままではどうしようも無いので、とにかくキャラをつれて来
るからとフレイルを説得するがフレイルは頑なにエリオだけをつれ
て行きたがる。

とうとう根負けしてフレイルの言う事を聞く事にした。

「……わかったよ。一緒に行けばいいんだろ」結局、エリオ
一人でいく事になった。それがトンでもないトラブルの発端とも知

らずに……

フレ임に連れられてエリオが来たのはキュルケの部屋だった。

「なんだ、隣じゃないか。一体此処に何が……」その疑問は部屋に入って氷解する事になる。

部屋の中には透け透けのベビードールを着たキュルケがいた。

「何か御用ですか、キュルケさん」

「いやん、私の名前覚えていてくれたのね、ダーリン！」

「……？ 貴方に『ダーリン』呼ばわりされる筋合いはありませんが？」

本来、エリオはうぶな性格である。しかし人を女湯に連れまわしてくれるキュルケのおかげで今のキュルケ程度のかっこうぐらいの事には免疫が出来ていた。

「私の事、はしたない女だっと思ってでしょうね」

前言撤回、氷解すると書いたが、部屋に入っても話を聞いても、話が見えてこない。

「思われても、しかたないの。わかる？ あたしの二つ名は『微熱』」

「……知ってます」今更、改めて二つ名を聞かされても何がなんだか解からない。

「『微熱』の私はね、松明みたいに燃え上がりやすいの。どう言う事か……解かる？」

「いえ……」

「私、恋したのよ。貴方に。恋はホント突然ね」

ここまで言われてようやくエリオにも話が解かった。本当に突然である。

「……貴方に好かれる覚えはありませんが……」

エリオは迷惑そうに聞き返す。

「あなたがギーシュを倒した時の姿……彼のゴーレム

の攻撃をヒラリとかわし、鮮やかな槍捌きで屠ったあの姿を見た瞬間、私は痺れてしまったのよ！」

「……それはどうも、ですが僕は貴方と付き合う理由はありません」

はつきり言ってエリオはキュルケの様なタイプの女性は好みでは無い。

「恋に理由は必要ないわ」

この世界の人間は召喚の時のルイズといい、このキュルケといい、相手の選ぶ権利を無視する人間しかいないのだろうか。

「……なら『理由』を盾に拒否する者に恋愛相手の資格は無いし、断るのも理由は要りませんね。僕はキュルケさんの申し出を受ける気は無いのでこれで失礼させていただきます」

そして、部屋を退室しようとするが、何故か鍵が掛かってない筈のドアが開かない。

「……あれ、開かない、なんで？」

(エリオ、ドアが封印処理に酷似した魔力で封鎖されています)

(ええっ、ロストロギアじゃ有るまいし、なんで)

「『ロック』の魔法が掛かっているから、力づくでぶち破るか『アンロック』の魔法を唱えないと無理よ」

(そんな魔法まであるのか、ストラーダ何とかして！)

(似てるとは言いましたが、封印処理とは若干異なる様です。そもそも封印解除の為の魔法はありません)

意外な事だが、ミッドチルダに施錠や開錠の為の魔法はない。需要が無いからだ。

そついう魔法を開発できない訳では無いと思うのだが、ハイテク技術が発達したミッドチルダにおいて施錠や防犯に魔法の出る幕はない。

「ふふふふ、そんなに急いで帰る事も無いじゃない」キュルケはエリオに迫ってくる。

本来うぶなエリオが毅然とした態度で断りの言葉を言えたのは退

路があると思つていたからだ。部屋から出れないと解かると途端にうろたえ出す。

(きゃ、キャラ、助けて!) エリオは念話でルイズの部屋にいる筈のキャラに助けをもとめた。

(え、エリオ君、どうしたの?)

(キュルケさんの部屋に閉じ込められて出られないんだ。ドアが魔法で封鎖されてるんだ。キャラの魔法で何とかならない?)

(え、ドアを封鎖する魔法なんて知らないよ。どうすればいいの?)

(無理を承知で頼むよ、じゃないと僕は……)

念話の様子から只ならぬ物を感じたキャラはとにかく返事する事にした。

(解かったわ、とにかく何とかしてみるから待って)

「キャラ、どこいくのよ?」急に何かに取り付かれたように慌てて出て行くキャラに何事かと思い、ルイズは声を掛けるがキャラは、「ルイズさん、すいません、ちょっと」と言い残しそのままここに行ってしまう。

「一体、何なのよ、もう」

「もう、この気持ち収まりが付かないのよ。受け止めて欲しいわ」「……ちょ、ちょっと!止めてください。ちょっと!」キスしようと顔を近づけてくるキュルケの顔を必死に両手で押し留める。するとドア越しに呼びかける声がある。

『エリオ君、エリオ君、何があったの?大丈夫?』キャラの声だ。「あら、いい所で。そういえば一緒に召喚されたあの娘何?貴方の彼女?」

「貴方には関係ないでしょう。それより、貴方の方こそ窓の外に

浮かんでる人、放っておいていいんですか？」

キュルケが振り向くと男子生徒が窓の外に浮かんでる。

二階以上の部屋の窓の外から覗く人物、ハルケやミッドの様な魔法世界で無ければ怪談都市伝説である。

「キュルケ！」窓の外に浮かぶ男が窓越しにこちらを睨み付けてくる。

「あら、スティックス」キュルケはまるで何でも無いようにいった。

(キヤロ、今のうちにドアの魔法を……)

(今のうちって……)部屋の外にいるキヤロには部屋の中の事が解からないのでなにが今のうちなのか解からないのだ。

(いいから、いそいで……)

(わ、解かった、やってみる)

「待ち合わせの時間に君が来ないから来て見れば……!」

「じゃあ二時間後に変更して」

「話が違う!」

酷い事を平気で言い放つ。しかし、スティックスと呼ばれた男も簡単に引き下がる気が無い。

そこでキュルケは更に酷い仕打ちを敢行する。蝋燭の炎を蛇のようにして男に打ち出したのだ。

直撃を喰らった男は真つ逆さまに落ちて行った。

「……ひ、酷い」

「いいのよ。レディのプライベートを邪魔する輩にはあれぐらいそれより……」

キュルケの視線がエリオに戻る。

「とにかく、今私が一番愛してるのは……」

と、その時。

「キュルケ!」

毎日、こうなのかは知らないが本日二人目の『都市伝説 窓の外
の男』である。(笑)

さつきとは別の男が部屋の中を覗きこんでいた。彼も学園の男子生徒の様だ。

「その男は誰だ！今夜は僕と激しく燃え上が
のわああああっ！」

先程の『ステイツクス』同様、キュルケの炎の魔法で打ち落とされた。

（駄目だよ、エリオ君。この魔法。あたし達の魔法とはかなり術の構成が違う。どうすればいいのかわからないよ）

（そんな、何とかならない？）

（でも、封印措置ならともかく封印解除なんてやった事ないよ）
万事休す、そもそも『封印』の魔法はロストログアの機能凍結の為の魔法である。機動六課の職員が封印解除を実行する機会など先ず訪れる事は無い。

「とにかく、夜は短いわ。貴方との貴重な時間を……………」

「…………キュルケ！！！！」

今度は三人分の叫びだった。この人は一体何人『恋人』が居るんだ？

「…………何してる！恋人はいないって言ってたじゃないか！！！！」
キュルケも流石にこれには焦った。

「マニカン！エイジャックス！ギムリン！ええと、それじゃ六時間後に！」

「…………朝じゃないか！！！！」

行き当たりバッタリのツケで返す言葉に困ったキュルケは一言、己の使い魔の名を呼ぶ。

「フレーム！」

すると使い魔が吐いた炎によって、三人は悲鳴を上げながら吹っ飛ばされ、墜ちていった。

「……………」その有様を見ていたエリオは絶句する。

「愛してるわ……エリオ……」
「……悪いですが、やっぱり貴方の申し出は受ける気になれません」

「どうして？やっぱり外でドアを叩いてるあの子が気になるから？」

気が付くとドアを叩く音がしていた。

『エリオ君！今の悲鳴何！？大丈夫？』

キヤロが念話で無く肉声によつて部屋の中に呼びかける。先程から続く男達の悲鳴と、よく聞こえないがエリオとキュルケの何やら穏やかで無い会話でエリオの身に危険が迫っていると思つたのだ。

「……仮に貴方の申し出を僕が受けたとして、次に炎の魔法で窓から叩き落されるのは僕じゃありませんか？」

「あら、彼らと貴方は違うわ」

「……じゃあ、何故あの人たちと付き合う事にしたんですか？」

「……あら、妬いてるの、エリオ」

「別に妬いてる訳じゃ……」

「あら、むきになっちゃって、かわいい」

「……」

実は今のエリオの指摘はキュルケにとって結構痛い所を突くもの立つたのだが、キュルケは問題を上手く別の方向にシフトさせる事でかわした。

キュルケの恋に対する姿勢は、おのずとトラブルを伴う物だ。だから相手を舌先三寸で言いくるめる技術を自然に身に付けてしまった。

物事の確信を突いてはいても、正論だけしか言わないエリオの太刀打ちできる相手では無い。

「そんなアナタも素敵よ……エリオ」

「ちよっ、ちよつとだから止めて下さい！ちよつと！」

『止めて下さい！ちよつと！』

「エリオ君？どうしたの？大丈夫？エリオ君、エリオ君」ドアの傍にいたキャラはエリオの叫び声を聞いて慌てた。

ドア越したと雰囲気を作る為に小声で囁く様に喋るキュルケの声は何を言っているのか聞き取りにくいのだ。

大声で喋るエリオの声だけしか聞こえないキャラはエリオが何か危ない目に有つてると思った。・・・まあ、危ない目には違い無いが、別の意味で。

「エリオ君！エリオ君！」

キャラは必死にドアを叩き始める。そんなキャラを誰かがドアの前から押しのける。

ルイズだった。ルイズは無言で杖をドアノブに対して振り、ドアノブを爆破して強引にドアを開けた。

「あ・・・」ルイズがあっさりドアを開けてしまうのを見てキャラは呆然とする。キャラが魔法で必死に開けようとしても開けなかったのに。

「エリオ！あなた、やつぱりここにいたのね！！！」

その時、エリオは必死に唇を奪おうとするキュルケの顔を手で押さえ、キスを防いでいたのだがルイズはそれをキュルケとイチャついていると誤解した。

「あ、ああああなた御主人様に内緒で、よよ、よりにもよってツエルプストーと一緒にいるなんて〜！」

「あらルイズ、エリオを取られてやいてるの？」

「なつ、なななな・・・！！！」

ルイズに取つては、別に妬いているというよりも自分の使い魔が憎きツエルプストーと一緒にいるのが我慢できなかつただけだが、何故か顔を真っ赤にさせて声を張り上げた。

「こそ、そんな訳無いでしょ！とにかく今すぐエリオから離れなさいよ！」

途端に罵声の張り合い（と言っても実際はルイズが一方的に声を張り上げるだけだが）が始まったが、取り合えず助かったとエリオ

は思った。

だが、はつきり言ってそれは甘かった。突然エリオは耳を引っ張られたのだ。

「さあ、とつとと帰るわよ！」

「い、痛っ！ なっ、何耳引っ張ってんですか！」

「うるさいっ！」

そうやって耳を引っ張られて部屋に連れ帰られるエリオを、キャロはおろおろしながら追う。

「もしルイズが嫌になつたらいつでも私の所に来てね、ダーリン」
もしルイズの事が嫌になるとつくになつているが、だからと言つてこの後の悲惨な状況を作り出した元凶のキュルケの元に来ると思えない。

未だにエリオに未練を持つキュルケにルイズはエリオを引っ張つたまま振り向きべーと舌を出す。

ルイズの部屋に戻つて来てようやくエリオの耳は開放された。

エリオを部屋の真ん中に放り出すと、ルイズはキャロが入った後、ドアに施錠する。

キャロがエリオに心配そうに駆け寄る。

「エリオ君、大丈夫？」 大丈夫な訳無い。そもそも、エリオは今回の件では自分が被害者のつもりでいたので何故こんな扱いを受けるのか解からなかった。

「ルイズさん！ 酷いじゃ無いですか！」

だがルイズはそれに答えず、ゆっくり振り向きながらこういった。

「あんたの事、子供だと思って油断してたわ……」

なんか、話がおかしい。などと思っているとルイズはイキナリ大

声で叫んだ！

「まるで盛り物の付いた犬じゃないの！！」

え……？ エリオは何だか自分が悪い事にされてしまってる事に驚きを隠せない。

ルイズはドレッサーの引き出しから棒状の物をとりだした。

「何ですか、それは？」

「乗馬用の鞭よ」

「ムチ？」

「私、間違ってたわ、アンタをつい人間扱いなんかして」

今まで人間扱いしてたか？と心の中で突っ込みたくなつたが、そのまま黙って聞いていると、

「よりよつてツエルプストーの女に尻尾を振るなんて……イヌッ！」

エリオの足元の床に向かつて鞭を振り下ろした！これではつきりした、ルイズはさっきの状況を誤解してるのだ。

「ちよっ！話を聞いてくださ……」

「甘かったわ。ののの野良犬なら野良犬らしく扱わなくちゃね」

「ちよつと待って、何だか話が……」

だがルイズはエリオの話を聞かず鞭でエリオを叩き始めた。

「フンッ！フッ！」反射的に両手で鞭を防ぐエリオ。

思わず止めに入るキャロ。

「ルイズさん！止めて下さい！」

「キャロは黙ってなさい！」反対の手で思いつきり突き飛ばす。

「キャッ！！」思いの他、強い力で突き飛ばされたキャロはお尻をしたたかに床に打ち付けた。

「うっ、痛っ！」

「あつ、キャロ！！なんて事するんですか！！」

「うるさいっ！！」ルイズは更にエリオを鞭打つ。

「なによ！あんな女の何処がいいのよ！」

ルイズはエリオを鞭で叩きながら、なにやら愚痴みたいな事を口

走り始めた。

「あんたが何処の誰と何しようが知ったこつちゃ無いわ。でも、ツエルプストーだけは駄目よ！昔からヴァリエールとツエルプストーは不倶戴天の敵同士なのよ！」

何だ？何を言っているんだ？エリオは何が何だか解からなかったが、ルイズは鞭を振るいながら更に続ける。

「キュルケの家のツエルプストー家はねえ、トリステインじゃなくて隣国ゲルマニアの貴族でツエルプストー家の領地は国境をはさんでヴァリエールと隣同士なのよ！両国が戦争になれば両家が真っ先に衝突して激しい戦闘を

繰り返して来たのよ！それだけじゃ無いわ！ツエルプストーの一族は『恋する家系』なんて言って、散々ヴァリエールの名を辱めてきたのよ！」

ルイズは激しく憤りながらなお、話をつづける。

「二百年前に私のひいひいひいおじいさんがツエルプストーの連中に恋人を奪われたのを始めに、次の代の高祖父は婚約者を取られ、次の代のサフラン・ド・ヴァリエールもキュルケの曾祖父に妻をとられ、

そんな風にツエルプストーの連中は代々ヴァリエール家の恋人を奪って来たのよ！だから例え猫の仔一匹、糸屑一本だってツエルプストーには渡さないだから！」

エリオが尋ねてもいない事を長々と語ってくれるルイズのおかげでルイズの家のヴァリエール家とキュルケのツエルプストー家がどう言う関係かは良く解かった。

だが、それはエリオを満足させる説明ではなかった。何故エリオが鞭打たれなければならぬかの説明がすっぽり抜け落ちているのだ。

あそこまで聞かされるとぼけても意味は無い。ルイズが起こっているのはキュルケと関わった事に有るのだろう。

だがあの説明を前提に今のエリオの処遇を説明するには、エリオ

がキュルケの相手をした事になってなければいけない。

ルイズは事の次第を見てた訳じゃないのにあの部屋で何があった
と思っっているのか、どう考えても何かが有ったと勝手に想像して
るに違いない。

「ルイズさん！話を聞いてください！」エリオは鞭打たれながら
も何とか釈明しようとする。

「うるさいうるさい！このっ、このっ！」ビシッバシッ！ルイズ
はエリオの言葉には耳を貸さず、なお激しく鞭を振り回す。

そもそもエリオの認識は間違っていた。エリオはルイズがあ
の部屋の中で自分が何かしたと思っっているから怒っ
ていると思っ
ていた。だが、ルイズはそれ以前にエリオがキュルケの部屋に居た事を咎
め
ているのだ。

「このエロ犬！馬鹿犬！盛り犬！なんて嫌らしい使い魔なの！」

エリオの人柄を知る人が聞いたら『誰の話？』と首を傾げる言葉
を並べた罵声を浴びせるルイズ。そもそも耳を引
つ張っ
て連れて来
られるだけでもエリオの自尊心を傷付けるには充分だった。

それでもエリオはなんとか話を聞いて貰おうと語りかけるのだが、
ルイズは次に決定的な一言を口にしてしまう。

「あんた達はね！召喚された時からもうヴァリエール家の一員な
のよ！ツエルプストーに尻尾振ったら承知しないわよ！」

ブツン……………。

今、なんて言った？

「このっ、このっ！この野良犬が！」

僕らがこの人の家の一員？ それってこの人

と僕らが家族って事？ この人が？

「こいつも、こいつもあんな乳だけ女が良い訳？どいつもこいつも、あんたも同じか！」

本当の家族以上に大切だと思える人たちと僕らを引き離した、この人が？

「そんなにあの女に抱かれないか、ガキの癖して！」

話も聞かずにいきなり鞭を取り出して人を打ち据える、この人が？

「馬鹿犬！馬鹿犬！馬鹿犬！馬鹿犬うううううううう！」

僕らの事を何一つ知りもしないで、そのくせ何もかも見定めた積もりになって、今も罵声の言葉を並べ立てるこの人が？

「ちよつとエリオ！あんた人の話聞してる？」

僕らの事を信じず、頭から悪い事をしたと決め付ける、この人が？

ただ単に、いつの間にかしれ〜つと二人を家族という事にしてるだけなら、べつに地雷でもなんでも無かったかもしれない。だが、その時ルイズのしてた事はエリオの考える『家族』のする事では無かった。

いつの間にかエリオは腕で鞭を防ぐのを止めていた。暫く無防備でルイズの鞭を受けていたが、

何十発目を片手で受け止め、そのまま鞭の先端をしっかりと握

りこんでしまった。

「な！？ 何掴んでんのよ！離しなさいよ！」

「嫌です」

「何ですって！？」

「離れたらこの鞭で僕の事を叩くんでしよう？」

「当然でしょう！離しなさい！離せえ！」エリオは全然必死そうじゃないのに必死に鞭を取り返そうとしているルイズが全然鞭を取り戻せない。

「何が当然ですか！！」

「ひっ！？」思いも拠らぬエリオの大声と迫力にびびるルイズ。

エリオの表情は凄まじい怒りの表情だった。仁王の様な憤怒の表情とは違う、どちらかと言えば機械的で淡白で無表情な目だけが睨み付ける様にルイズを見据えてた。

それでもカンカンに怒っている筈のルイズを怯ませる程の迫力があつた。

この顔はキャラ口には見えなかった事がない。この顔を見た事の有るのはただ一人、親代わりのフェイトだけだった。

そう、かつて人間不信に陥り、魔法で暴れていた頃の顔なのだ。

だが、エリオの過去など知る由もないルイズは何故此処まで自分がビビったか解からず、使い魔に気圧されて溜まるかとばかりに虚勢を張りなおす。

「な、何よ、急に大声張り上げちゃって」

「なんで、僕が鞭で叩かれなければいけないんですか？」

「当然でしょう！ご主人様を裏切ったんだから！」

「……確かにあの部屋でキュルケさんに『恋の相手になつてくれ』と言う申し出がありました」

「ほら、やつぱりいつ！」

「でもその申し出はキツパリ断りました！貴方に叩かれる理由は有りません！」

「抱き合つてたじやないの！あれはどう言い訳するつもり！？」

「無理やり唇を奪いに来たので防いでただけです。あれが抱き合つている様に見えるんですか？」

「ぬぬぬ……でも私が問題にしてんのはそんな事じやない！キュルケの部屋に居た事自体が既に問題なの！」

「それについても言う事が有りますが、それも聞く耳持たないと？」

「当然でしょ！どうせ出まかせばかり並べる気でしょうが！」

「……貴方はさつきこんな事を言いましたね。僕らが貴方の家の一員だとか。それって僕らと貴方が『家族』って事ですか？」

突然、思いも抛らぬ事に話題を切り替えられてルイズは困惑する。

「そ、そうよ、そう言う事になるわね」

「……それが一番気に喰わない」

「な、ななな、なんですって！」

「さつき僕が言ったのは自身の身の潔白の主張です。ですが貴方はこうして手にした鞭を押さえ込んで無理矢理聞かせなければ僕に弁解の機会すら与えてくれなかった」

「聞くだけ無意味よ！アンタみたいな工口犬、信用できますか！」

「……僕の言う事を信用しないのは勝手ですが、そんな人に家族呼ばわりされたく有りません。僕らの事を信頼出来ないと言つのなら二度と僕らの事を自分ちの一員だとか言わないでください」

「あ、あなたねえ、自分が何言ってるのか解かっているの！？」

「その言葉、そっくり貴方にお返しします」

ルイズはそれで完全に切れてしまった様だ。

「あんた、しばらくご飯抜きいっ！」

「……他に言う事はないんですか？どうぞ御自由に」

「何余裕かましてんのよ！知ってんだからね！厨房の連中に食べ物貰ってるのを！あんたそれが有るから大丈夫とか思ってるでしょ

うが、それも止めさせるからね！」

「……………それで？それがどうかしましたか？」

伝家の宝刀の積もりで持ち出した食事抜きをあっさりスルーされて、引つ込みが付かなくなつたルイズ。こうなると物の弾みで取り返しの付かない事を口走つてしまうのも彼女の悪い癖だつた。

「あんただけじゃないわ！キャラもご飯抜き！」

「な！？キャラは関係ないでしょう！」

「連帯責任よ！あんまり逆らう様なら、その責めはあんた一人じゃ済まないんだから！」

実はルイズ自身も流石にやりすぎだと思つたがもう、引つ込みが付かない。

「……………あなたと言う人にはほとほと呆れました」

「ああそう、好きなだけ呆れれば？言つとくけど撤回しないわよ。あんたがさっきの言葉を取り消して謝るなら、キャラだけでも食事抜きは考え直してもいいけど」

エリオはもう仕方ない、と思つた。エリオ一人が罰を受けるなら食事抜きも別に構わないが、キャラを巻き込む訳にはいかない。

「す……………」

「駄目だよ、エリオ君」

「キャラ？」

「キャラ、アンタ一体何を……………」

「エリオ君、今あたしの為に悪くも無いのに謝ろうとしたでしょ。自分が間違つてないと思うなら、脅しなんか屈して謝つたりしちゃ駄目だよ」

「なななな、なに言い出すのよ！キャラ、アンタエリオが何してたと思つてんの！」

「二人が何を言い争つていたかよく解からないけど、エリオ君は変な事する人じゃありません。あたし、エリオ君の事信じてますから」

キャラはごく自然に、さも当たり前のようにニッコリ笑つて言った。

「あ……あんだね……」

余りにもさらりと言い切ってしまうキャラの言葉に、ルイズは返す言葉を失ってしまう。

「でも、僕が謝らないと君まで食事抜きにされてしまうよ」

「いいの、ご飯抜きは応えるけど私の為にエリオ君が自分を曲げるのを見るのが辛いから。エリオ君が言った事は多分、とても大切な事だから」

そのキャラの言葉にエリオも覚悟を決めた様だった。

「解かったよ、キャラ」

エリオはルイズに向き直り、言った。

「ルイズさん、僕らが元居た処へ戻れず、ここで貴方の世話になつて暮らしていくしか無いと言うなら、貴方の言う事には従い使い魔の仕事はしましょう。」

ですがさっきの言葉を取り消す積もりも有りません。信頼できず、してもくれない人を家族と認める積もりは有りません。それが気に喰わないならどうぞ、食事抜きでも何にでもしてください」

面と向かつて忠誠しないとされたも同然の事を言われてしまったルイズはいよいよ追い詰められてしまう。

「あ、あ……」

返す言葉が思いつかない。そしてとうとう言ったらおしまいな事を口にする。

「あんだ達！この部屋で寝るの禁止！」

「ごめん、僕のせいでキャラまでこんな目に合っちゃって」

「エリオ君のせいじゃ無いよ。気にしないで」

二人はルイズの怒りを買って、寝床の藁山ごと廊下に追い出されたのだ。

「でも、こんな所で寒くない？」

「こうしてれば寒くないよ」

キヤロはエリオに身を寄せると、一緒の毛布にくるまった。

「エへへ」

廊下は寒かったが二人一緒なら寒くなかった。

一方、ルイズはその夜、寝られなかった。

目はつぶっているのだがつぶっているだけ、一生懸命目をつぶっているのに意識が消えてくれない。

どうして眠れないのか理由が思いつかない。

いや、理由ははつきりしていた。

エリオの言った事が心に引つかかっているのだ。

聞いてた時は『使い魔が主に逆らった』という事に逆上して何を言っただかまで頭に入っただけだったが、

しばらくして頭が冷えてくると段々言ってる事が理解できてきた。

『ヴァリエール家の一員』とエリオ達に言った時、別にエリオ達が『家族』とかそこまで深く考えていた訳じゃない。だが、自身のあの台詞を突き詰めればそう言う事になるのだろう。

だが、エリオはその言葉に対して、『貴方は家族じゃ無い』と返してきた。これは『貴方を主と認めない』と言ったも同然だ。

事も有ろうに使い魔が主に対して『ご主人様失格』の烙印を押しに来たのだ。使い魔がご主人様を評価するなど持つての他、と言いたいが……。

なんでこんな事を言われる事になったのだ？

たしか、エリオに罰を与えていたんだっけ。ご主人様が使い魔を叱ったり、罰を与えるのは当たり前だ。それに腹を立てるなど逆恨みもいいとこだ。

エリオ達が怒るのはお門違いだ。お門違い……………。

本当にそうか？そもそもなんでエリオを叱ってたんだっけ？

そうだ、ツエルプストーの部屋に居た件で叱ってたんだ。主とは仲の良くない奴に近寄った、その事を咎めるのに何の問題がある？
そういえば何か言ってたような、確か『身の潔白』がどうか。

『鞭を押さえ込み無理矢理聞かせなければ弁解の機会も与えてくれなかった』

言われて見れば……あの時私はエリオがキュルケの部屋に居た事に逆上してエリオの話も聞かず鞭を持ち出した。あの時罰を与える前に一応話を聞くぐらいしてもよかったかも知れない。

でも、それでエリオの話を信じるかどうかはまた別の話だ。『キュルケの誘いは断った』『罰を受ける様な事はしてない』何をもってその言葉を信じると言うのだ？

キヤロもキヤロである。私が疑った通りの事が有ったならもしかすると、エリオはキヤロの事を裏切ったかも知れないのに。『信じてます』だなんて、よく無邪気に言えた物だ。

『裏切る』？……

そういえば今まで気にして無かったが、あの二人はどう言う関係なんだ？苗字が違うから兄妹とかじゃあるまい。

一緒に召喚されてきたから漠然と友達同士なんだと思ってたが、そもそも『裏切る』『裏切らない』なんて関係なのか？

ここまで考えてようやくルイズは自分がエリオ達の事を何も知らない事に気づく。

そうだ私はエリオ達の事を何も知らない。何も知らないのに『野良犬』だの『馬鹿犬』だの決め付けて話すら聞こうとしなかったのは果たして良かったのか？

だって、仕方ないじゃないか。エリオ達とは出会ってまだ3、4

日しか経ってないのだ。彼らの事を誰かに聞こうにも彼らの事を
知ってるのは此処には誰もいないのだ。

．．．．．いや、少なくともエリオの事を知ってる人間が一人
居るじゃないか。キヤロだ。

キヤロは少なくとも召喚前のエリオの事を知ってるはずだ。その
キヤロがあんな事があつた後でエリオを信じると言い切った。

あれが『信頼』していると言う事なのだろうか？

．．．．．なるほど、確かにキヤロに比べれば私はエリオの事
を信頼してるとは言えない。

だが、エリオは私の事も信頼出来ないと言った。私が信頼出来な
いと言うのは納得いかない。

信頼できる人間なのだろうか？私は．．．．．。

そもそもエリオは何を持って私を信頼できないと言ってるのだ？

この私が信頼できない人間だと？

これでも私はトリステインの名門貴族ヴァリエール家の三女だ。

このトリステインにおいてこれほど信頼出来る者は中々いない。

それとも、私が魔法を使えないから信頼に値しないとも言っ
か？

ここでルイズはエリオ達が自分が魔法を使え無い事どころか、
ヴァリエールの名すら知らなかった事を思い出す。

そうだ、エリオ達はサモン・サーバントすら知らなかった。

そんなエリオ達からすれば私は訳の解からない理由で自分達を拉
致した人攫いにすぎない。

そんな彼等が私と言う人間を評価するには日々の態度や行動、言動から見定めるしかない。

そして二人は今日のキュルケの一件から私の事を、人の話を聞かずに感情だけで相手を鞭打つ自分達を全く信頼しない人間と判断したのだ。

そんな二人の評価に私は『ご主人様を使い魔が品定めするな!』などと異を唱える事が出来るのか?

少なくとも自分が貴族である事を盾にそれを拒絶できない。

世間には貴族とは名ばかりの貴族の風上にも置けない連中がいる。権力を笠に平民の持つ物をなんでも自分達の物に出来ると思いつ込んだ勘違いした輩、少なくとも私はそんな奴らを真の貴族とは思っていない。

私はそんな奴らと自分は違うと思っていた。

だが考えてみれば自分が実際に平民と直接接した事など無かった。自分が平民の前に出た時、どんな態度に出るか解からなかった。だが、召喚された使い魔という形で二人の平民に接する事になった時、私が実際にやった事は何だったか。

そう、私も勘違いしていたのだ。

私も自分が貴族というだけで無条件で尊敬されて当然、あの二人から信頼を得られると思って無かったか?

互いに相手の事を知らない以上、『信頼』などという物は無いに等しい。

つまり、私たちはゼロから信頼関係を築いて行かなくてはいけないかった筈だ。

その為には相手の事を知るところから始めなくてはならなかった
じゃなからうか。

しかし、何か有ったときに訳も聞かず叩く、というのは相手の事
を知る、という行為とは程遠い事だった。

話を聞かなかったのは元々は自分の使い魔がキュルケの所に居た
のが気に喰わなかったのだが、考えてみれば相手はキュルケだ。無
理矢理連れ込んだのかも知れない。

なのに私は逆上して自分の感情をそのままぶつけてしまった。

エリオ達はそんな私の態度を自分達を信頼してない故の事と受け
止めたのだ。

自分を信頼しない相手は自分達も信頼できないと言う事だろうか？

自分の事を色々省みながらルイズはベッドから起き上がり、廊下
の様子を見に部屋のドアを開ける。

エリオとキャラは身を寄せ合いながら一つの毛布に包まり寝てい
た。

キャラの顔を見る。

エリオの巻き添えで廊下に寝る羽目になったのに、よく平気でエ
リオに寄り添いながら寝ていられるものだ。

考えて見れば、エリオが潔白だろうと無かるうと、これはエリオ
の問題でありキャラは関係ない。

なのにキャラの食事を盾にエリオに屈服をせまり、結局キャラの
後押しで拒絶され、結果彼女まで廊下で寝る羽目に追い込んだのは
私だ。

キャラまで罰を受ける筋合いはない。

私はキャラの食事まで人質にとり、一体エリオにどうさせたかっ

たのだらう？

なんの事はない。私もそこ等へんの勘違い貴族となんも変わらん
じゃないか。

権力や力づくで平民を従える事が出来ると思ひ込んで。そうし
て服従の言葉を得たとして、そんな関係の何処に『信頼』などと言
う物の入り込む余地がある？

それにしても弱みに付け込まれてエリオが謝ろうとした時、自分
が食事を抜かれるかも知れないのにエリオを支えたキャロの態度は
立派だ。

あれが真に信頼に裏打ちされた関係なんだらうか。

エリオの顔を見る。

そういえばエリオはさっきの言い争いの最中、ずっと『家族』と
言う言葉にこだわっていたが、家族の事で何か有ったのだらうか。

ただ一つ解かるのはエリオにとって『家族』とは『信頼』によっ
て成り立つものだと言う事。

少なくとも私なんか軽々しく口にしていい言葉ではなかったの
だ。

ここまで考えた時、ルイズは召喚して以来、同じベッドで寝る事
を許したにも関わらず、キャロが一度も自分のベッドに入って来て
ない事に気付く。

キャロにしてみれば単に一人床に寝かされるエリオを気遣ってエ
リオに寄り添って寝てるだけなのだがルイズはそうは思わなかった。
私は信頼されて無いのだらうか？信頼されて無いから同じベッド
で寝られないのだらうか？

エリオは信頼できない自分を家族と認められないと言った。それ
はご主人様だと認めないと言われたも同然だ。

もう、手遅れだらうか？

二人の顔をマジマジと眺めていたがいくら考えてもこれ以上答えは出そうに無い。かといって今夜はもう寝られそうも無い。ならば、いつそ……。

ルイズは自分の毛布を持って来て二人に掛けてやった。

次の朝、ルイズがエリオとキャロの二人に掛けてやった毛布はいつの間にか無くなっていった。だから二人が目覚ましてもルイズの気遣いに気付く事は無かった。

目を覚ましたのはエリオが先だった。キャロが寄り添ってくれたおかげなのか、タベあんなに冷え込んだのに意外と寒くなかった。寝てる間に誰かに毛布を剥ぎ取られた気がしたが二人で一枚しかない筈の毛布はちゃんとここに有るから誰かに取られた筈は無い。

「キャロ、朝だよ」

「あつ、エリオ君おはよう」

エリオに揺り起こされキャロも目を覚ました。

（おはよう、キャロ）

「フリードもおはよう。ってここは？あそつか」

そういえばタベ二人してルイズに逆らい、罰として廊下に出されたのだ。

「エリオ君、いつも先に起きてルイズさんを起こす事になってたけどどうしよう？」

「うん、僕ら罰として部屋を出されてるから、ドアには鍵が掛かってる筈だし、ルイズさんが起きて中から開けてくれない事には

どうしようもないよ」

「でも起こさなかつたら遅刻しちゃうんじゃない？」

「別にいいんじゃない？ 僕らを詰め出したのもルイズさんなんだし、自分がやった事で自分が被害をこうむる訳だし、いい薬なんじゃない」

そもそも、エリオ達の魔法に開錠魔法は無い。しかも表向きはエリオ達は魔法の使えない筈の平民という事になっている。ルイズが自分で鍵を掛けた部屋の中にまで起こしに行く義務は無い。

「あれ？ でもエリオ君、鍵掛かって無いみたいだよ」キャロがなんの気無しにドアノブを回すとドアが開いた。

「無用心だなあ。鍵掛け忘れるなんて……」

「でも、これで起こしに入れるね」

「……まさかと思うけど、人を罰と称して廊下に詰め出しとして、起しに来させる為に鍵を掛け無かつたのかな？」

もしそうだとしたら、呆れを通り越して賞賛ものだ。なにが何でも自分達を扱き使う気なのだろうか？

仕方ないので部屋に入ってルイズを起こす事にした。

「ルイズさん、朝ですよ。起きて下さい」

「ふわっつ、なにもうそんな時間？」

「なんならもう少し寝かせてあげてもいいですよ。遅刻してもいいなら」エリオは窓を開けながら言った。

「あんたねえ」

そんな会話をよそに、キャロはおかしな物に気付く。

それは一本の藁だった。何故かルイズの毛布に一本だけくっついてた。あれ？ なんでこんな所にくっついてるのかな？

この部屋で藁といえばエリオとキャロに寝床として当てがわれている今は廊下に出されてる使い魔用の藁ぐらいしかない。

それがなんでこんなトコロに？

「あっそうだ、今日から食事は厨房で頂きなさい。あんたたちにはそっちの方がいいでしょう？」

えっ？だつて夕べ……。

「……………夕べの騒ぎの時、食事抜きとか言ってますんでした？」

するとルイズはあくび交じりで言った。

「ふわあ〜っ？なんの話よ？そんな事言つたっけ？」

あまりの事に絶句するしかない。

（ゆうべあれだけの事が有つたのに忘れてるよ、この人）

（……………いいんじゃない？おかげでご飯抜き無くなつたし）

ルイズの着替えの為、エリオは廊下に出ていた。

「あら、ダーリンじゃない。おはよう」

声の主はキュルケだった。

「キュルケさん、そのダーリンてのを止めてくれませんか」エリオは挨拶そつちのけでそつちの方の訂正を優先した。

「ダーリンはダーリンじゃない」

「少なくとも僕はそんなものになつた覚えはありません」

そもそも、エリオが酷い目に合つたのは元はと言えばキュルケの

せいなのだ。良い感情を抱くわけが無い。

「連れないわねえ……………って何よ、この藁の山は」

「その藁はうちのよ。なんか文句ある？」

着替えを終えたルイズがキャロと一緒に出てきた。

「あらルイズじゃない。おはようと言うべきかしら？」

「じゃあ、こちらも一応礼儀としておはようと返すべきよね」

ただの朝の挨拶なのに何か異様な雰囲気である。ルイズとキュルケの確執もタベわかつた事だし、エリオとキャロは関わらない方がいいと思つた。

「じ、じゃあ僕らは先に行きます」

「あらダーリン、一緒に行きましょうよ」

「遠慮させて頂きます……………」

エリオ達はそのまま言つてしまふ。

「もう………連れないわねえ」

「人の使い魔と何処に行くつもりよ、あんたは」

「あら、使い魔と言っても人間なんだし、私はあんたの指図は受ける筋合いは無いわね。恋愛は自由よ」

「恋愛ねえ………」

キュルケはルイズがいつもみたいに噛み付いてこないのに少しとまどった。

「あら、ずいぶん余裕じゃない、言つとくけど諦めないわよ、私は」

「言つとくけど、色気しか武器の無いアンタじゃあのキャロって娘には勝てないわよ」

ルイズに思いがけない事を言われてキュルケは驚いた。

「な、何よ、私の何処があの子に劣るっての？」

「今のアンタじゃ絶対解からないわよ」

ルイズが何の事を言ってるのか解からず首を傾げるキュルケ。

それを他所にルイズは食堂に向かった。

キャロにあつてキュルケに無いもの。

残念ながら今のところルイズにもそれは無い。

「だけど『ご主人様』になつた以上、必ず自分はその二人との間にそれを築かねばならない。」

その為にはどうすれば良いか解からないが、

取り合えず次の休みに街へ連れてってやるか、とルイズは思った。

第8話 買物

? 「エリオ、キャラ、今から街に出かけるわよ!」

その一日はルイズのそんなセリフから始まった。

「・・・街って、授業はどうするんですか?」

「今日は虚無の曜日じゃない、授業は休みに決まっていますよ。買い物に行くのよ! 付いて来なさい」

「・・・なにを買いに行くんです?」

「あんた達の服よ。あと、あんたの剣も買っわよ」

「・・・服は要りますが、剣は要りません」

「なんでよ」

「武器なら持ってますから」

「決闘の時のあの槍? だめよ、あんなダサいの。あんなモン抱えた奴、かつこ悪くて従者として連れて歩けないじゃない」

「・・・あのですね、」

別に槍が剣にかつこ良さで劣ると言う訳では無く、単にルイズの趣味の問題なのだが、そんなどうでもいい理由で勝手に人の得物を取り替えようなんて、たまった物では無い。

タダでさえ例のルーンのおかしな影響でエリオの戦力は弱体化を強いられてるのだ。この上武器までそこら辺の安物をあてがわれても困る。

ハルケギニアは魔法世界だからひよつとしたらマジックアイテムとかあるのかも知れないが、そんな物が街で買えるわけも無い。

しかも魔法至上主義で武器は軽視されているのでまともな武器が有ると思えない。ミッドチルダ製のアームデバイスであるストラータを上回る武器が有ると思えない。

当然、エリオは実用的な観点から武器の購入を拒否するのだが、見栄えを重視するルイズと口論になりそうになった。

しかし、アンマリ拒否するとその内ストラータに対してルイズが

『没収よ!』とか言い出し兼ねない気がしたのでエリオの方から折れて武器購入を受け入れる事にした。

だが、服を買って貰える事になったのは正直ありがたい話だった。実際、エリオとキャロの衣服事情は限界を向かえつつあった。

本人達に自覚は無いものの、二人は召喚された時デートの真っ最中だった。そこから着のみ着のまままで召喚されたのだ。お出かけとは言え日帰りだったので着替えなど用意してある訳も無い。

エリオはまだいい。問題はキャロで特に下着の替えは切実な問題だった。どっちにしても洗えばいいのだが、洗濯の間、着る物が無いのは困る。

それに加えてエリオが始めたトレーニングも衣服の問題に拍車をかけていた。

ルーンの力を克服する為の筋力トレーニングは熾烈を極めるもので、物凄い発汗を伴う物だ。その時着ていた服をそのまま洗わずに着ていられるものではないが他に着る物がない。

しかも朝のトレーニングにはキャロも付き合うのだが、シャリーに着せてもらった余所行きワンピースはともトレーニングに向かない。

六課での訓練の時は二人とも黒のランニングとショートパンツを着用していたのだが。

そんな訳でルイズの魂胆はどうあれようやく着る物を手に入れられるので二人はほっとした。

一方、ルイズはルイズで危うくまたエリオ達と喧嘩になりそうだったのを回避できてほっとしていた。もう少しでエリオの槍に対して『没収よ!』と言ってしまいそうだったのだ。

そもそも、今回の買い物はこの間のキュルケの一件の時のエリオ

達との仲直りも兼ねて、召喚の時からあまりうまく築けてないエリオ達との信頼関係を築き直す為に計画したのだ。

なのに、その買ひ物が原因でまたエリオ達と喧嘩していたら元も子もない。

とにかくそんなこんなで三人は街に行く事となった。エリオとキヤロにとっては召喚されて始めての外出になる。

しかし、もともと休暇で街に『お出かけ』していた所を召喚されてしまったので、ハルケギニアに居る事自体が長いお出かけなのだが。

しかし問題が発生する。

「あんた達、馬には乗れるわよね？」

「馬……ですか？」

「竜になら乗った事有りますけど……」

「なによ……それ、竜に乗った事有るのに馬に乗った事無いなんてどう言う生活よ？」

ルイズは知らないので無理も無いが、ミッドチルダでは電車や自動車も普及しているので普通に生活する限り馬に接する機会は無い。機動六課としての任務の時もヘリで現場に向かう。エリオもキヤロもフリード以外の動物を移動手段にした事が無いのだ。

「しかし弱ったわね。馬車でもあれば問題ないけど学院の馬車は今出払ってるし」

いくらなんでも馬一頭に三人も乗れない。二頭以上に分けて乗るしかない。

もちろん学院には竜が居る事は居る。タバサの召喚した風竜シルフィードが。しかし、ルイズはタバサとはあまり付き合いが無い。

タバサはルイズとはそれほど仲悪い訳では無いが、タバサはキユルケと親友だったりするのでルイズは彼女とは距離を置いてきた。

『乗せてくれ』などと頼める間柄では無い。

キヤロはフリードとか言う子竜（とルイズは思ってる）を連れて
いるが小さすぎて人が乗るなど論外である。

ふたりは竜なら乗った事が有るらしいがもちろんフリードとは別
の竜だろう。しかし、この二人が住んでた所は馬が要らなくなるほ
ど竜が沢山いたのか？

「とにかく、ここじゃ馬に乗れないと生活出来ないわよ。一番近
いトリスタニアの街まで人の足で二、三日かかるんだから、いい機
会だから覚えなさい」

「……………と言われたものの」

馬を前にして呆然と立ち尽くすエリオ。とにかく背中に跨る。す
ると途端に馬が暴れだす。

「うわっ!」

「お願い、大人しくしてて!」

キヤロがなだめると馬は落ち着いた。

「あれ？大人しくなった。キヤロ、あんた馬扱った事有るんじや
ない。本当は」

「い、いえ初めてです」とにかくキヤロはエリオの後ろに跨る。

（キヤロ、右手のルーンが発動しています）ケリユケイオンが念
話でキヤロに報告をいれる。

（え、これもルーンの効果なの？）フリードや他の使い魔の言葉
がわかる事といい、どうやら動物を使役する為の能力がある様だ。

（エリオ君、私が手を貸すわ）

（う、うん。頼むよ、キヤロ）

エリオが握っている手綱を後ろからキヤロも握る。するとキヤロ
の頭の中に今まで乗った事の無い筈の馬の操り方が浮かんでくる。
それに従い手綱を引くと馬が静かに歩き出す。

「なによ、うまいじゃない」これで街までの移動の問題は解決し
たが、ルイズは内心ガツカリした。

母親譲りでルイズは乗馬が得意だった。

何でもいいから二人と距離を縮めるきっかけが欲しいルイズは二人が馬に乗った事が無いと聞いてきつかけになると思ったのだ。しかし、宛てが外れる原因が自分の刻んだルーンだとは知る由も無い。皮肉な話である。

キャラコのサポートのおかげでエリオも乗り方のコツを掴み、馬を走り回らせられるくらいにまでなった。

そのころ、キュルケは窓の外を眺めてぼんやりしてた。

『アンタじゃキャラコには勝てないわよ』

ルイズのあの言葉がずっと引つかかっていたのだ。キュルケから見ても、キャラコという女の子は乳臭さが抜けない女の子という印象だった。

女として、自分と勝負になるような娘には見えないのだ。

しかし、ルイズは何やら達観した様な感じで、キツパリ自分はあのキャラコという娘に勝てないとまで言い切ったのだ。

「私の何処があの子の娘に劣るってのよ」

はつきり言っただけキュルケにはプライドの傷つくことだった。

そんな考え事しながら外を眺めていると、ルイズとエリオとキャラコが二頭の馬に乗って出かけるのがみえた。

「ルイズ？それにダーリンと、それにあのキャラコって娘も！」

三人連れなんでデートには見えない。もしデートだったらルイズとキャラコのどちらかがお邪魔虫だからだ。

恐らく、ルイズの買い物のお供といったところか。しかし主であるルイズが自由時間でも与えれば、そのままエリオとキャラコのデートに早代わりするかも知れない。

「こうしちゃ居られないわ！」キュルケは脱兎の如く部屋から駆け出した。

そのころ、タバサは部屋で本を読んでいた。

そこへキュルケが乱入してくる。

「タバサ！今から出かけるわよ！早く仕度して頂戴！」

「虚無の曜日」タバサはそう言うのと視線を本に戻した。

「あなたの邪魔をして悪いと思っているわ！でもこれは恋なの！女の意地とプライドをかけた！」

その言葉にわずかにタバサは僅かに反応するが、すぐ首を横に振る。理由が無いからだ。

「ああもう！恋したのよ、あのエリオって子に。それでそのエリオがルイズと一緒に出かけたの！だからあたしはそれを追って突き止めなくちゃいけないの！」

それでもタバサは首を横に振る。ルイズの使い魔の二人には別の興味が有るが、なぜそこで自分が出てくるのか解からない。

「出かけたの！馬に乗って！あなたの使い魔で無いと追いつけないよ。お願い！」

それでタバサはようやく合点が行った。

「わかった」

「ありがとう！追いかけてくれるのね！」

タバサは窓を開くと口笛を吹いた。すると何処からとも無く鳴き声が響く。しばらくすると青い竜が何処からとも無く飛んできた。

「何時見ても貴方のシルフィードは惚れ惚れするわねえ」数分後、二人は馬上の人ならぬ竜上の人になっていた。

「どっち？」

「えっと・・・慌ててたから」考えて見ればルイズ達が出かけるのを見て、行き当たりバッタリで出かけるのを決めたのだ。行き先が何処かは検討がつかない。

「馬二頭、三人乗ってる、食べちゃ駄目」タバサは馬の匂いを追わせる事で行き先を探させるつもりらしい。

召喚されるまで馬を襲って餌にしてたらしい。

「ねえ、タバサ。ちょっと話を聞いてくれない？」

「何？」

キュルケはこの間ルイズに『アンタはキャラに勝てない』と言われた事を話した。

「……貴方はどう思う？」

タバサは暫く考えて、言った。

「……プライドにこだわるあの娘ルイズが負け惜しみに他人を引き合いに出すとは思えない……」

実はキュルケがキャラの事を気にしてるのもこの辺に理由がある。そもそもキュルケはルイズの言う事などただの負け惜しみと聞き流せばいいのだ。

でも、件の台詞を言った時のルイズは何か達観してるような感じで、いつもの負け惜しみとは感じが違ってた。

「でも、客観的な女の魅力で貴方がキャラこって娘こに劣ってるとは思えない。だからルイズの言ってる事は別の事だと思う」

「それは何？」タバサの次の台詞に期待するキュルケ。

「残念ながら私はその場に居なかつたから、あの娘ルイズがどんな文脈でその言葉を言ったか解からないので、検討もつかない」

それを聞いてキュルケはガツカリした。

「はあ、流石のタバサも色恋沙汰は苦手か。まあいいわ、それは自分で突き止めてみせるから」

キュルケはこの間のルイズの発言を、『キャラには自分キュルケには無い武器がある』と言う意味に捉えてた。

そんな物を探している内はキュルケは太刀打ちどころか勝負にすらならないのだが。

馬を飛ばし、ルイズ達三人はトリスタニアの街に到着した。

「どう？ここがトリステインーの都市トリスタニアの街よ」

自慢げにトリステインの街を案内するルイズ。しかしエリオとキヤロはそんなルイズを他所に思ってしまった。

（ねえ、エリオ君。本当に此処この国一の都市なの？なんか狭くない？）

（うーん、確かに道幅5、6メートル程度じゃちょっと狭いね）
もつとも、中世レベルの街の道幅が狭いのは、敵の軍隊に街の中
枢に一気に攻め込まれない為にわざと狭くしてあるのだ。

それはハルケギニアも同じである。しかし、そんな工夫はミッド
チルダやなのはの故郷の地球の様に航空技術の発達した世界では全
く無意味だ。

人口も桁が違う。トリステインの人口は二百万弱、ガリアでも千
五百万、しかしミッドチルダは一十億ぐらいあるのだ。

とにかく、エリオ達の感覚からすれば王都と言うには以外に小さ
かった事に拍子抜けだったわけだが、何故かルイズはそんなエリオ
達の表情を見てご満悦だった。

（ねえ、ルイズさん、なんだか何時に無くニコニコしてるけど、
何か良い事でもあったのかな？）

（いや、多分想像がつくよ。僕らが街の大きさに驚いてると思っ
ているんだ）

（教えてあげた方がいいのかな？）

（黙っていようよ、なのはさんの故郷には『言わぬが華』とか『
知らぬが仏』とか言う諺があるっていうし。多分こんな状況に使う
んだとおもっよ）

鼻歌とか歌いながらご機嫌なルイズだった。そう、これぞ『知らぬが仏』……………

とにかく、先ずは服を調達した。

最初に訪れたのはヴァリエール家御用達の仕立て屋であるらしく、その店長はルイズの事を『お嬢様』と呼び、知り合いであるらしくかった。

「今日はこの子達の服を見立てて欲しいの。下着も含めてね」
で、店の若いお針子たちが二人を採寸し始めたのだが、何故かキヤロだけでなくエリオにまで女物の服と下着を出してきた。

「ちょ、ちよつと僕は男ですよ！」その言葉に対し店のお針子達は言う。

「え〜っ、女の子みたいに可愛いのに」と言う事はちゃんとエリオが男の子だと解かっているようだ。

機動六課では数少ない男子隊員だと言う事でスバルやティアナ達年上の女性隊員に色々弄られたが、ここでも弄られ体質は健在のようだ。

「いい事を思いついたわ」ルイズが何か提案するつもりらしい。

「あんた明日からモンディアル・ハーマイオニーと改名……………」

「僕は何処その借金執事ですか!!」

「チッ」

「チッって何ですか、チッって」

一方、困った事もあった。

まだそれほど目立たないが、キヤロの胸は少し膨らみかけてきて、つい最近ファースト・ブラをつけ始めたのだが、当然召喚されたと

きに身に着けていた物しか手元にない。

代わりは此処で手に入れるしか無いのだが、どうもこのハルケギニアにはブラジャーという物が存在しないらしいのだ。

仕方が無いのでキャミソールを代わりに購入して代用するしかなかった。

これで一通りの物は買ったのだが、最後にエリオ達にはまだ買う物が残ってた。

「あの店で買えばよかったのに何でワザワザ古着屋に買いに行くのよ？」

「世の中には上等な服じゃ困る事も有るんですよ」

エリオ達が買いに来たのはトレーニング・ウェアの代用品だった。ミッドチルダでエリオ達が着ていた様なショートパンツの様なものは無かったが、上が半そでのランニングシャツで長ズボンの黒い作業着の様なものを見つけたので二人分購入した。

「確かビエモンの秘薬屋のとなりだったわね」

日の当たらない狭い路地裏をルイズは目当ての建物を探しながら歩き回る。

「どうしても武器を買わなきゃだめですか？」エリオはルーンの事が有ったので武器の購入もあまり気が進まなかった。

「どうしてそんなに嫌がるのよ？買ってあげるっていつてるんだから素直に貰うときなさい。あった」

「よつやく目当ての武器屋を見つける。」

(このあいだ、言い過ぎたのがいけなかったんじゃない？だから剣でも買ってご機嫌を取ろうとか)

キヤロが念話でそんな事を言ってきた。このあいだとは例のキユルケの一件である。

さすがに二人とも後からあれは言い過ぎたなあと思ったが・・・。

(物で、釣ろうって訳か。でも、やっぱり気が進まないなあ)

(まあ、有って困るものじゃないし、適当なものを買ってお茶を濁せば?)

(しかたないなあ、後で処分できる様になるべく安物選ぼう)

「最近はずいぶんの間でも下僕に武器を持たせるのが流行っていやしてね、これなんかどうです？」

あやしげなちよびひげを生やした武器屋の主人は細身の剣を最初勧めていたが、

「もっと大きな剣がいいんだけど」ルイズがそんな事言い出した。

「そんな大きな剣あつかえませんか」

「でも槍とかは扱ってたじゃない」

「槍と剣とじゃ勝手が違いますよ」

「そう?とにかく商品を見せて貰いませう。もっと大きくて太いのがいいわ」

すると店の店主が、

「お言葉ですが、この御仁には、そのサイズ程度がよろしいかと」

「大きくて太いのが良いと言ったのよ」

「へ、へい」

「素人の貴族が・・・こりゃ、カモだな」

裏に廻った店主はこれ幸いと高く売りつけようと考えた。

「お待たせしやした〜」

店主が持つて来たのはヤタラ金びかの両手持ちの大剣だった。所々に宝石が散りばめられ、金メッキされた刀身が鏡の様に輝いている。

エリオにしてみれば無駄に豪華な装飾にしか見えない。こんなものが役に立つとは到底思えない。

「店一番の業物でさあ。貴族のお供をなさるならこれくらいでないと」

「おいくら？」

「エキュー金貨で二千、新金貨なら三千」

「立派な家と、森付きの庭が買えるじゃない」

えっ！？ エリオは我が耳を疑った。

（え、エリオ君、いくらなんでも高すぎない？）

（僕もそう思うよ、あんな無駄な飾りの分を足しても、そんなにするなんて）

エリオもキャロもハルケギニアの通貨単位も物価も解からないので本当なら口を挟めない。

キャロに至っては武器の事もよく解からないのだが、そのキャロから見ても高すぎると思った。

なにしろ家一軒である。それも一応貴族であるルイズの言うところの『立派な家、庭付き』である。どれほどの豪華な家か知れたものじゃない。

それとどんなに豪華でも剣一本ではいくらなんでもつりあわない。（ひよっとして何も知らないと思って、高く売りつけようなんて言うんじゃ）

「名剣は城に匹敵しやすぜ。屋敷ですんだら安いもんでさ」

「そうなの？じゃそれいただくわ」

「ちよっ、ちよっと待った！」思わず剣を取り上げてエリオは口を挟んだ。

「そんな無駄に派手な剣、実戦じゃ役に立ちませんよ！第一、高

すぎて気安く使う気になれません」

「何いってんのよ、高い方が良いに決まってるでしょう！」

「高けりゃ、いいってモンじゃありません。第一、これ実戦で二、三回打ち合ったらポツキリ折れる様なナマクラじゃないですか」

実はエリオは簡単に折れてくれるような安物の方が都合が良かったのだ、トレーニング中にわざと少し乱暴な扱い方をして安物だから折れちゃいました」とか言って堂々廃棄処分する積もりだった。

しかし、そんなバカ高い剣でそれやったら、『折角、ご主人様が高い金出して買ってあげたのに』と大目玉貰いかねない。

「馬鹿言っちゃいけないぜ。これを鍛えたのはかの有名なゲルマニアの錬金魔術師シュベール卿だぜ。そんな簡単に折れるかってえの！」店主が食い下がる。

「エリオ、なんでアンタにこの剣がナマクラだなんて解かるのよ？」

ルイズに言われてエリオは気付く、エリオ自身にだって武器の目利きは出来ない筈なのに、なんで自分はこの剣がナマクラだと解かったのだろう？

(エリオ)

(何、ストラーダ？)

(今、剣を持った時、左手のルーンから私をスキャンしようとしたのと同じ探知魔法が発動しました)

(えっ、どう言う事？)

(どうやら、このルーンには手にした武器の機能をチェックして使用者に伝える能力が有るようです)

(じゃあ、いまは……)

「ちよつとエリオ聞いている？何でこの剣がナマクラなのよ？」

「僕には手にした剣の良し悪しがわかるんです。もっと安くて実用的な剣をお願いします」

「ちつ、折角のカモをあの小僧め。それなら……」

「お客さん、この大きさを安いのといったらこれぐらいしかありやせんぜ」

店主が次に出したのは錆だらけのボロ剣だった。

エリオは思った、カモれないんでボロ剣を在庫処分のつもりで押し付けてきたな。

しかし、それはエリオにとっても願ったりなのだが。

「ええ〜っ、こんなボロ剣カツコ悪いじゃない。さっきのにしなさいよ」

「その剣に命を掛けるのは僕なんです。だまってみてください」
ルイズからブーイングの嵐が来たが聞かない事にする。

「いくらですか」

「新金貨で百」

それでも大豪邸の30分の一、安いとはいえない。

「百？冗談でしょ？こんなボロ剣、十がいいトコですよ」

エリオはイキナリ十分の一に値切る。

「おいおい、冗談はよしてくれ。これだけの剣がそんな安い訳無いだろ。どんなにまけても八十だ」

しかしエリオは強気だった。なにせ買う気が無いのだ。店主が呆れて品物を取り下げてくれればそれはそれで、好都合なのだ。

「こんなに錆びてるし、どうみても売れ残りでしょ。三十がいいトコですよ」

「七十、七十だ。これ以上はまからねえ」

「五十です。それで駄目なら帰らせて貰います」

エリオは錆びた剣をカウンターに置いてルイズとキャロの手を引いて店から出て行くこととする。

とつとつ店主は観念したのか叫んだ。

「もう、五十で結構だ。持ってけドロボー！」

「全く、さっきの剣でよかったのになんで値切ってまでそんなボロ剣買うのよ！」

「ボツタくらわれるよりましです。いくらなんでも剣一本が屋敷一軒と同じ値段の訳ないでしょう」

「ルイズさん、ああいう所で買い物した事あって連れて来たんじゃないんですか？」

「メイジたる貴族が普通、武器屋に出入りする訳ないでしょ。今日が始めてよ」

「それにしたっていくらなんでも高すぎるって解かりそうなモンですけどね」

武器屋から出てきたエリオ達のそんなやり取りをやっと追いついたキユルケ達が見つける。

「あの女、キャロがどうの言つときながら、結局自分がエリオを狙ってたんじゃない！エリオの気を引こうとプレゼントを買いに来たんだけだわ！ゼロのルイズの癖に生意気よ！」

キユルケはルイズ達が入った武器屋に入ってしまった。

「折角ご主人様がこないだ訳も聞かずに叩いたお詫びに剣を買ってあげようと思ったのに、わざわざそんなボロ剣買って！」

「お詫びなら服だけで結構です。それで騙されて変な剣掴まされてたんじゃ世話ないです」

「なによ！つ！いちいちいち口答えして！その角のある言い方何とかならないの？」

「好きでこんな言い方してるわけじゃ有りません」

「大体あんたはねえ」

『ああウルセエ、ウルセエ！おちおち寝ても居られネエヤ』

「ななな、なんですってえ！ごごご御主人様に向かってなんて事を！」

「ちよ、ちよっと待ってください。今のは僕じゃありません」

「なに言ってるんのよ、あんた達以外に誰がいるってのよ！」

『おい、何処見てる。ここだ、ここだ』

「えっ？どこ、どこ」

するとキヤロが声の出所に気付く。

「あ、剣が……」

「人が寝てるところ起こしちゃがって」

「じゃ、喋ってる」

『おでれーた、そんなひよっこの癖しておめえ「使い手」かよ。そりゃ目も覚める訳だ』

「『使い手』？何の事」

「そ、それ、インテリジェンスソードじゃない」

「インテリジェンスソード？」

「誰が始めたか知らないけど、剣に知性を持たせて喋れるようにした剣があるのよ。なんの役に立つのか良く解かんないのに」

まるで、インテリジェントデバイスみたいである。

『今何年だ？てか、此処何処だ？答える、オウ』

「なんか、柄悪いな」

『なんだとっ、このヤロ』

(エリオ、この剣にAIのような回路装置の類は見受けられませんが、魔法力のみで知性を付加したようです)

(そんな、まさか……)

それにしてもかなり口の悪い剣である。武器屋で値切りすぎたのに以外にアツサリ交渉に応じたと思っただらこんな訳だったのか。

ミッドのインテリジェントデバイスの場合、AIの役割は使用者へのサポートとアドバイスである。でなければルイズの言う通り、何のためにあるのか解からない、ただの面白機能だ。

インテリジェントと言ってもこの剣の場合、ストラーダと違ってとてもその辺には期待が持てそうに無い。

錆びてるのを良いことにトレーニング中に壊したとか言って早々に廃棄処分するつもりだったのだが、剣自体が喋るのではそれも出

来そうに無い。

『おれっちはデルフリンガー、よろしくな相棒』
へんな剣買わされたなあ、とエリオは思った。

第9話 強奪（前書き）

かなり遅れてすみません。
ついにフーケ編突入です。

第9話 強奪

トリステイン王国で最近、『土塊のフーケ』という盗賊が出没し、何かと噂になっている。

何でも貴族ばかりを狙い、貴重な財宝やマジックアイテムを強奪していくという。

年齢も、何処の何者かも、男か女かも、一切の素性が不明。ただ一つだけ、少なくともトライアングルクラスの土メイジだという事が解かっている。

何故ならフーケは固定化の掛かった壁や扉を錬金の魔法でただの土塊に変えたり、時として巨大な土のゴーレムで宝物庫の建物を破壊したりといった手口を使うからだ。

だから、ついた二つ名が『土塊』

実は何を隠そう、そのフーケはある偽名を使い、トリステイン魔法学院に職員として潜り込んでいた。無論、学院の宝を奪う為に。

フーケの狙う獲物は学院の宝物庫に眠る秘宝、『生者の杖』と『災いの石』

しかし、学院の宝物庫は思いの他、頑丈でさすがのフーケもこれには苦戦していた。

何度か『錬金』を試してみたが、掛かっている固定化の魔法が以外に強力で効き目が無かった。

まだゴーレムで宝物庫の壁を力づくで破壊する、と言う奥の手があるのだが、宝物庫の壁は以外に厚そうだった。

ゴーレムでも破壊できない可能性が残ってる。ゴーレムを出してしまつたら恐らく学院中の教師が集まってしまう。

下手すると獲物を盗みだせぬまま、学院に居られなくなる、若しくは捕まる可能性がある。やり直しは聞かないのだ。下手な博打は出来ない。

何かもう一つ、決め手となる何かが必要だ。残念だが今日のことろは様子見だ。などと思っていると、

ドッゴオオオオン！

宝物庫のある本塔の外壁が轟音を立てて爆発したのだ。一体何が起こったのか。

見ると学院の女生徒数人が中庭で杖を振るっていた。恐らく魔法の練習でもしてたのだろうか？だがこんな爆発する魔法は見た事無い。

だが、今の爆発で、歯が立たないと思っていた宝物庫の壁に亀裂が入る。どうするべきか。

思いがけず、宝物庫の壁にひびが入ったが、優秀な土メイジの揃っている魔法学院では翌日には修復されてしまっている。

思いも拠らぬ突破口の開けた今しかチャンスは無い。

フーケは意を決してゴーレム練成の呪文を唱えた。

それにしても何故、こんな爆発が巻き起こる事となったのか。

話はルイズ達が街で買い物を終えた時まで遡る。

「ちつ、あの小僧め。安く買い叩きやがって。ま、いいや。これであの忌々しいデル公を厄介払いできた」

エリオ達が去った後、武器屋の店主はそんな事をほざいていた。

実はあのデルフリンガーという剣、この店の店主にとってとはんだ厄介者で、そのひねくれた性格と毒舌で、客に喧嘩は売る、他の商品にケチはつけるはで、店の売り上げを落としていたのだ。

エリオの安すぎる値切り交渉に応じたのも、体のよい厄介払いだった訳だ。

で、まんまとあのクソ剣を馬鹿な客に押し付けてやったと喜んでいる所へ次の客がやってきた。

それがキュルケだった。

「ねえ、今の客、どんな剣買おうとしてたの？」

店主がキュルケに最初はシユペー卿作の剣を買おうとしてた事、でもそれを取り止め、錆だらけのボロ剣を買っていった事を教えるとキュルケはほくそ笑む。

「ねえ、さつきここに来た子が買わなかった剣って、おいくら？」

「新金貨で三千になりやす」

金貨三千、結構な額である。成る程、だからルイズは買うのを止めたのか。購入を止めさせたのが当のエリオだと言う事を伝えられてないキュルケは一人勝手に納得した。

しかし、キュルケも貴族とはいえ一回の学生である。経済事情はルイズとそんなに変わらない。そこで、キュルケは一計を案じた。

「ねえ、物は相談なんだけど、もう少しお安くならないかしら？」

店主はうんざりしたような顔でまたかと思った。本日二人目の値切り客、しかも立て続けである。さっきの時は厄介払いを兼ねていたので値切りを渋々受け入れたが、店一番の業物まで値切らせる訳にいかない。

「勘弁してくださいや。それを買叩かれたら商売上がったりでっせ」

すると、キュルケはそれがさも当然であるかのごとくカウンターに腰掛けた。

「ななな、なにを」

「あついわね、シャツを脱いじゃおうかしら。よろしくて?」

そう言うときュルケはブラウスのボタンを一個外す。するとキュルケの豊富なバストがそれだけで服からはみ出そうになった。勿論、大事なところは見せないが。

すると店主は鼻の下を伸ばして自分の言葉を訂正する。

「ね、値段を間違えておりやした。二千五百で」

「お高くありません?」

「え、ああ、さようで。では二千・・・」

するとキュルケは下着を見せないようにスカートを捲り上げ、内太ももを見せた。

「五百よ、五百でしょ?」

完全に気が動転した店主は、色香に釣られて遂に決定的な事を口にしてしまう。

「へ、へいへい、五百で」

それを待ってた様にカウンターから降り、500とかかれた小切手を切る。小切手に数字を書く暇は無かったのもう書かれてあるところを見ると最初からこの値段で落とすつもりだったらしい。

「買ったわ」

キュルケはそう言い残して店のドアから立ち去ってしまう。

「し、しまったあああつ!」

店主は力を落として床に倒れ伏せる。

彼にとって今日は厄日だった様だ。

「全く、ご主人様の言う事を聞いておけばそんな気色の悪いものかわずに済んだのに」

ルイズはエリオ、キャロと連れ立って歩きながら愚痴を溢していた。

「そんなに気色悪いなら、今からでも返品してきましようか？」

「駄目よ、ご主人様を無視して、勝手な事した罰よ。ずっとそれ背負っていなさい」

「扱い辛い人ですね。貴方は」

『おい、テメエラ。人を掴まえて随分な事抜かしてくれるじゃねえか』

「何言ってるのよ。その口の悪さが無くてもアンタみたいな錆だらけのボロ剣、本当なら買わないわよ。引き取ってもらえるだけ有り難く思いなさい」

『何だと、もういつペン言ってみろ。てめえ』

「何よ、あんまり口答えするなら土メイジに頼んで溶かして貰うわよ」

さつき、罰で背負ってると言った先からこれである。

『おお、上等だ、やってもらおうじゃねえか』

「なんですって」

『やるか』

「結局、何のために買ったんです？この剣」

「・・・少なくとも口喧嘩の相手で無い事だけは確かよ」

ルイズはそのまま押し黙ってしまった。

(ストラダ、さっきのルーンの事だけど、一体、あれはなに?)

(恐らくはあれも、使い魔の素体となった者の戦闘力サポートの為の機能だと思われます。どうもこのルーンは素体となった者の戦闘力を向上させる様に作られてる様です。)

(戦闘力向上?あれが?)

(さつきはあのような局面なので、武器の品質の鑑定という事になりましたが、恐らく、本来は戦闘時に効果的な武器の使用法を使用者に伝える為のものだと思われれます)

(それで、武器をスキャンした訳か。でも、このデルFRINGガーとか言う剣の時はこの剣が喋るまでインテリジェンスソードだという事が解からなかったよ。今だってこの剣の良し悪しが解からないし)

(それは私の様にスキャンをブロックしてると思われれます。このデルFRINGガーという剣本人がそれを意識してるかどうかは解かりませんが)

(ブロックって、そんな高等な事してるとは思えないけど)

(エリオはこの剣を過小評価してるようですが、この剣はエリオが思っている程、大した事が無い訳では無いと思われれます)

(まさかこの剣が?)

(そもそも、ブロックが掛かっているという事は・・・)

(ブロックして隠すようなものがあるという事?)

ストラダの指摘はもつともだが、エリオはともこの剣にそんな隠す様な事があるとは思えなかった。

『・・・い、おい相棒』

「な、なに一体・・・」ストラダと念話で会話していた所へイキナリデルFRINGガーが話しかけてきたのであればあの悪い返事になった。

『な、なに、さつきから押し黙っているんだ?』

「べ、別に」どうやら流石に念話機能までは無かった様だ。

「それより、その相棒っての止めてくれない?僕は君とそんなものになった覚えは無いよ」

『な、に言ってるやがんでえ。おめえ「使い手」だろ?「使い手」

ならやつぱり「相棒」じゃねえか』

「『使い手』?」

デルFRINGガーのいう事がエリオには解からなかった。

学院に戻ってくるとキュルケが例のシュベール卿作の剣を持って待っていた。

「何です、これ？」

「プレゼントよ。剣も女もゲルマニアに限るわねえ。そう思わない？ エリオ」

「どう言う意味かしら？ ツエルプストー」

「こんな剣も買ってあげられないなんてルイズも甲斐性ないわねえ」

「つけて来たって訳？」

「私はエリオが喜びそうなものを買ってきただけよ」

「悪いですが僕はその剣要りません」

「ええっ、なんでよ」

「そもそも僕は元々剣が欲しかった訳じゃありませんし、街でその剣の購入を断ったのは僕です。それにその剣は実戦には使えないナマクラですし、何より一応ルイズさんの使い魔という事になっている僕が貴方にそんな高価な物を買って頂く理由がありません」

エリオはきっぱりキュルケの申し出を断った。エリオにしてみればこの間の騒ぎのそもそもの原因は彼女が作ったのだから無理もない。

「そんなあ。折角貴方の為に買ってきたのよ」

「でも、武器として使えませんし」

「武器として使えないならインテリアとして部屋に飾って置くだけでも」

「僕は召喚されてから自分の家も部屋もありませんが」

「いい加減にしなさいよ、ツエルプストー。エリオは要らないって言ってるのよ」

「なによ、アンタには言っていないわよ、ヴァリエール。私はエリオに言ってるのよ」

「大体ねえ、飾るつたつて此処は私の部屋なのよ。なんで私の部屋にツエルプストーからの贈り物なんか置かなくちゃいけないのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」両者の間に沈黙が広がる。

「あたしね、以前からアンタの事、嫌いだったのよね」

「あら、奇遇ね。あたしもよ」

「「決闘よ！」」

だが、キュルケについて来ていたタバサが口を挟んだ。

「どうやって？」

いくらなんでも、ヴェストリの広場でギーシュとエリオがしたみたいに直接やりあうのもどうか。

「そーねえ、怪我してもつまらないし」

「うーん」

（キャラ）急にエリオが念話で話しかける。

（なに、エリオ君）

（逃げるよ）

（逃げるって・・・）

（何だか知らないけど嫌な予感がしてきた）

（わ、わかつたわ）

二人は、音を立てないよう、抜き足差し足でその場を離れようとした。

「エリオ！」

後ろからの声に二人の足がピタッと、止まる。

「なんですか？」

「エリオ、二人してどこへいくのかしら？」

「ちよつと、用事を思い出しまして」

「使い魔に御主人様の知らないどんな用事があるのかしら？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エリオは言葉に詰まったが、途端に脱兎の如く一目散に逃げ出した。

「にげたわ！」

「待ちなさい！エリオ！」

ルイズとキュルケも物凄い勢いで後を追う。

一人だけキャラクがその場に置いてけぼりになる。

「あ、あれ？みんな行っちゃった何処まで逃げたんだろ……」

とにかく、後を追おうとしたその時、デルフがキャラクを呼び止める。

『おい、嬢ちゃん』

「な、なに？」

『俺を置いてくな。俺も連れてけ』

とにかく、キャラクはデルフリンガーを胸に抱えてエリオ達を探して外にでる。外はもう夜だ。

中庭に出るとキャラクは異様な光景を見る。

「な、何、あれ」

なんとあろう事か、エリオが縄で縛られて、学院の塔の上から吊るされていた。

「はあ……」

吊るされてるエリオは度々腹を立てるのも馬鹿らしくなったのか、半分諦めているようだ。

中庭に居たルイズ達は、それぞれ杖を構えていた。

「いい？先にロープを切った方が勝ちよ。いいわね？」

「わかっているわ、さつさと始めるわよ！」

すると、ルイズとキュルケは呪文を唱え始める。

「ファイヤー・ボール！」

なんと二人はは吊るされてるエリオに向かって、魔法を放つたのだ。

キュルケの呪文は炎の玉となって飛んで行き、ルイズの呪文は火の玉にならずに爆発を引き起こす。

「うわああああっ！」

どっちの魔法もかろうじてエリオへの直撃を免れたようだ。

「ちっ、外したわね」

ルイズの魔法は外れたばかりか塔の外壁に大きな亀裂を作る。

「ちよっと、学校の建物壊してどうするのよ」

「わ、わざとじゃないわよ」

あまりのメチャクチャな有様にキャラロがルイズ達に尋ねる。

「な、何してるんですか？」

「「決闘よ！」」

その台詞にキャラロの頭は混乱する。

これの何処が決闘なのか、どう見てもエリオをリンチか処刑しようとしてる様には見えない。

その疑問をキャラロが口にする、ルイズは言った。

「吊るされてるエリオのロープを先に切ってエリオを助け出した方が勝ちになるのよ」

それを聞いてキャラロは怒りが湧き上がってくるのを感じた。

「いい加減にしてください！エリオ君に何かあったらどうするんですか！」するとタバサが言う。

「心配いらない。ロープが切れたら私がエリオをレビテーションで受け止める」

「そういう問題じゃありません！」キャラロはそんな事で引き下がらない。

「もし、魔法がエリオ君に命中したら、死んじゃいます」

本当は、ベル方式やミッド式には系統魔法には無い防御魔法があるのだが、今のエリオは平民という事になっていて大っぴらに魔法を使えない。

キヤロの思いも抛らぬ迫力に流石のルイズとキュルケも相手が平民だという事も忘れてたじろぐ。

「わわわ、わかつたわ」

「勝負じゃなくて、今すぐにエリオをおろすわよ」

その時だった。突如中庭に、30メートルはあろう巨大なゴーレムが現れた。

「なっ、何よ。あれ！」

「ゴーレムよ！30メートルはあるわ」

「ルイズさん！キュルケさん！あれはどういう事ですか！？」

「ししし、知らないわ！」

「私たちの系統じゃ、ゴーレムは作れないわよ」

「じゃ、一体誰が？」

「まさか、『土塊のフーケ』」

「なんです、それ？」

「最近、国中を荒らしまわっているそういう名の盗賊がいるのよ」
「ゴーレムはエリオの吊るされてる本塔の壁を鉄に変えた拳で殴り始めた。」

このままではいつ殴りつぶされるかわからない。

（フリード！エリオ君のロープを噛み切って！早く！）

（わかつた！）

フリードはエリオの元に飛んでいった。

「いけない、このままじゃエリオが危ないわ！」

突然の事にあせるキュルケ。そんな彼女を他所にルイズがゴーレムの前に躍り出る。

「私が相手よ！」

ルイズはファイヤボールの呪文を連発するが、それは火球にならず、爆発となって炸裂した。

しかし、相手のウエイトが大きすぎる為、それは大してダメージを与えなかった。

「無茶です！早く逃げないと」

キヤロはルイズの腕を取って安全なところまで引っ張っていきこうとする。

「邪魔しないで！これはチャンスなのよ！」

「チャンスって何のですか？」

「あいつを何とかすれば誰も私をゼロと呼ばなくなるわ！」

「それどころじゃありません！死んだら元も子もないんですよ！」

「あ、ちよつと……！！！」

キヤロはルイズの言い分を無視してそのままルイズを引っ張って行った。

エリオは吊るされた状態で何とかゴーレムのパンチをかわしていたが、ゴーレムの狙いはさっきのルイズの魔法が作った亀裂であるようだった。

運の悪い事にエリオはその亀裂の前にぶら下がっているのだ。

「このままじゃ、潰される！」

どうすればいいかとあせっていると、何かエリオのロープを齧っているのを感じた。フリードだった。

「フリード、すまない」言葉こそ通じないがエリオはフリードに礼を言う。しかし、次のパンチが来るまでに間に合いそうもない。

「悪いけど、フリード、急いでくれ」

だが、まだ時間が掛かりそうだ。

ぐずぐずしてる内にとうとう次の攻撃がきた。

ゴオオオオオオン！

「もう駄目か！」顔を背けるエリオ。

「「エリオ！」」

「エリオ君！」

パンチが叩き込まれた、と思った瞬間、何か光った様な気がした。

「え、エリオは？」 誰もがエリオの無残に潰された姿を想像した。
「エ、エリオ……」 恐る恐るエリオの方を見る。
だが、エリオは無傷だった。

「よかった……でもなんで？」

エリオはとつさにシールドをゴーレムの拳より直径を小さくして展開したのだ。

それで、何とかシールドを見られずにすんだ。

「でも、いつまでもこれで防ぎきれない」

しかし、ようやくフリードのおかげでロープが噛み切られそうだが、ゴーレムも再びパンチを繰り返そうとする。

「くっ、もう少し……」

そんな僅かな望みを叩き潰すかの様にパンチがはなたれる。

ドゴオオオオオン！

「エリオ君！フリード！」

「エリオオオオオッ！」

キャロとルイズの叫びがこだまする。

次の瞬間、外壁には大穴が開いていた。

「ま、まさかそんな……」

「エリオ君……」

二人はあまりの結末に啞然としていた。そのときキュルケがゴーレムの足元に気付く。

「あ、あそこ！」

みると、ゴーレムの足元にエリオはいた。何とか潰される前にロープを噛み切るのが間に合ったのだ。

フリードもロープを切った後、なんとか避けたようだ。

キャロとルイズはそれぞれその場に座り込む。

「よ、よかった……」

二人とも安堵のため息を漏らす。

「それにしても、タバサも流石ね。偶然ロープが切れたのを見逃さずに『レビデーション』でエリオを受け止めるなんて」

キウルケがさも、当然そうに褒めちぎる。

「私、唱えてない」

「またまた、冗談でしょ。あの高さから魔法無しで無事な訳が……」

「本当」

「嘘、そんな事が……どういう事？」

無論魔法で着地したのだ。エリオもキャロも陸戦魔導師、飛行魔法のスキルこそ取ってはいないが、高い所から転落した時に、無事着地する『高所リカバリー魔法』なる物があるのだ。でなければ危なくて、フリードに乗って戦えない。

「くツ、間一髪」

なんとか着地してエリオは立ち上がる。

「フリード、助かったよ、ありがとう」

フリードはそれに応えて頷いた。

「それにしてもこのゴーレムは一体……」

そうして見上げるとゴーレムの肩から誰かがゴーレムの開けた本塔の穴に飛び移るのが見えた。

「今のは一体……」

ゴーレムで強引に開けた穴から宝物庫に入ったフーケは、宝物の中からかなり長大なケースと指輪を納めて置くような小さな箱を選び出した。

「これが、『生者の杖』と『災いの石』かい。ちよろいもんだね」
フーケはそれぞれのケースを開けると中を確かめた。

「エリオ、たった今ロストロギア反応を感知しました」ストラ
ダが告げる。

「え、じゃあまさか、あのゴーレムが……」
『いいえ、反応はたった今侵入者のあった、あの建物からです』
「でも、今まで此処にいて何も感じなかったのに、何故急に？」
『恐らく、魔力反応を遮断するケースの様な物に収められていた
と思います。その反応が今消えました。ケースが閉じられた様です』
「まさか、こんな所にロストロギアがあつただなんて。しかも、
何者かわからないけどそれを奪おうとしている者がいる」
エリオは本塔に向かって走り出した。本塔の階段を駆け上り、宝
物庫へ向かう。

(キヤロ、聞こえる？あの塔の中にロストロギアがあつたよ)
(うん、エリオ君、こつちでも感知したよ。それから、あのゴー
レムを操ってるのは『土塊のフーケ』って名前の盗賊だつて)

(『フーケ』？それがあの進入者の名前なの？)
(うん、キユルケさんが教えてくれたよ。最近、この国を荒らし
まわっているんだつて)

(キヤロ、今その『フーケ』が進入した建物はなんなの？)
(ちよつとまって、いま尋ねてみる)

キヤロはキユルケ達に尋ねる。
「今、『フーケ』が入り込んだ建物は何なんです？」

「あそこは学院の本塔だけど……確か学院の宝を収めてある宝
物庫があつた筈よ」

「そういえば『生者の杖』と『災いの石』と言う珍しいマジック
アイテムが保管されてるつて聞いた事があるわ」

(……だつて、エリオ君、解かった？) キヤロは耳で
聞いた事が直接念話でエリオに伝わる様にしていた。

「『生者の杖』 『災いの石』 そのどちらかがロストロギア……
……」

念話の内容を咀嚼しながら階段を駆け上っていたエリオはようや
く宝物庫のある階まで到達した。

だが、時既に遅く、フーケと思しき人影が壁の亀裂から逃げ去るところだった。

「あつ、待て！」

すぐ壁の亀裂に駆け寄るが、フーケはゴーレムに乗って学院の本塔を離れてしまった後だ。

ゴーレムの肩にそれらしきフード付きのマントを纏った影が見える。

(キャロ、フリードで後を追えない？)

(今は無理だよ。ルイズさん達が居るし)

『 エリオ、追っても無駄です 』

「 なんて？ はやく捕まえないと逃げられてしまうよ 」

『 あのゴーレムの肩の人影ですが、サーモグラフを調べると体温がまったく感知できませんでした。人間では有り得ません 』

じゃああれは一体、そう思っていると、誰かが口笛を吹いた。

すると、どこからとも無く青い竜が飛んできた。エリオ達はその竜に見覚えがあった。以前キャロに餌を分けようとして喋るのを見破られた竜である。

飛んできた竜は降りてくるとタバサを背に乗せて飛び立った。

「 あの竜はあのタバサって人の使い魔だったのか 」

タバサは使い魔の竜
シルフィードに乗り

ゴーレムの後を追った。

「 シルフィード、追いつける？ 」

「 お姉さま、 『 追いつける？ 』 は無いのね。あんなの全然楽勝なのね 」

「 急いで 」

シルフィードはそのままゴーレムの行き先を追う筈だった。

だが、暫くしてその異変は起こった。

学院を遠く離れた所で、ゴーレムは歩きながらも形が崩れ始め、やがてそのまま完全に崩壊してしまった。

シルフィードは崩れたゴーレムのそばへ降り、シルフィードから降りたタバサはゴーレムに乗っていたフードの人物の所に駆け寄った。

タバサがそのフードを剥ぎ取ると、中身は人型に固められた土の塊だった。

フーケはゴーレムの一部の土を自分の身代わりにして、自分のフードを被せたのだ。

「これは……」

しばらくしてシルフィードに乗ってタバサが戻ってきた。

「タバサ、フーケは？」

「駄目、ゴーレムは困」

「やられたわね」

それを見てルイズが呟く。

「あのタバサが簡単に欺かれるなんて」

「エリオ君……」

「まさかこの世界で管理局員としての任務をする羽目になるなんてね……」

二つの月が辺りを照らすなか、先程の騒ぎが嘘の様に静寂が辺りを包んでいた。

第9話 強奪（後書き）

さて、果たして、

『生者の杖』『災いの石』とは？

そして、果たしてどちらがロストロギアか？
次回に続きます。

第10話 盗賊（前書き）

いつもより短い筈ですがいつもより時間が掛かってしまいました。
10話目行きます。

第10話 盗賊

翌朝、魔法学院は大変な騒ぎになった。

なにしろ、『ゴーレムで力任せに建物を破壊する』と言う手段で学院の秘宝が盗まれたのだから。

宝物庫の壁には『「生者のつえ」「災いの石」確かに頂戴致しました。土塊のフーケ』と魔法で刻まれていた。

学院長室には学院の教師が何人が集まっていた。

「衛兵は何をやっていた！」

「衛兵など所詮は平民、当てになるものか。それより昨夜の当直は誰だ？」

「確か、昨夜の当直はミス・シュヴルーズ、貴方ではありませんでしたか？」

これでは緊急会議と言うより、ただの責任の擦り合いである。しかし、名指しされた当人は振るえあがった。

その当直のミス・シュヴルーズは事件の起きた時、当直室で居眠りをしてたからだ。

「ももも、申し訳ございません！」

「謝って済む問題ではありませんぞ！それとも、貴方が『生者の杖』と『災いの石』を弁償できるんですかな？」

はつきり言って、ロストロギアの事を知る者が聞いたら呆れる発言である。

ロストロギアの盗難は金で弁償すれば済む問題では無い。危険物が犯罪者の手に渡った、という由々しき事態なのだが。

若い男性教諭がシュヴルーズに詰め寄る。

「わ、私、この前家を建てたばかりで……」

「これこれ、女性をそんなに苛める物では無い」

そういつて場を収めたのは遅れてやってきたオールド・オスマンだった。

「学院長先生！」シュヴルーズが泣きそうになりながら名を叫んだ。

「確かゲドー君と言ったかの？」

「ギドーです、お忘れですか、学院長」

「そうそう、ヒドー君じゃった」

「私はサルガツソのワルガイア三兄弟かつ！って、絶対ワザとやってるだろアンタ！」

「何でそんなモン知つとんじゃ……」

「……」いやそれはアンタもだろ。

「……話を戻すぞい。この中で当直を真面目にやった事のある教員はどれだけおるかね？」

オスマンが尋ねると教員達は誰もが目を背けた。誰も真面目に当直をやった物はいないと言う事か。

「……ま、こんなモンじゃよ。この中の誰も、わしも含めて誰も魔法学院が襲われるとは夢にも思わなかった。優秀なメイジが揃った魔法学院に乗り込んでくる賊などおらん、と驕っておった。それこそがこの様な事態を招いた訳じゃな。言ってみれば、これはわし等全員の責任じゃ。」
と言う訳でミス・

シュヴルーズ一人を攻めるのは無しじゃ

「おお、オールド・オスマン、ありがとうございます」

シュヴルーズ女史はオスマンに感謝の言葉を述べた。

「で、フーケの犯行を目撃したのは誰じゃね？」

「この三人です」コルベールがさつと進み出て後ろに控える三人を指差した。

三人とはルイズ、キュルケ、タバサの事である。無論、エリオとキヤロもあの場に居たのだが使い魔なので人数に数えられていない。

「では、その時の事を説明してくれんかな？」

その言葉に従い、ルイズが説明をはじめた。

「魔法の練習をしていたら突然ゴーレムが現れて本塔の壁を壊し始めたんです」

実は自分達があほな魔法勝負をして壁に亀裂を入れた事は言わない。

「肩の上に乗っていた黒いメイジが宝物庫の中へ入って行って、それを見たあたしの使い魔が本塔の階段を昇って宝物庫のある階まで昇っていきました。」

その台詞を引き継ぐ様にエリオが証言する。

「僕が宝物庫に辿りついた時、フーケと思しき人影は壁の亀裂から出て行くところでした。結局取り押さえる事は適いませんでした。」

「それで、その後はどうしたね？」

喋るのが苦手な親友タバサに代わってキュルケが証言する。

「ゴーレムが城壁を越えて外に逃げ出しました。タバサが使い魔の風竜で追いましたが、ゴーレムはある程度歩くと次第に崩れてしまったそうです。肩に乗った筈の黒いメイジも影も形も無かったそうです」

「つまり、手掛かりは無しと言う訳か」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そのまま、場は沈黙してしまった。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたね？」

「そういえば・・・・・・・・朝から姿が見えませんか」

「この一大事に一体どこ行つとんじゃ？」

「どこ行つたんでしょ？」

そんな風に噂しているとミス・ロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル、どこ行っていたのですか？大変ですけど、事件ですぞ」

コルベールが興奮した調子で捲くし立てるが、ロングビルは落ち

着き払った態度でオスマンに告げる。

「申し訳ございません。朝から急いで調査しておりましたもので」
「調査？」

「はい、今朝方、起きたらこの騒ぎではないですか、そして宝物庫はこの通り。壁にフーケのサインを見つけたので、国中を騒がせる噂の大盗賊の仕業と知り、すぐに調査に取り掛かりましたの」

「流石じゃ、ロングビル仕事が早いの」

「で、結果はどうなんですか？」

「はい、フーケの居場所が解かりました」

「な、なんですよ！」

「ロングビルが素っ頓狂な声を挙げてるのを無視して、オスマンが尋ねた。」

「誰に聞いたんじゃね？ミス・ロングビル」

「近在の農民に聞き込んだところ、近くの森の廃屋に黒ずくめのローブの男が入っていくのを見たそうです。恐らくそいつがフーケで、廃屋はフーケのアジトではないかと」

するとルイズが叫んだ。

「黒ずくめのローブ？それはフーケです。間違いありません」

オスマンは目を鋭くしてロングビルに尋ねる。

「そこは、ここから近いのかね？」

「はい、徒歩で半日、馬で四時間といった所でしようか」

「すぐに王室に報告しましょう！王室衛士隊に頼んで兵隊を差し向けてもらわなければ」

「ロングビルは叫んだ。しかし、オールド・オスマンは首を横に振る。」

「ばかもの！王室なんぞに知らせている内にフーケは逃げてしまおうわ！それに、身に降り掛かる火の粉を己で払えぬようで、何が貴族じゃ！魔法学院の宝が盗まれた！これは我らの責任じゃ！当然我らで解決する！」

誰も気付かなかつたが、その台詞を聞いてミス・ロングビルは何

故か微笑んでいた。

オスマンは軽く咳払いをすると叫んだ。

「これより捜索隊を編成する。我と思う者は杖を掲げよ！」

しかし、教員は誰も杖を掲げようとしないう。各々が困った様に顔を見合わせるばかりである。

「おらんのか？おや？どうした。フーケを捕らえて名を上げようと思う貴族は誰も居らんのか！」

この流れを見て、ルイズはチャンスだと思った。ここで手柄を立てれば『ゼロ』の汚名を返上できる。

だから名乗りを上げようと思った。だが、そんなルイズよりも先に思いも寄らぬ人物が名乗りを上げた。

「えっ！？」

なんと、エリオとキャロが、杖では無く手を掲げていた。

もつとも、それぞれ二人が掲げている左手と右手にはそれぞれ収納形態のストラダーダとケリユケイオンがはまっているのでデバイス杖と解釈すれば杖を掲げている事になるかも知れないが、此処にいる誰もその事を知らないし、本人達にもその積もりは無い。まさかデバイスを掲げる訳にもいかないので代わりに手を掲げただけだ。

「ちよっ！なんであんだ達、手を上げてんのよ！」

ルイズの台詞に加えて、ミス・シュヴルーズもいう。

「そ、そうですよ、貴方達は使い魔で、しかも平民ではありませんか！」

「使い魔が盗賊退治をしちゃいけませんか？」

「当然だ！平民風情がでしゃばるな！」

口を挟んだのはさつきシュヴルーズを責めていたギドーだった。

「平民の分際で手柄でも上げる気か！」

「僕はそんな物に興味はありません」

「なら、平民がフーケを捕らえてどうするつもりだ！」

エリオ達にしてみれば、単に時空管理局員としての使命を果たす

だめに過ぎなかったのだが、まさかそんな事を正直に言う訳にも行かない。

「単に正義感を達成するためじゃいけませんか？」

「ふん、そんな事を言つて大方隙を見て秘宝を持ち逃げして雲隠れでもする腹積もりなのだろう。全く、平民とは浅ましいものだ」

「……」ギドーのいう事を認める訳ではないが反論の言葉が出ない。少なくともこんな事を任せてもらえるだけの実績がここでは無いのは確かだからだ。

「何だ、その目は！」

「ミスタ・ギドー！二人は私の使い魔です。いくらなんでもあんまりではありませんか！」

ギドーの暴言に反論したのは意外にもルイズだった。

ギドーは言つてしまつてから相手がヴァリエールに使える使い魔だと気づき内心しまったと思つた。

しかし、言つた以上、言葉を引つ込めようも無いので、相手が魔法も使えないルイズだという事もあり、開き直る事にした。

「誰かと思えばるくに魔法も使えぬヴァリエールの三女か。そういえばこいつらはお前の使い魔だったな。全く主が主なら使い魔も使い魔だな。全く録でもない」

「いくら、教師といえどその暴言はあんまりでしょう」

「フン、だつたらどうする？公爵家の権力で俺をクビにでもするか？さぞ噂に昇るだろうな。使い魔の躰けも録にできんのを棚に上げて、貴族の癖に魔法も録に使えん娘が親の権力で八つ当たりして教師をクビにした、なんて話しはな」

「え……いえ、そこまでするつもりは……」

流石のルイズもこの段階でそこまで強硬な態度に出る積もりはなかった。と、いうよりこんな事を先回りされて相手に言われてしまつと、万が一本当に後で相手をクビにするような事態にまで事がエスカレートしたとしてもプライドが災いしてクビに出来なくなつてしまつ。

「そこまでするつもりがなければなんだ？え？」

「そ、それは……」

「そこまでにしとかんかい。馬鹿者」

調子にのったギドーをオスマンがたしなめる。

「『平民の分際でしゃばるな』なんて台詞は貴族の務めをキチンと果たした者の台詞じゃ。『貴族の癖に』杖を掲げなかつたモンに、平民ながら勇敢にも名乗りを上げたヴァリエール嬢の二人の使い魔を扱き下ろす資格はないぞい」

「で、ですが学院長、平民風情が分不相応にも貴族の領域に踏み込んでくる様な事を認めていては……」

「頼もしいではないか。それともなにか？お前さんは杖を揚げなかつた様じゃが、そこまで言うからにはお前さんがフーケを捕まえに行ってくれるんかい？」

「い、いえ……」

結局ギドーはそのまま口を噤んでしまった。

「じゃが擁護しといて何じゃが、お前さん達二人を行かせるのはワシとしても認める訳にはいかんのう。天下の魔法学院が平民二人に盗賊退治を押し付けた、とあつては面子に関わるし、一応お前さん達はヴァリエールの嬢ちゃんの使い魔じゃしのう」

「あ、あの学院長、その事なんですが」ルイズがオスマンに申し出る。

「私がフーケを捕らえに行きます。使い魔が行くと言ってるのに私が行かない訳には行きません！」

「それこそんでも無いですよ、ミス・ヴァリエール。あなたは生徒ではありませんか！ここは教師に任せて……」

ミセス・シュヴルーズがルイズをたしなめる。

「教師の方々は誰も揚げないじゃないですか」

するとキュルケも杖を揚げた。

「ヴァリエールには負けていただけませんわ」

更にタバサもその長い杖を掲げた。

「ちよつとタバサ！貴方は揚げなくていいのよ」

「心配……」

もつとも、その言葉と裏腹にタバサの思惑は別にあつた。友人を心配しての事だったのも本当だったが、実のところ、エリオとキヤロがどうする積もりなのか見届けたいというのが本音だった。

ルイズ達の申し出を受け、オスマンは言った。

「そうか、ならば任せるとしようか」

「な、なんて事をおっしゃるのです、オールド・オスマン。こんな危険な任務を生徒達に押し付けるなんて」

「なら、君が行くかね？ミセス・シュヴルーズ」

「い、いえ……私は体調がすぐれませんので……」

「彼女達は賊を見ておる。しかもここに居るタバサ嬢は若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いておるが？」

それを聞いてエリオとキヤロ以外のその場に居た一同が驚いた顔でタバサを見る。親友のキュルケも驚いていた。

「本当なの？タバサ」

王室から与えられる爵位としては最下級の『シュヴァリエ』であるが、タバサの年齢でそれを持つ事は驚くべきことだ。

男爵や子爵なら領地をかうことで手に入れる事も可能であるが、

『シュヴァリエ』だけは違う。

純粹に業績に対して与えられる爵位………実力の称号である。

オスマンはそれからキュルケを見る。

「ミス・ツエルプストーはゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出身で、彼女自身も強力な火のメイジだと聞いておるが」
キュルケは自慢げに髪をかき上げる。

するとルイズが今度は自分の番だとばかりに胸をはる。

オスマンは何故か目を逸らしながらコホンと咳払いをする。

（エリオ君、なんだかあの学院長って人、何だか困っているみたいだけど）

(まさかと思うけど、褒める所が思いつかないから今考えてるんじゃない)

実はその通りだった。しかしルイズが期待してるため、何か言わないとカツコがつかない。

「その・・・ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール家の息女で、その、うむ、なんだ・・・将来優秀なメイジと聞いているが、しかもその使い魔は」

視線をエリオに向ける。

「何でも平民でありながら、あのグラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘して勝ったという噂じゃ。フーケ相手にも決して遅れは取るまい」

すると、コルベールが興奮した調子でその後を続ける。

「そうですね、何しろ彼らはあのガンダー・・・」オスマンは慌ててコルベールの口を手で塞いだ。

「むぐっ、はっ、いえ何でも有りません！はい！」

なんだ、今、何を言いかけたんだ？エリオは変に思いながらもオスマンに聞き返した。

「ですがさつき僕たちが行くのは認められないと言いませんでした？」

「主の意向を無視して使い魔だけを行かす訳にいかん、という意味じゃ。お前さん達の主が行くと言うなら問題あるまい」

流石に自分達だけでは行かせて貰えないと思っではいたが、出来る事ならロストロギアの一件に他者を関わらせたく無い所だった。しかし、これも仕方が無い。

オスマンはルイズ達に向き直り、言葉を掛けた。

「魔法学院は、諸君の努力と貴族の義務に期待する。君達に安全と平和があらん事を」

ルイズとキュルケとタバサは直立して同時に唱和する。

「杖にかけて！」

「……つたく、あんたたち御主人様を差し置いて勝手な事をするんじゃ無いわよ！そんなに出しやばらなくても、使い魔なんだから御主人様が行く事になれば一緒に行く事になるの！」

「……すいません」

理由をいう訳にもいけないので、とりあえず素直に謝る。

結局、ルイズ達学院の生徒達も来る事になってしまった。キャロと二人きりならあの巨大なゴレムも一撃で撃破する方法があるが、ルイズ達が一緒となるとミッドチルダの魔法を使う訳にはいかない。しかし、それならそれで、やりようはある。学院だってなんの考えも無しにあの三人をフーケ討伐に出した訳では無いだろうし（実は後でこの期待は裏切られる事になるのだが……）用は口ストロギアさえ封印できればいいのだ。

となると、今さしあたっての懸念は……

（あのコルベールって先生はさっき何を言いかけたんだろ？）

（だしか『ガンダー……』とか言ってたような……）

（なんの事だろ？）

（その事です）

ストラーダが念話に割り込んできた。

（ストラーダ、何かわかるの？）

（恐らく、エリオの左手のルーンの事では無いかと推測されます）

（うん、そうかなあ？）

（あの時の話題の内容はかいつまんで言えば、フーケなる賊と生徒を戦闘させて問題ないか、でした。その流れの中でエリオとギーシュの決闘の話が出てきた訳です）

（うん……）

（あのコルベールと言う教諭はその後を受けて件の『ガンダー……』と言う単語を持ち出してきました。話の流れから考えると、こ

ここで語られるべきは平民と思われるエリオがギーシュに勝てた理由になる筈です。だとすれば彼は問題の左手のルーンの事について語ろうとしていたと思われます)

(でも、あの時、学院長はそのコルベル先生の話を途中で口止めてみたいんだけど、何か知られて困る話だったのかな?)

(これ以上は推測の域を出ない話なので何とも言えません。ただそのルーンには何か我々の知らない秘密があるのは間違いないでしょう)

(じゃあ、私の右手のルーンにも何か秘密があるのかな?)

(その可能性はありますね)

言われて見ればあの学院長とコルベルの二人は何か知ってて隠してる様だった。後で自分とキャロのルーンの事を訊ねて見ようとエリオは思った。

「そういえばルイズさん、さつきは庇ってくれてありがとうございます」

エリオはさつきギドーと一触即発になりかけた時、助け舟を出して繰れた事に礼を言った。

「別に礼を言われる事じゃ無いわ。使い魔の不名誉はそのまま御主人様の不名誉でもあるのよ。当然でしょ」

その言葉を聴いてエリオ達は何だかいたたまれなくなった。エリオ達にしてみれば今回は素直に感謝したから礼を述べたのだが、それを『使い魔だから』『御主人様だから』と言う事にシフトされたのではやりきれない。上下がある間柄でも、感謝を言い合う事はあっても良いと思うが……。実際、六課はそうだったのだ。

「あつ、そうだ。エリオは当然ついて来て貰うけど、キャロは残りなさい。留守番よ」

「えっ?何ですか?」

「エリオと一緒に手を揚げちゃって、その意気込みは買っけど、あんた戦えないでしょ?」

「そんな事ありません!私も行かせてください!」

「駄目よ、メイジじゃないのが来ても足手まといよ」
それを聞いてたキュルケが口を挟む。

「あら、一番の足手まといが何いつてるのかしらあ?」

「誰が足手まといよ!誰が!」

これは思わぬ事になった。考えてみればエリオはギーシュとの決闘で実力を示したが、キャラの力は誰も知らないのだ。

「ルイズさん、僕からもお願いします。キャラも一緒に連れてって貰えないでしょうか?彼女の力も必要なんです」

「あのね、物見遊山に行くわけじゃないのよ。連れて行く訳にはいかないわ」

「でも!」

「だめよ!これは決定よ!あんた達は使い魔なんだから大人しく言う事を聞いてればいいの!遊びじゃないんだからね!遊びじゃ!この話はこれで終わりよ!」

エリオ達だって遊びの積もりではない。ロストロギアの封印は時空管理局・局員としての使命なのだが、エリオ達が何者か知らないルイズはキャラまで来るのは遊び半分としか思えなかった。

「どうしよう、エリオ君。私、一緒に行けないよ」

「うん、困ったなあ」

本当に困った事になってしまった。ロストロギアの封印措置が行えるのはキャラだけなのだ。エリオは封印措置の技能を持っていない。

キャラがついてこれないとなるとロストロギアの封印が出来なくなってしまう。

果たしてどうすればいいのか?

二人は途方に縲れてしまった。

第11話 捜索(前書き)

遅れてすみませんでした。第11話いきます。

私の前書き、遅れたお詫びばかりだ・・・。

第11話 搜索

「どうしよう・・・・・・」

エリオとキャラロは互いに顔を見合わせて溜め息をついていた。

トリステイン王国を騒がせる盗賊、『土塊のフーケ』そのフーケが魔法学院から奪っていった宝物がロストロギアだと解かった。

エリオとキャラロは管理局局員の使命として、ロストロギアを封印する為フーケ捜索に加わろうとしたが・・・・・・。

ルイズにキャラロだけ留守番を言い渡されてしまったのだ。

ルイズはキャラロの同行を遊び半分と決め付けていたが、もちろん遊びなんかではない。

キャラロが同行できないと『ロストロギアの封印』という二人の目的が果たせなくなってしまったのだ。

ロストロギアの封印措置の魔法は二人のうち、キャラロしか持っていないからだ。

フーケのあの巨大ゴーレムを撃破できる二人の合体魔法が使えなくなるという問題もある。

戦闘を回避できない可能性は大きいが、何も無理に戦う必要はない。用はロストロギアさえ封印できればいいのだ。

どうせ、ルイズやキュルケたちが同行する以上、彼女達の前で大っぴらに魔法は使えない。

なら、彼女達にフーケのゴーレムに対処する自信があるなら任せてしまえばいい。

だが、ロストロギアの封印はそうはいかない。

件のロストロギアは封印されていない状態で宝物庫に保管されていたらしい。

ハルケギニアの人々はロストロギアの事を知らず、封印の為の魔

法も存在しない可能性がある。

つまり今ハルケギニアにはキャロしかロストロギアを封印できる者はいないのだ。

無論、戦う必要が無いならロストロギアを持ち帰ったルイズ達を学院で待つてるといふ手もある。

だが、ロストロギアかも知れない物品は一応、魔法学院の所有物という事になっている。

取り戻された宝物を一介の使い魔でしかないキャロに触らせる道理は無い。

キャロは指一本触れないまま、ルイズ達の手から直接学院に返却されてしまう可能性が高い。

いずれ、管理局から迎えが来た時に学院に事情を話してロストロギアを引き渡して貰うにしても、それまでは学院の宝物庫で保管して貰わねばならない。

だが、封印措置を施さぬままのロストロギアをそのまま宝物庫に放り込んで置くのは危険すぎる。

封印できるチャンスはフーケから取り戻した直後、現場でしかないのだ。

もし、この機を逃せば、今度は自分達が盗賊の真似をしてロストロギアを持ち出す羽目になる。

フーケの一件でより、警備の厳しくなった学院の宝物庫で、フーケの様な派手な手段は使えない隠密性を要求される難易度の高い状況である。

「そんなにその娘を連れて行きたいの？」

悩む二人にそう声をかけたのは青白い髪眼鏡の少女、タバサだった。

はつきり言って彼女から声を掛けられるのは二人にとって、意外だった。

今まで、キュルケに引き連れられる形で何度か顔を合わせているものの、言葉を交わすのは初めてだった

ルイズと仲の悪いキュルケと親友であることもあって、タバサはルイズとあまり接点が無いためだった。

「貴方は確か、タバサさんと仰いましたね。僕らに何か用ですか？」

「その娘と一緒に連れて行きたいなら、方法が無い事もない」
「え……………」

そんな方法が有るなら願っても無い事だが、なんでそんな話を彼女が持ちかけてくるのか解からない。

「話を聞かせて貰えますか？」

「条件がある」

「条件…………ですか」

「訊ねたい事が三つ」

厄介な話だ。質問の内容によっては困った事になる。

「訊ねたい事？」

「一つは、何故その娘を連れて行きたいのか？」

……………もう一つは貴方達は何者なのか……………

……………最後は何故私の使い魔が韻竜だと解かったのか？」

一・二番目の質問はエリオ達にとって厄介な質問だった。

二番目は一番伏せて置きたい質問なのは当然だが、一番目も厄介だ。二番目を説明しなければ説明できない事だからだ。

だが、三番目が意味が解からない。

（どうしよう…………この人私たちの事何か気づいてるみたい）

（まだばれた訳じゃないよ。とにかくもう少し話を聞いてみる）

エリオはとにかくタバサともう少し話をする事にした。

「質問に質問を返すようで悪いんですが、僕たちが何者か、とはどう言う意味です？」

「錬金の授業の時、貴方達は見た事も無い魔法でルイズを爆風から守った。私、見てた」

あの時、咄嗟の事で後先も考えず飛び出し魔法を使ってしまったが、他の生徒は爆風から避難する為机の下に隠れるのに必死である時の事を見ていない。

当の本人であるルイズ本人も気付いていないため、誰にも気付かれていないと思ったのだが……。

(まさか、あの時の事、見られてたなんて……)

(うん……でもなんでその事誰にも話してないんだろ？他に知られたらもっと騒ぎになっていると思うけど)

「それを聞いてどうするつもりですか？」

「別にどうもしない。ただ知りたいだけ」

ストリートに伝えられてしまった。

(どうする？こんな事言ってるけど……)

(……こうなったらこの人に打ち明けてみよう)

(ええっ？そんな事して大丈夫なの？)

(下手に隠して詮索されるより、打ち明けて口止めした方が秘密を守り易いとおもっ。キャラの事もあるし……)

(でも、この人の言う、あたしが一緒に行く方法って……)

(わからないけど……話を聞くだけ聞いてみよう)

こういう時、念話は便利である、小声でひそひそ話などしたら相手に隠し事があるとばれてしまうが、念話なら内緒話してる事自体悟られずに済むからである。

「わかりました。他言しないと約束してくださいならその疑問にお答えします」

だがエリオはタバサの要望に応えたはずなのに、何故かタバサは不思議そうな顔をする。

「……？、もしかして、言葉を交わさずに仲間内で意思を伝え合う魔法とかがある？」

「えっ？何故そんなことが……」

これにはエリオ達は驚いた。自分達の事を打ち明ける事にしたか

ら問題ないとはいえ、まだ何も話していない。まさか念話を傍受できる力がある？

「もし、貴方達に私の想像通り貴方達に隠し事があるなら、それは貴方達にとつて何が何でも隠さなくてはならない秘密である筈。それを貴方達は互いに耳打ちすらせず、打ち明ける事を決めた。貴方の性格からしてそんな大事な事を彼女に相談せずに決めるような独裁者とは考えにくい」

鋭い、あれだけのやり取りでそれを見抜くなんてかなりの洞察力だ。無理に隠し立てしない事に決めて正解だった、と言う所か。

「質問に答える前にもう一つ・・・聞いていいですか？」

「何？」

「韻竜つて、何ですか？」

「・・・」

流石のタバサもこの相手からこんな基本的な質問が返って来るなと思つてなかつた。

エリオは自分達がこの世界の人間では無い事、この世界で使われている魔法とは違う魔法の使い手で有る事、元の世界では時空管理局と言う組織に属していた事、その時空管理局が管理していた『ロストロギア』と言う危険なアイテムの事、盗まれた学院の秘宝がそのロストロギアである可能性があり封印できるのがキャロだけである事、などを話した。

「・・・信じられない」

「・・・それは無理も無いでしょう。でも何かあると思つてわざわざ聞き出すとするぐらいだから理解の範囲を超えた話が出てくる事ぐらい予想していたんじゃないですか？」

「・・・確かに・・・でも此処まで想像しがたい話とは思わなかつた」

ここまでこの世界の人達にとって理解を超えた話になるのは異世界ゆえの文明レベルの差から来るのだが、こんな言われ方をするとなんだか自分達を含めたミッドチルダそのものが非常識で異常な世界である様に聞こえる。

「ところでまだ最後の質問に答えてもらってない……」

そうだった。『韻竜』と言う単語の意味をそもそもエリオ達が知らなかった為、まずそこから説明してもらわなければならなかったのだ。

「その事は多分、僕たちよりもむしろ、あなた方この世界の人達の方が知っているとと思います」

「どう言う意味？」

その言葉にキャラロが答える。

「貴方の使い魔の竜……シルフィードと仰いましたか、が喋れる事が解かったのは、あたしが動物の言葉が解かるからなんです。学園で出会った色々な動物が人の言葉であたしに話しかけてくる、なのにあのシルフィードと言う竜は何故か『言葉』では話しかけてこない、だからあの竜は喋れない振りをして本当は喋れる事を隠そうとしてる事が解かったんです」

「ですが、キャラロは元々こんな能力は持って無かった筈なんです。少なくともこの世界に召喚されるまでは。元々彼女は自分の使役竜であるフリードの言う事が理解できるそうですが、言葉として伝わる訳じゃないそうです。ところがこちらに来て急にフリードの言う事が『言葉』として聞こえる様になったそうです。それだけじゃなくフリード以外の動物の言う事もわかる様になったと」

「……貴方達の元々持っていた力ではない？」

「違います。すべてここに来てから急に現れた力です。何か知りませんか？」

「多分、コントラクト・サーバントの影響。契約を結ぶと使い魔によつては特殊な能力に目覚める事がある」

「やっぱり……」

多分、そんな事じゃないかと思っていた。

「使い魔の特殊能力は術者が決められるんですか？」

「………使い魔が選べないのと同じ、どんな能力が身に付くかは決められない」

そうなるといよいよ変だ、動物に施す為の魔法で身に付く能力に何故『武器の解析』なんて物があるのか。

とにかく、これ以上彼女に尋ねても詳しい事は解かりそうもない。彼女も一介の生徒に過ぎないのだ。

「さっきの話、解からない事がある」

「なんですか？」

「何故、この娘でなければいけないの？魔法学園にはもっと頼りになるメイジがいる。この学園の教師達に任せればいい」

「多分、この世界の魔法ではどうにも出来ないでしょう」

「何故？」

「あの宝物庫に収められてるロストロギアには見事なまでに手が付けられてませんでしたから」

「どう言う意味？」

「宝物庫の防犯措置はあれだけ厳重なのに、ロストロギア自体には何の魔法的措置もとられてません。ロストロギアの魔力がこの世界の魔法使いに手に負えない、と言うよりそもそもマジックアイテムの機能そのものを凍結して機能を停止させる『封印』という行為自体がこの世界の魔法には無いんじゃないやありませんか？」

「そういえば、聞いた事が無い」

エリオに言われてタバサはそんな魔法が無い事に気付く、そもそもマジックアイテム以前に普通に呪文を唱えて使う魔法の効果を取り除く魔法が、発想としては有り得るのに何故が存在していない。魔法によっては正反対の効力を持つ魔法をぶつけて『相殺』させる事はあっても（例えば火の魔法に水の魔法をぶつけて消すとか）どんな魔法でも解除できる魔法なんてのは見当たらない。ましてや、アイテムに掛かってる魔力を消すことも無く押さえ込むなんて魔法

が有るわけもない。

他人の掛けた魔法をそこまで自在にコントロールできるならタバサ自信がそれを使っている。

「そんな訳で多分、この世界の人達にロストロギアの封印は多分出来ないんだと思います。どうか協力してもらえませんか？」

タバサは少し考える。

もし、エリオ達という通り盗まれた宝物がそんな危険なアイテムなら一大事だろう。そんな危険なアイテムが賊の手にあるというのも大変だが、『封印』しないと暴走するというのも大変な事だ。

しかし、危険なアイテムと言うのはともかく、『封印』の事もそれが出来るのがキャラだけと言うのも、エリオが勝手に言ってる事だ。果たして信用していいものか。

だが、自分の方から彼らに接触したのは、エリオが指摘したとおり彼等を見てて何かあると思ってる事。その上で彼らが何やら困っているのを見て話し掛ける気になったのだ。自分から訊ねておいて疑うのも変だ。

それにもし本当に彼らが『マジックアイテムの封印』と言うこの世界には無い魔法を行うというのであれば、ひよっとしたら自分が抱える問題を解決するヒントになるかも知れない。

もし、彼らが自分達を騙してる、と言うならそれはその時に考えればいい。

「わかった、貴方達に協力する」

「ありがとうございます。それでキャラが同行できる方法ってなんでしょうか？」

「……それは」

タバサは自分が思いついた事をエリオ達に説明した。

一時間後、ルイズ達は馬車に乗ってフーケの隠れ家に向かう事になった。

案内も兼ねてミス・ロングビルが御者を務める。無論、馬車の上にエリオの姿はあっても、キャラの姿は無い。

「ミス・ロングビル、何故、自分で御者を？手綱なんて付き人にやらせればいいじゃありませんか」

キュルケは疑問に思ってた事をロングビルに訊ねてみた。

「私は貴族の名をなくした者ですから」

「だつて貴方はオールド・オスマンの秘書なのでしょ？」

「ええ、ですがオールド・オスマンは貴族、平民という事にあまり拘らない方ですから」

「差し支えなければ、事情をお聞かせ願えませんか？」

ロングビルは困った様な笑顔を浮かべる。

「ちよつと、ツエルプストー」ルイズが口を挟む。

「なによ、ヴァリエール」

「あんまり人の過去を根掘り葉掘り利くモンじゃないわよ」

「それもそうね、ごめんなさいね、ミス・ロングビル」

「いえ、いいのです。お気になさらないでください」

そんなやり取り横目で見ながら車上から見える風景を目で追っていると背中に掛けてあるデルフリンガーがエリオに話し掛けてきた。

「よお相棒、あの嬢ちゃんとデートできなくて剥れるのはわかるがそうしよげるなよ」

「君は本当にお喋りなだけで何の役にも立たないんだね」

「なんでえ、随分言ってくれるじゃねえか」

「僕がキャラを連れて行きたいのはそんな理由じゃないよ」

タバサに自分達の事を話してる時、彼を所持してなくて良かった、とエリオは思った。

役に立たないどころか、ストラーダと違って口が軽そうだ。あの時の話をベラベラ誰かに喋られても困る。

ふと、ルイズの方に目をやると彼女は馬車の後ろ上空を眺めてい

たのでエリオはギョツとした。

「る、ルイズさん、な、何見てるんですか？」

エリオの言葉にキュルケがルイズの視線の先を見る。

「なんだ、シルフィールドじゃない」

ルイズはさつきからこれを見つめていたのだ。

「る、ルイズさん、タバサさんの使い魔がどうかしたんですか？」

「……はあ、やっぱ、使い魔はあんなのが良いわねえ。

平民とは大違いだわ」

なんの事はない。タバサの使い魔を羨ましがってるだけだった。

それを聞いてようやくエリオの緊張が解ける。

（キャラ、聞こえる？）エリオは上空のシルフィールドに向かって

念話を送る。

（うん、聞こえるよエリオ君）

誰一人気付く者として居ないが、何故かキャラの念話が上空のシルフィールドから返ってきたのだ。

（さつきは驚いたよ。ルイズさんがこっち見てるんだから）

（今のは別にキャラの事に気づいた訳じゃないみたい。でも気をつけてよ。キャラの姿がちょっとでも目に入ったら気付かれるかも知れないから）

（大丈夫、いざとなったらシルフィールドの背に隠れるから）

そう、実はキャラはシルフィールドの背に乗ってついて来ていたのだ。

タバサの提案はキャラがこっそりシルフィールドの背に乗りついてくる事だった。

「私はフーケの討伐に使い魔のシルフィールドを同行させる。馬車に乗せる訳にいかないから馬車の後方を空から付いて来させる。彼女はそれに乗って付いて来ればいい」

「あの・・・私はルイズさんに付いて来るのを禁止されてるんですけど」

「・・・だから黙ってついてくる」

「だけど姿を見られたら一緒ですよ」

「シルフィードにはなるべく高く飛ばせる。なるべく身を低くしてシルフィードの背に隠れるようにしてれば地上からは見られずに済む」

「良いんですか？僕らは一応ルイズさんの使い魔という事になってますけどそんな勝手な事して」

「多分、大丈夫」

エリオ達はタバサの人となりをよくしってる訳でも無いが一見真面目そうで物静かな彼女がこんな提案をしてくるとは思わなかった。てつきりルイズにうまく取り成して練れるものと思っていた。

しかし、いくらクラスメートの使い魔とは言え、こんな世話を焼く義理は無い筈。

ひょっとして、自分達が只者では無いと踏んで、何か貸しを作って置こうという事か？

こついうのは何かと面倒の種に成りかねないのだが今は背に腹は替えられない。ここは彼女の提案を受けておこうと思う。

「でも良いんですか？貴方の大切な使い魔をお借りしても」

「構わない・・・」

「解かりました。貴方の提案をお受けします」

そんな訳でキャロはシルフィードの背に乗ってついてくる事になったのだ。

だからさっきルイズがシルフィードの方を見た時、エリオはギクツとした。

だがルイズがさっき見上げたのは単にシルフィードが羨ましいだけだったようだ。

とりあえず一安心といったところか。

一方、こちらは上空のキャラ。

(・・・ねえ、フリード)

(何？キャラ)

(・・・まだ、怒ってる？)

(最初から・・・怒ってないよ)

(そ、そう・・・よかった)

だがその台詞と裏腹にフリードの声は怒っているのをキャラはヒシヒシと感じていた。

(やっぱ、怒ってるでしょ？)

(怒ってないよ)

そもそもフリードが何剥れているのかと言うと、無論フリードを差し置いてシルフィードにキャラが乗っているのが気に喰わないのだ。

「一体ソイツ、何言ってるのね？」シルフィードが背中中の乗客に尋ねる。

「私があなただに乗って居る事が気に入らないみたい・・・」

「ブヒヤヒヤヒヤヒヤ。こんなチビ輔が人を乗せるなんて無理なのね」

それを聞いてフリードが完全に切れる。

何を思ったかフリードは鼻先の角をシルフィードに叩き付け始めた。

「クフフフ、くすぐったいのね」

フリード本来の大きさならえらい事になったかも知れないが、この大きさでは撥っているのと代わらない。

そもそも、ルイズ達に気付かれ無い為に空から行くなら、わざわざタバサからシルフィードを借りずとも、フリードを元の大きさにして乗ればいいのだ。

こうして彼女の提案を聞いてみれば、なにも自分達の事を打ち明けてまで受ける事ではなかった様にも思う。

しかし、タバサが折角好意でシルフィードを貸してくれるというので断るのも気が引けるからと彼女に乗ることに決めたのだ。

流石にハルケギニアにも生き物の大きさを変える魔法は無いらしく、タバサはフリードが本当は大きな竜とは思わなかったようだ。

もっとも、よく考えて見ればタバサはキャロの事があるうと無かるうと、シルフィードを同行させた筈なので、

タバサとは無関係に元の大きさのフリードでキャロがついて行っただとしたら、タバサに同行して飛んでいるシルフィードに鉢合わせしてややこしい事になった筈である。

結果的にタバサに打ち明けてよかったのだ。

しばらくして今の大きさでいくらつついても無駄だと悟ったのかフリードはシルフィードに攻撃するのをやめた。

「アンタみたいなおチビがいくらつついてきても痛くも痒くもないのねえ」

その台詞を聞いてまたフリードがいきりたつ。

「ちよつ、ちよつとフリード、駄目だよ。喧嘩しちゃ。貴方もフリードを挑発しないで！」

「なんだか騒がしいわね」

「タバサ、あなたのシルフィードと違う？」

それを聞いてエリオは再びギクツとなる。

（キャロ、感づかれそうだよ。一体どうしたの？）

（それが・・・フリードとシルフィードが喧嘩を始めちゃったの）

（とにかくまずいよ。なんとか二人をなだめて、見つかったら）

（わ、わかつたわ）

「一体何騒いでんのかしら？」ルイズがフリードの方を見ようとする。

不味い、と思った。

「あ、あのルイズさん」

「何よ？」

「よく、知らないんですがフリーケってどんな奴なんですか？」

「知らないの？結構有名だと思うけど」

「すいません、この国の事は良く知らないもので」

エリオは何とかルイズにキャロの存在を悟らせないよう必死だった。

実際のところはエリオはフリーケについては事前に噂話をいくつか仕入れていてある程度知っていたのだ。

「ほらあ、もう少しで見つかるどころだったじゃない」

（ごめん、キャロ・・・）フリードは素直にあやまった。

「あゝらら、叱られてるのね。まったくこれだからチビはしょうがないのね」

問題はこいつである。

「貴方もよ、シルフィード」

「ふゝんだ、アタシは悪くないのね」反省の色が見られない。

「・・・そう、なら・・・」

「あんまり騒ぐようならタバサさんに言いつけて叱ってもらおうか」

「！」

流石のシルフィードも自分の主の名前を出されて一瞬固まった。

恐る恐る、下界に目をやると、タバサが馬車の上からシルフィードの事を見上げていた。

その表情はいつも通りの無表情そのもの。別に普段と変わっていない。

しかし、シルフィードにはそれがタバサの無言の怒りの様に感じられた。

「わ、わかったのね。ごめんなのね。だからお姉さまに言いつけないでなのね」

ようやく静かになった。とにかくこれで何とか静かになった。

「それにしても・・・」キャラは空の上から周囲を見渡し考えていた。

シルフィードに乗って魔法学園を発つ時、改めて魔法学園の周囲を空から俯瞰して思った。

魔法学園って、周囲に何にも無いんだなって。

周囲にはただ、広い平原があるだけで民家とか殆ど無い。

そして、学園からここまで来るのにも殆ど民家を見かけなかった。そんな光景を見ると、ふと素朴な疑問が湧き上がってくる。

(エリオ君、聞こえる?)

(何、またフリードとシルフィードが何か?)

(ううん、今思ったんだけど、魔法学園の周囲って何も無いんだね)

(・・・それがどうかしたの?)

(あのロングビルって人、どうやって土塊のフーケのアジトを突き止めたのかな?)

(どうやってって、聞き込みって言ってたけど・・・)

(魔法学園の周りって民家が殆ど無いのにどうやって誰に聞き込みするの?)

いわれてみればその通りだった。

あの時、フーケはゴーレムを囮にして逃げた。

フリードを出せないキャラの代わってあの時タバサがシルフィードで追って行ったらしいが、ゴーレムにフーケらしき人影が乗っていた様に見えたのは話に拠るとタダの泥人形だったらしい。

ゴーレムは遠隔操作で動いていただけである程度学園から離れると魔力切れで勝手に崩れたらしい。

つまり、フーケは自分がゴーレムに乗って逃げた様に見せかけ、まんまとその目論見を成功させたのだ。

これはフーケが逃げた方向が本当はどの方向なのかわからない事

を意味する。

こうなるとフーケの搜索は全く白紙の状態から始めねばならない。これでは搜索範囲をある程度絞り込まないと探しようが無い。

そのためには地道な聞き込みしか方法しかないが、そもそも魔法学院の様な周囲に民家の一軒も無い所ではそれもやりようが無い。

つまりそもそも最初にどの方向に逃げたか解からなければ聞き込みもへつたくれもないのだ。

ミス・ロングビルは一体どうやって搜索範囲を決めたのだろうか？ 搜索範囲を絞らねば探すのに時間が掛かりすぎるし、ロングビル一人ではとても探しきれない。

時間がいくらでもあるのなら時間を掛けて居場所を突き止める事も不可能じゃ無いかも知れないが、彼女はフーケが現れたその晩の内に賊のアジトを突き止め、朝までに戻ってきたのだ。

いくらなんでも早過ぎる。

(確かに無理があるね)

(ねえ、エリオ君、これってどういう事かな?)

(思うんだけど・・・本当のところミス・ロングビルってひよつとして土塊のフーケと何処かで通じているんじゃないかな)

(まさか、そんな・・・)

(・・・いくらなんでもあれだけ大掛かりな犯行を何の下調べもなしにぶつつけ本番でやるのは博打すぎるよ。ある程度内情を把握してないと・・・)

(でも、学院長秘書とか言う立場の人が盗賊の手引きなんてする?)

(脅されてって事もあるかも知れない)

(でも、だとするとフーケって盗賊はわざわざロングビルさんを通じて搜索隊を自分の隠れ家に招き寄せてる事になるよ。何故そんな事する必要あるの?)

(うーん・・・)

(それについては推測が可能です)

ストラーダが念話に割り込んできた。

(ストラーダ、まさか『土塊のフーケ』の意図がわかるの?)

(おそらくは盗み出したマジックアイテムの使用法を知るのが目的ではないかと)

(使用法? どういう事?)

(フーケなる賊は恐らく盗み出したアイテムの使い方が解からなかったのです。そこでこのような茶番を仕組み、自分のアジトに学院の関係者をおびき寄せる事にしたんでしょう。本当ならこのような討伐任務は学園の教員が行くべきものですから)

(でも、僕らが名乗りをあげ、更にルイズさんが名乗りを上げた事で当てが外れたって事かな?)

(でも・・・だったらフーケはロングビルさんにアイテムの使い方を聞けばいいんじゃない?)

(学園長秘書だからって使い方を知ってる訳ないよ。盗まれたアイテムはロストログリアなんだから。学院長だって知らない筈)

(あ、そっか・・・)

(とにかくロングビルさんはフーケと繋がってる可能性が高いね。ロングビルさんの行動をそれとなく注意してみよう)

(うん)

さすがに二人とも機動六課の隊員だけあってなかなかするどかった。

しかし、二人はこの時ある思い違いをしていた。それがこのあとやっかいな事になるうとは・・・。

魔法学園を出発して3時間半程、一行の乗る馬車は森の入り口に付いた。

それを見て、キヤロは少し離れた所にシルフィードを降ろした。キヤロは着いて来ていない事になっているからルイズ達に気付かれない様にする必要があるからだ。

「ここでいいのね？」

「うん、私はここにいない事になっているから」

「あたしはどうすればいいのね？」

「タバサさんと何か合図は決めてるの？」

「口笛でお姉さまの元に駆けつける事になってるのね」

「じゃあ、上空で待機してて、タバサさんが貴方を呼び出すかも知れないから」

「キヤロはどうするのね？」

「見つからない様にエリオ君たちの後を追うわ」

「解かったのね」

シルフィードはそのまま空に飛び上がって行った。

「ずいぶん歩くのね」

ルイズ達は馬車を降りて森の中を歩いていた。

森の入り口からフーケのアジトだと言う場所までは馬車の入れない道だからだ。

「目撃者の話では、この小道の先の廃屋で、黒尽くめのローブを纏った男を見たそうですわ」

ミス・ロングビルが説明する。

しばらく進んで行くと開けた場所にで、ミス・ロングビルの言葉通りの廃屋があった。

「村人から聞いた情報では、あの廃屋に入るのを見たと言う話です」

ロングビルが廃屋を指差して言った。

「早速、踏み込みましょう」

早速ルイズが言い出すのが、ロングビルが内通してる可能性を想定していたエリオは冷や汗ものだ。

「ちよ、ちよっと待って下さい。中の様子が解からないのに、いきなり踏み込むのは無謀です」

「なによ、怖気づいたの？あんた誰よりも真っ先に自分からフーケ討伐に参加するって言い出したんでしょが」

「・・・そうじゃ無くて、中の様子を確かめてからでも遅くないと言ってるんです。何か罠が有るかも知れないし、第一此処がフーケのアジトだとしても今中に居る保障は無いでしょが」

「それもそうね・・・」

「宝物の奪還も任務だから何処にあるかも知れないとね・・・」

「でも、どうするの？」

「まず、僕が罠を兼ねて中の様子を見てきます。何か有ったら合図しますから皆さんたちは此処で待機しててください」

「・・・それしかないかしらね」

「ひよっとしたらあたりを潜んでいるかも知れませんが、私は辺りを偵察してきますね」

ロングビルはそう言うと、その場を離れ森の中に消えて行った。

「何処行くんだろ？ロングビルさん」

エリオ達の様子を遠くから見ていたキャラは一連の会話に加わって無い事もあって不思議に思った。

やっぱり自分達の推理は当たっていて、彼女はフーケに脅されて手引きしてたのか。だとしたらこれから彼女はフーケと落ち合う筈だ。

(エリオ君)

(なに、キャラ)

(ロングビルさんは何しにいったの?)

(この辺りを偵察に行つて来るって)

(でも、それって・・・)

(うん、僕たちの想像が当たってたとしたらフーケと落ち合う可能性は高いね)

(あたし、ロングビルさんの後を追つてみる)

(一人で大丈夫?)

(大丈夫だよ、様子を見るだけで手を出したりしないから)

(わかった、そっちは任せるよ。でも無茶はしないでね)

(うん、エリオ君も気をつけて)

そんな訳で、キャラ口は一人ミス・ロングビルを尾行する事になった。

ロングビルには気付かれない様に木の陰などに身を隠しながら後をつける。

なんとか気付かれずに尾行できてるようだった。

だが、後を追っていくうちにロングビルの姿を見失ってしまった。

「・・・しまった」

彼女の姿を見失ったとこまで来て回りを見渡してみるのが、ロングビルの姿を見つけれられない。

「ど、どうしよう・・・」

キャラ口は途方に暮れてその場に立ち尽くす。

すると、何かがキャラ口の足首を掴んだ。

「!?!」

キャラ口は自分の足元を見る、と足を掴んでいたのはなんと、地面

から生えてきた泥まみれの手だった。

「な、何これ!？」

気が付くと、もう片方の足も地面から生えてきた別の手に掴まれていた。

必死に足を掴んだ手を振りほどこうと試みるも、足を掴んだ手は思ったよりも力が強く、中々外れなかった。

突然、わが身を襲ったホラーな事態に、キャラがパニックに陥るのも無理からぬ事だった。

実は土系統のドットクラスの呪文に泥で出来た手を地面から生やして敵を拘束する『アース・ハンド』と言う魔法があるのだが、この世界のメイジで無いキャラには当然、知る由も無かった。

そうこうしているうちに、キャラの背後の地面にも泥の手が生えてきて、キャラの長いスカートを掴んでしまう。

「きゃ・・・」

強い力でスカートを引っ張られ立っていらなくなったキャラは、そのまま地面に仰向けに引き倒されてしまった。

地面が柔らかい土で助かった。もし、硬い岩盤だったら頭が割れてしまう所だったと思える程激しい勢いだった。

しかし、そんな事を良かったと思う暇も無く、地面に大の字に倒れたキャラの周りにいくつか手が生えて来て、キャラの両手、両足腰にわき腹と全身を掴みこんでしまい、瞬く間にキャラを取り押さえってしまう。

「う、動けない・・・」

キャラは何とか体を起こそうとするが泥の手はガッチリキャラの体を掴んで外れそうに無い。

そんな身動きできないキャラの顔を何者かが覗き込んできた。

「ふふふふ・・・」

「あ、あなたは・・・」

一方、廃屋の偵察を引き受けたエリオは、物陰に身を潜めながら建物の中に居るかも知れない何者かに見つからない様に廃屋に近づいて行く。

罾を警戒しながら窓の中から中の様子を伺うが、誰かが居る様子は無い。

誰も居ないと思ったエリオは意を決して中に入る事にした。扉には罾が仕掛けられているかも知れないので、窓から入る事にした。

窓から入ると中は静まり返っていてやはり誰もいなかった。

『なんでえ、誰もいねえじゃねえかよ』

エリオの背中に背負われていたデルフリンガーがぶつくさ言い始めた。ちなみにエリオはバリアジャケットを展開していない。

「ちよつと黙っていてくれない？どこにフーケが潜んでるか解かないから」

『そんな気遣いはいらねーぜ。こんな狭いボロ小屋にそうそう隠れるところがある訳ねえぜ』

確かにデルフリンガーの言う通りだが、用心するのに越した事は無い。

「・・・君を連れてきたのは間違いだっただかな」

『な〜に言つてやんでい。俺が居なくてどう戦うつもりよ』

「君が居なくても何とかなるよ」

ぎゃあすか文句をたれるデルフリンガーを無視して辺りを見回すと細長いケースのような物があった。

「ひよとしてこれが盗まれた秘宝？」

エリオはケースを開けてみた。

『なんだかヘンテコな杖だな相棒。これが「生者の杖」なのか？
だが、エリオはそんなデルフの問いに答えない。

『相棒？』

「これは……………」

エリオはケースの中にあつたその金属製に見える杖を見て絶句した。

（ストラダ、これ・・・）そばにデルフがいるので念話で話した。

（間違いありません。これはデバイスです）

そう、この世界の人間にはちよつと変わった杖にしか見えないが、その金属製の勺杖の様な形はまさしく発動状態のデバイスそのものだ。

（でも、デバイスなら普通、収納形態で保管されてる筈だよ。これはどう見ても発動形態。なんでこんな形でしまわれてるの？）

（どうやら、物理的な破損により、変形機能を含めたいくつかの機能が働かなくなつて居るようです）

（いったい、何が・・・）

そのとき、キャロから念話が送られて来た。

（エリオ君ごめん、捕まっちゃた）

（捕まつたつて、キャロ大丈夫なの？怪我とかしてない？）

（うん平気、それよりロングビルさんが・・・）

（ロングビルさんが何・・・）

そこまで念話で聞いた時、外からルイズ達の悲鳴がした。

「キャアアアアアアアアア！」

「ルイズさん!？」

あわてて外へ出ようとするたびルイズの声がした。

「エリオ!! 早くそこを出なさい!! 危ない!!」

「えっ!？」

どういう事かと思う間も無く天井を巨大な岩の拳が天井を突き破つてきた!

「うわああああっ!」

エリオは咄嗟に飛びのき、辛うじて潰されずに済んだが、小屋の半分程もある拳に小屋は半壊していた。

「こいつは・・・!!」

そこには魔法学院が襲撃された時と同じ巨大なゴーレムがいた。

第11話 捜索（後書き）

今回もまた遅れてしまいました。

しかも、今まで一番遅い……。

本当なら今後こんな事無いようにしますと書くべき所なのですが、これからも遅くなりそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5774k/>

ゼロと雷槍と竜使い

2010年11月4日19時08分発行